

396.8  
A83



3

0057236-000

396.8-A83ウ

戦車兵読本

浅井寿平・著

日本兵書出版

昭和17

AJF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

396.8

A83

著年壽井漢 佐少軍

# 戰車兵讀本

內案驗受兵車戰年少附

田神・京東

社會式株版出書兵本日



396.8  
A83

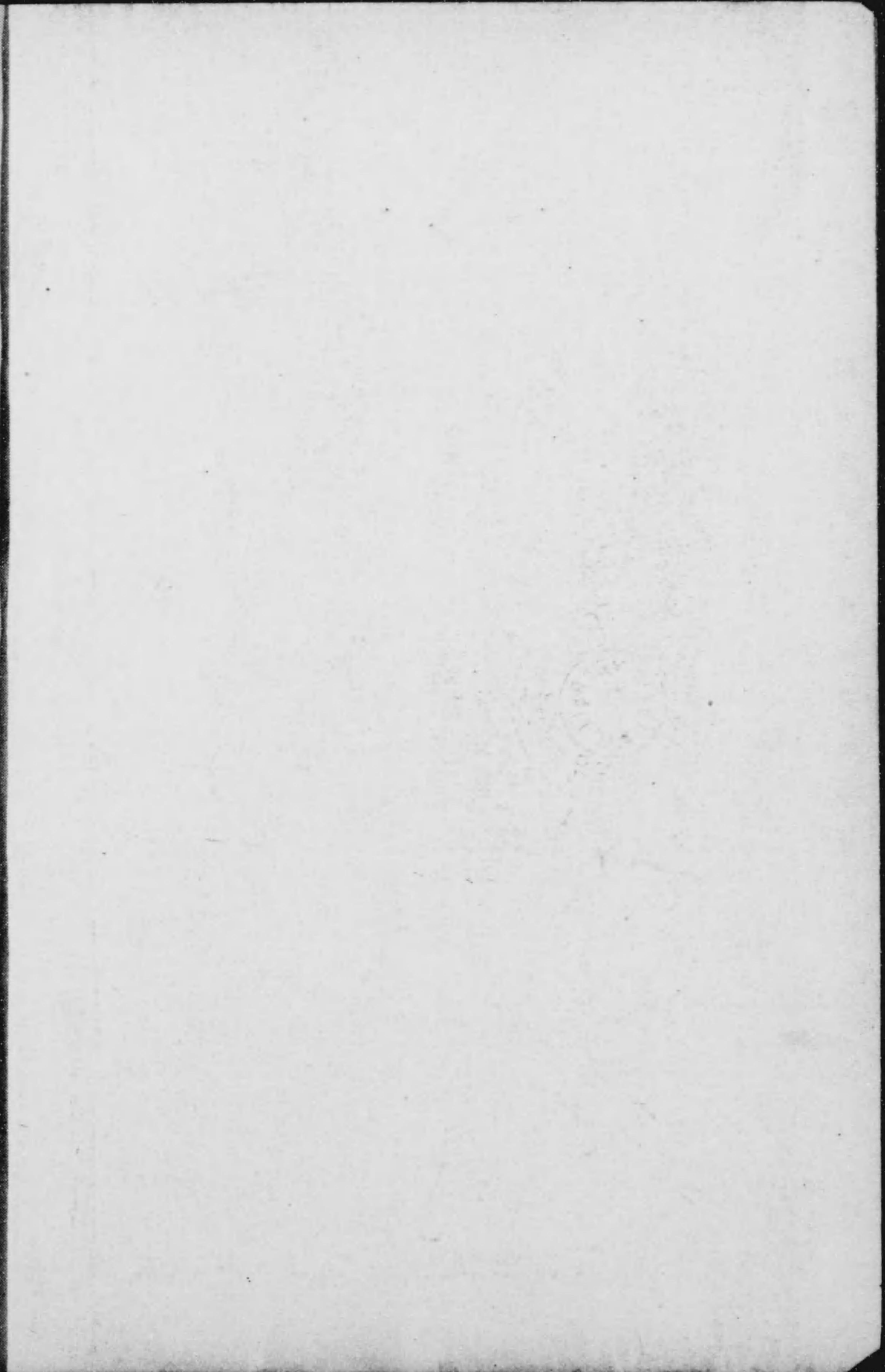


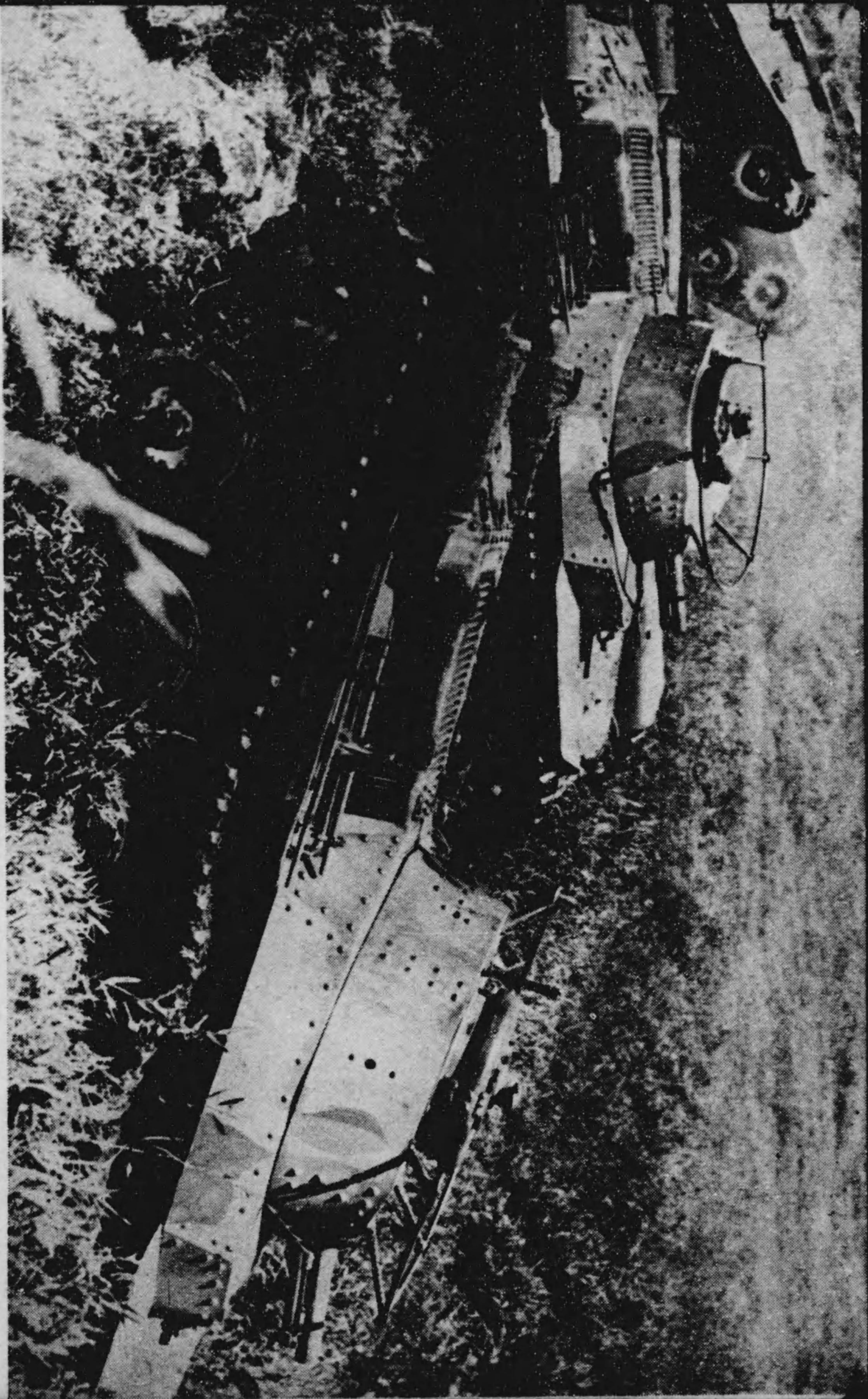
——本 讀 兵 車 戰——

著 平 壽 井 淺 佐少軍陸

——行發社會式株版出書兵本日・田神京東——

沼澤地帯を猛進する戦車隊

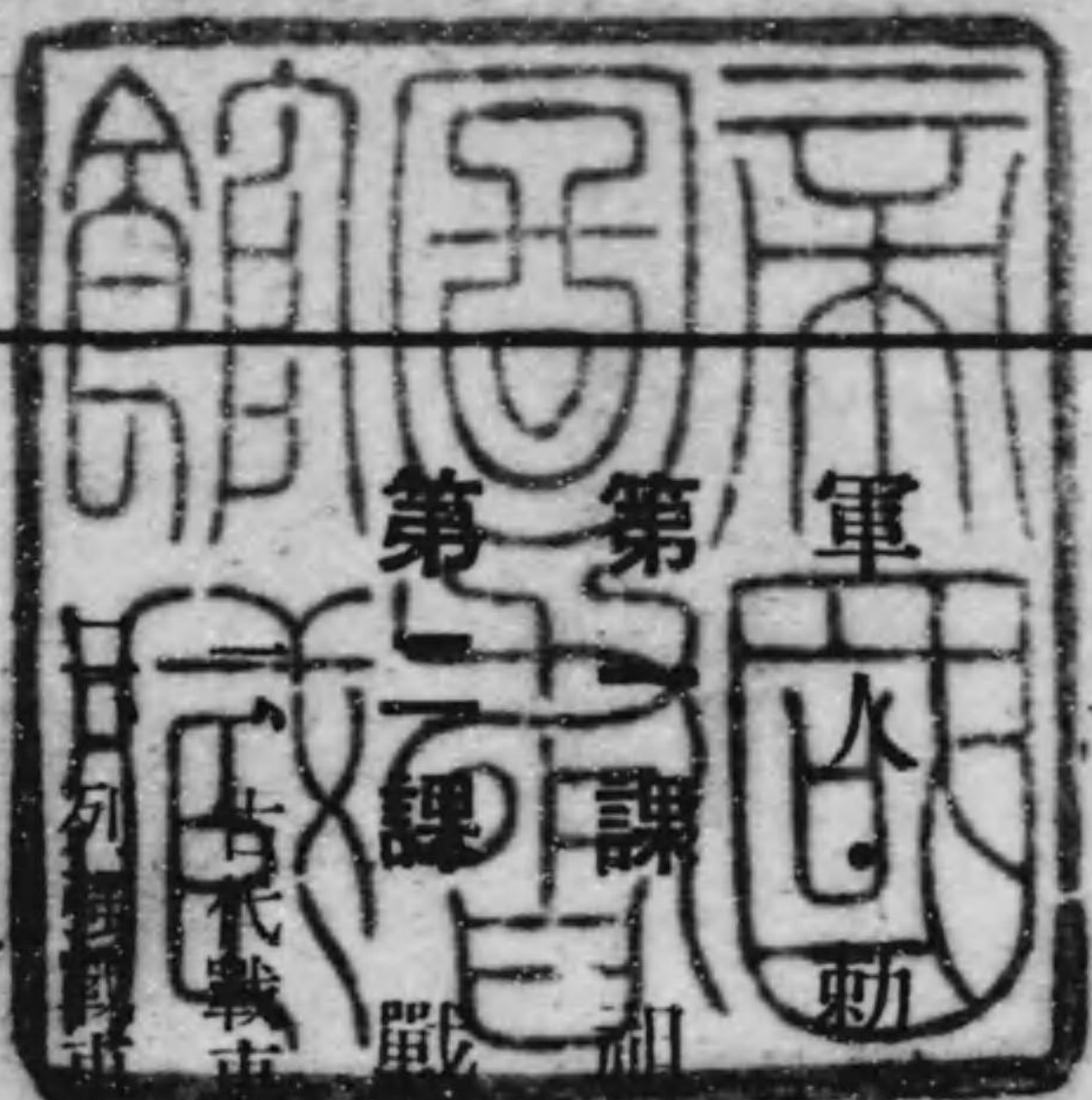




戦車兵讀本

## 戦車兵讀本 目次

軍人勲諭(衍義).....	一
第一課 祖國を護れ.....	三五
第二課 戦車の歴史.....	四〇
三、近代戦車の出現.....	四八
第三課 戦車の活躍.....	五一



一、滿洲、上海事變と戦車	五
二、我が熱河電撃作戦	五八
三、支那事變と戦車	六〇
今田戦車隊永定河に突入	六七
火だるま戦車の猛進	七四
張家樓家宅、西住戦車の奮戦	四
鐵牛部隊廣東進撃	九三
四、今次歐洲戦争と戦車	一〇一
ドイツ戦車のポーランド電撃	一〇一
マジノ要塞突破戦	一〇八
レニングラード獨ソ戦車の一騎打	一一六
第四課 戦車とはどんなものか	一二三

一、戦車の種類	一二三
二、戦車の用法	一二六
三、戦車の操縦	一三〇
四、無限軌道	一三五
五、戦車の装甲	一五九
六、戦車の武器	一六一
七、對戦車人工障礙	一六三
八、特殊戦車	一六五
通信戦車	一六八
水陸兩用戦車	一六八
工兵戦車	一六八
火焰放射戦車	一六八

煙幕展張戰車	一六八
輪送戰車	一六九
九、戰車の運動能力	一七〇
十、戰車の發動機	一七一
十一、戰車の行動範圍と速力	一七二
十二、戰車の戦闘と指揮	一七三
十三、戰車と航空機の共同作戰	一八二
<b>第五課 軍隊生活</b>	一八五
一、軍隊生活の基準	一八五
二、兵營	一八五
三、敬稱、稱呼	一八九

四、日常起居の心得	一八九
五、休日及外出	一九三
六、給與	一九六
七、進級	一九六
<b>第六課 刑罰</b>	二〇三
一、陸軍刑法	二〇三
二、陸軍懲罰令	二〇五
<b>第七課 兵器・被服の手入法</b>	二〇六
一、兵器の手入法	二〇六
二、被服の手入及名稱	二〇九
<b>第八課 軍隊内の衛生</b>	二一五



一、總説……………二五

二、衛生法……………二六

傳染病……………二六

流行性感冒……………二七

病氣になつた時はどうするか……………二八

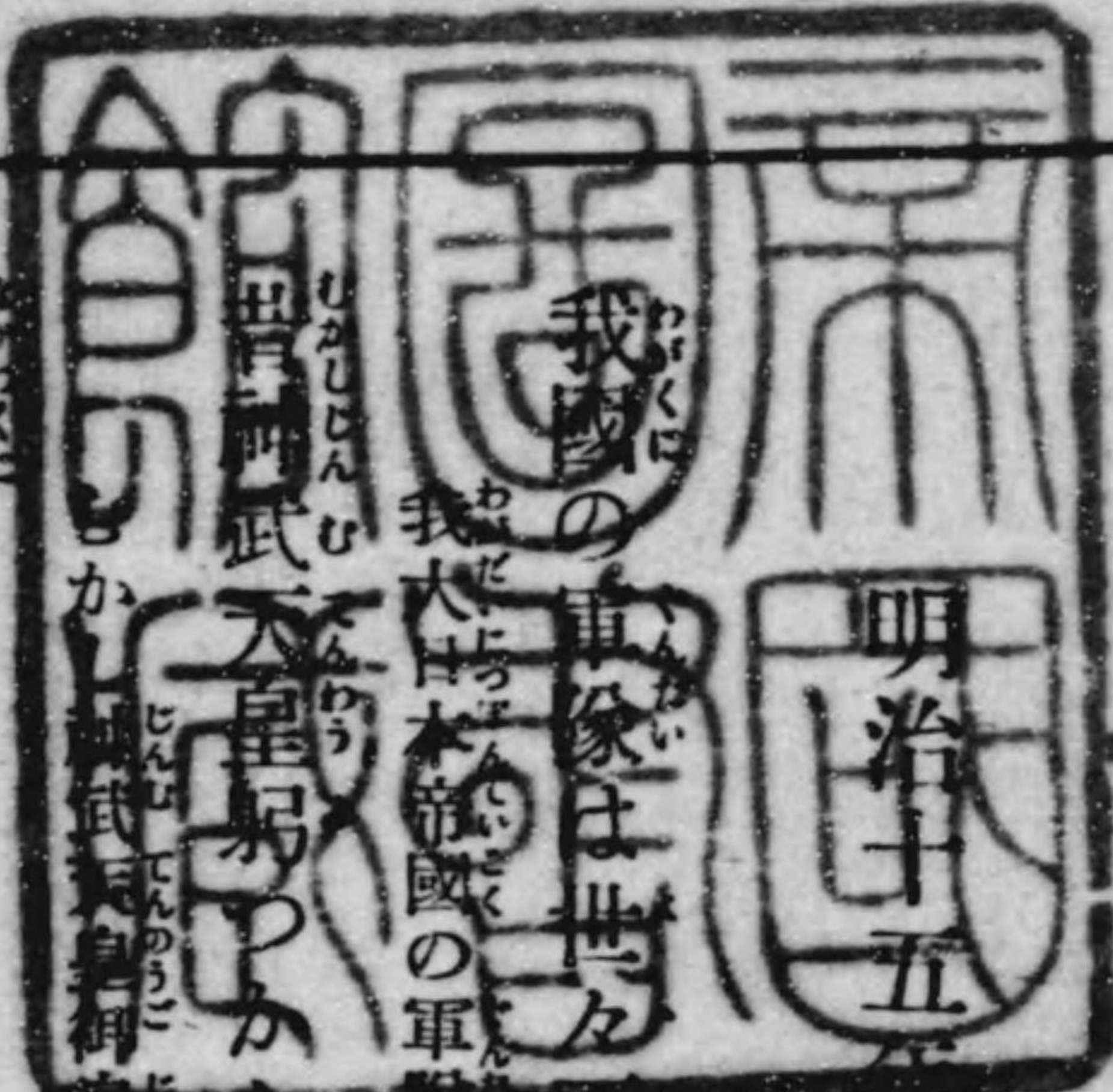
救急法……………二九

附録……………三三

少年戦車兵志願心得……………三三

少年戦車兵の手記……………三四

陸軍戦車學校入家試験問題及解答……………三五



勅諭 (衍義)

明治十五年帝國軍人に賜はりたる勅諭

我國の軍家は世々天皇の統率し給ふ所にそある

我大日本帝國の軍隊は代々の天皇陛下が之をひきゐ治め給ふところである

昔神武天皇躬りかち大伴物部の兵ともを率ゐ

か、武甕槌神自身に大伴物部などの兵隊の一族をおつれなされて

中國のまつろはぬものともを討ち平け給ひ

今日の京都、大阪、奈良地方に住んでゐたわる者共を討ち鎮め遊ばされ

高御座に即かせられて天下しろしめし給ひしより二千五百有餘年を

經ぬ

天皇の御位につかせられ我國をお治になるやうになつてから此方すでに二千五百餘年の永い年月が立つた

此開世の様の移り換るに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき

此年月の間の世の中の有様がうつり換るにつれ軍隊のおきての變つたことも亦度々であつた

古は天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ御制にて

昔は 天皇陛下御自身で軍隊をおひきになるおきまりであつて

時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと

時によつては 皇后陛下か或は 皇太子殿下が御身代りをなされたこともあつたが

大凡兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき

すべて軍隊をさしづする權力をけらいの者におまかせになることはなかつた

中世に至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ

中世の時代(大化の頃から武家の世となるまでの間)になつて國を治める役目の者、軍隊のことをつかさどる者等の規則が皆唐の國の物事にならせられて

六衛府を置き左右馬寮を建て

左近、右近、左衛門、右衛門、左兵衛、右兵衛といふ六つの兵事を治め扱ふ役所を置き、左馬寮右馬寮といふ馬のことを扱ふ役所を建てられ

防人など設けられしかは

わる者を防ぐ役人を設けられたから

兵制は整ひたれとも

軍隊のすべての規則はよく立直つたけれども

打續ける昇平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れければ

永年つゞいた無事泰平になれてしまひ、政治向きのことも段々と上部の飾りばかりになつてしまつたから

兵農おのつから二に分れ

そこで軍人になるものと、農民となるものが自然に二つに分れて

古の徴兵はいつとなく壯兵の姿に變り

昔行つてゐた徴兵といふものは、いつの間にか壯兵といふ志願して軍人になるものに變つてしまひ

遂に武士となり

しまひには此壯兵が武を以て自分のつとめとする武士となつてしまひ

兵馬の權は一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し

軍隊をさしづする權力はすべて其武士どもの頭となつてゐるものゝ手にうつり

世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち

國の中が亂れると同時に國を治める權力までもまたく武士どもの手に落ちてしまひ

凡七百年の開武家の政治とはなりぬ

源頼朝が幕府を鎌倉に開いてから徳川幕府の終りまで約七百年の長き間武士が政治をとるこゝになつた

世の様の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すへきにあらずとはいひなから

世の中の有様が段々と移り變つて此様になつたのは、人の力で元々通りにすることは出来ないと言ふものゝ

且は我國體に戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺聞しき次第なりき

一つは我國本來の成り立ちと全く違ふこととなり、又一つには 天皇陛下の御先祖の御定めになつた御規則に背くことになり眞になげかましいことであつた

降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政衰へ剩外國の事とも起りて其侮をも受けぬへき勢に迫りければ

段々と年月を経て弘化嘉永（弘化元年は皇紀二千五百四年に當る）などいふ年號の頃から徳川幕府の政治が行き届かぬやうになり、その上に歐米各國等の外國との關係が起つてきて、やゝもするとそれらの國々から輕蔑を受けさうな場合になつてきたから

朕か皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宸襟を惱し給ひしこそ忝くも又惶けれ

明治天皇の御おぼちのみことにあたる仁孝天皇と御ちのみことにあたる孝明天皇とが非常に御心をいたため給ふたことはまことにかたちけなくも恐れ多いことであつた

然るに朕幼くして天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返上し

それであるのに 明治天皇がまだ御年がお若くして天皇の御位に即かせられたとき、征夷大將軍の職にあつた十五代の徳川慶喜が政治の權能を御返し申し上げ

大名小名其版籍を奉還し年を経すして海内一統の世となり古の制度に復しぬ

つづいて大名や小名も皆其領分をお返し申し上げ、僅かの年月の間に日本國中 天皇陛下御一人にて治めたまふやうになり昔のおきて通りに歸ることになつた

是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり

これとはふのも文官にも武官にも忠義な良い家來があつて 天皇陛下をお助け申し上げたからである

歴世祖宗の専蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへとも

また御先祖代々の天皇が一つに下々の人民をあはれみ給ふた御恩徳によつて斯やうになつたものではあるが

併 我臣民の其心に順逆の理を辨へ

しかしながら我國の人民が正しいことと正しくないこととの筋道をよくかみわけて少しも方向を誤らす

大義の重きを知れるか故にこそあれ

天皇陛下に忠義を盡すことが最も大切であることをよく心得てゐたから此事が出来たのである

されは此時に於て兵制を更め我國の光を耀さんと思ひ

そこで此のよい折に軍隊の規則を更めてたてなほし、我國の光を益々揚げやうと思召して

此十五年か程に陸海軍の制をは今の様に建定めぬ

明治の初年から十五年までの間に陸軍も海軍も共に其規則を只今のやうにきめたわけである

夫兵馬の大權は朕か統ふる所なれば

元來我國の軍隊全部をひきゐ治め給ふ權能は 天皇陛下親御持ちになつてゐるのであるから

其司々をこそ臣下には任すなれ

夫々の役目々々だけを臣下に御まかせになるのであるけれども

其大綱は朕親之を攬り肯て臣下に委ぬへきものにあらず

その大本は 天皇陛下御自身で之を御持ち遊ばされ決して臣下に御委せになるべきものではない

子々孫々に至るまで篤く斯旨を傳へ

子孫末代に至るまでよく〜此ことを申し傳へ

天子は文武の大權を掌握するの義を存して

天皇陛下は國を治め給ふこと、軍隊を率ひ給ふことの權能を自ら御にぎりになつてゐることをあきらかにし

再中世以降の如き失體なからんことを望むなり

又中世此方のやうに國家の成立ちを失ふやうな大きな間違を今後再び繰り返へさないことを深くお望み遊ばさる

朕は汝等軍人の大元帥なるぞ

天皇陛下はお前達軍人の總大將であらせられる

されは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特

に深かるへき

それ故に 天皇陛下は我々軍人を御自身のお手身のやうに頼みに思召され、我々は

天皇陛下をかしらとあがめ奉りてこそ其親は一層深いのである

朕か國家を保護して上天の恵に應し

天皇陛下が此大日本國を守り治め給ふて天の御めぐみにお答へ遊そばされ

祖宗の恩に報いまるらする事を得るも得さるも

また御先祖の御恩に御報ひあそばすことが出来るのも出来ないのも

汝等軍人か其職を盡すと盡さゝるとに由るそかし

我々軍人が其つとめを盡すと盡さないによつてきまるのである。

我國の稜威振はさることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ

我國の威充が振はないやうなことがあつたときは、我々軍人は 天皇陛下の御心配を

一身に引きうけて共に心配を一しよにせよ

我武維揚りて其榮を耀さは朕汝等と其譽を偕にすへし

我國の兵力が強くして其勢が外國までも及ぶやうになつたならば 天皇陛下は我々軍人と共に其譽を御喜びになるのである

汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を國家の保護に盡さは

我々軍人がめいめい其職分を守り、天皇陛下の御心と一つになつて國の爲めに力を盡したならば

我國の蒼生は永く太平の福を受け

我國の人民はいつまでも治まる御世の幸をうけ

我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし

我國の勢ひや威力は共に大いに世界の光となるであらう

朕斯も深く汝等軍人に望むなれば

天皇陛下は此様に深く我々軍人に望をかけさせられるのであるから

猶訓諭すへき事こそあれ

是まで御教へになつた其上にまだ教へ諭すことがある

いてや之を左に述へむ

さてそれをこれから次に述べることにする

一、軍人は忠節を盡すを本分とすへし

軍人は忠節を盡すのを第一のつとめとせねばならぬ

凡生を我國に稟くるもの誰かは國に報ゆるの心なかるへき

すべて我日本國に生れた者は誰一人として國の恩にむくゆるといふ心のない者はなからう、皆國恩に報ひたいといふ心を持つてゐるのである

況して軍人たらん者は此心の固からては物の用に立ち得へしとも思はれず

取りわけ軍人は此國恩に報ゆるといふ心が堅くなかつたならばとても役に立つものとは思はれない。軍人としての値打ちがない。

軍人にして報國の心堅固ならざるは如何程技藝に熟し學術に長ずるも猶偶人にひとしかるへし

軍人であつて國に報ゆるの心が固くない者は、どれ程わざがすぐれ學問がよく出来たとしても、それは形の上だけのことで丁度人形と同じものである

其隊伍も整ひ節制も正くとも忠節を存せざる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるへし

又其隊列がよくそろひ規律が正しくあつても、忠義の心のない軍隊は、戦争に出た

り、又は事變のあつたときに全く烏の寄り集りと同じで、何の用にも立たないものである。

抑國家を保護し國權を維持するは兵力に在れば

元來國を守り國の權利を保つてゆくのは兵力即ち軍隊の力によるのであるから

兵力の消長は是國運の盛衰なることを辨へ

軍隊の力が強ければ國は榮へ軍隊の力が弱ければ國は衰へるのである。此事をよく心に刻みつけ

世論に惑はず政治に拘らす只々一途に己か本分の忠節を守り

世の中の論議がどうであらうとそれに迷はされず、政治向のことがどうあらうとそれにかまはず、唯々一心になつて自分の第一のつとめである忠義の道を堅く守り

義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ



忠義を盡すといふことは、山よりも重く大切なことと思ひ、陛下の御爲めに死ぬことは、鳥の毛よりも軽く何でもないと覺悟してゐなくてはならぬ

其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ

此正しい心を變へたり、又は油斷をして不覺をとり、軍人の名譽を汚すやうなことが決してあつてはならぬ

一、軍人は禮儀を正くすへし

軍人は行儀作法を正しくせねばならぬ

凡軍人には上元帥より下一卒に至るまで其間に官職の階級ありて統屬するのみならず

すべて軍人には、上は將から下兵までの間に夫々身分役目等がいくつにも分れてゐて、上の者は下の者を治め下の者は上の者につき従つてゐるばかりでなく

同列同級とても停年に新舊あれば

同じ官等級の者、同じ役目の者でも新しい者と古い者とがあるから

新任の者は舊任のものに服従すへきものぞ

新たに任じられた者は舊くから任じられてゐる者に心から従ふべきものである

下級のものは上官の命を承ること實は直に朕か命を承る義なりと

心得よ

また下の者が上の者の言ひ付けをきくときにはぢき／＼に 天皇陛下の仰せを承はることと心得て言ひ付けをよく守り、従はなくてはならぬ

己か隸屬する所にあらずとも

自分が眞接つき従つて居るところの上官でなくとも

上級の者は勿論停年の己より舊きものに對しては總へて敬禮を盡

すへし

自分より上級の人は申すまでもなく同級であつても年限の古い者に對しては何事に  
よらず之を敬ひ禮儀をあつくせねばならぬ

又上級の者は下級のものに向ひ聊も輕侮驕傲の振舞あるへからす

また上の者は下の者に向ひすこしでもあなどつたり威張つたりおごりたかぶるやう  
なことをしてはならぬ

公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれとも其外は務めて懇に取  
扱ひ

おほやけの務めの爲めに、其役目についてきびしく上下の區別を立てるときはべつ  
として、其他のときは出来るだけ親切に取り扱ひ

慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ

いたはりいつくしむことを心がけ、上の者も下の者も一つ心になつて 天皇陛下の  
御爲に務め働くのである

若軍人たるものにして禮儀を紊り上を敬はず下を惠ますして一致  
の和諧を失ひたらんには

軍人が若しも禮儀を守らず、上に立つ人を敬ひ尊ばず、また下の者になさけをかけ  
ないで、上下が放れくになり仲よくすることが出来なくなつたならば

常に軍隊の蠱毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なるへ  
し

ただに軍隊ばかりの毒虫でなく、國家の爲めにもゆるすことの出来ない罪人であ  
る

一、軍人は武勇を尙ふへし

軍人はたけく勇ましく、男らしいのを第一とする

夫武勇は我國にては古よりいと貴へる所なれば

元々武勇といふことは我日本では昔から最も貴んでゐたのであるから

我國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまし

我日本國の臣民たるものは誰でもたけく勇ましい心がなくてはならない

況して軍人は戦に臨み敵に當るの職なれば片時も武勇を忘れてよ

かるへきか

そのうちでも軍人は戦争に行き敵に向ふのが役目であるから、たとへ僅の間でも武

勇といふことを忘れてはならぬ

さはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同からす

しかし武勇のうちにも大勇と小勇との二つがあつて同じものではない

血氣にはやり粗暴の振舞なとせんは武勇とは謂ひ難し

若い元氣にまかせて手荒いことなどをするのは、決して武勇とは申されぬ

軍人たらむものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫し

て事を謀るへし

軍人といふものは常によく物事の道理をよく知つてゐて、氣力を練つて之を強くし

考へた上にも尙よく考へて物事をしなければならぬ

小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れす己か武職を盡さむこそ誠

の大勇にはあれ

少しの弱い敵でも之をみくびらず、如何程の大敵に逢つても、之を懼れず、軍人と

しての職務を果すのが眞の大勇と謂ふのである

されは武勇を尙ふものは常々人に接るには

さういふわけであるから、武勇を貴ぶ者は常々人とつきあひをするには  
温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ

おとなしくおだやかにすることを第一として、世の中の多くの人から愛せられ敬は  
れるやうに心掛けねばならぬ

由なき勇を好みて猛威を振ひたらは

つまらぬ勇氣を好んで手荒いことやばげしい勢を見せたらば

果は世人も忌嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ心すへきことにこそ

しまひには世の中の人がいやがりきらつて、山犬や狼の如くに思ふやうになる、よ  
くよくつゝしまねばならぬことである

一、軍人は信義を重んずへし

軍人はまことの道を守り、義理固くすることが大切である

凡信義を守ること常の道にはあれと

すべて眞の道を行き、義理を守り、清く生きることは、軍人に限らず人としてなす  
べきあたりまへのことであるが

わきて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難  
かるへし

とりわけ軍人は眞の道と義理を守らなくては、一日でも軍隊の中におて人々につき  
あつてゆくことは出来ない

信とは己か言を踐行ひ

信といふのは自分の言ふたことを正しく行つてゆくことで

義とは己か分を盡すをいふなり

義といふのは自分のなすべき本分をどこまでも盡すのをいふのである

されは信義を盡さむと思は、始より其事の成し得へきか得へから  
さるかを審に思考すへし

さういふわけであるから、信義を盡さうと思つたらば、始めから其事はなしとげ得  
られるか又は到底出来ないことかをよくよく考へて見なければならぬ

臆氣なる事を假初に諾ひてよしなき關係を結ひ

出来るか出来ないかわからぬやうなあやしげなことをうっかりうけあつて、つまら  
ないかゝりあひをつけ

後に至りて信義を立てんとすれば

後になつてまことを盡し義理を立てやうとすると

進退谷りて身の措き所に苦むことあり

進むことも退くこともどうすることも出来なくなり、自分の身の措き所に全く困る

ことがある

悔ゆとも其詮なし

さうなつてから悔んでも仕方がないものである

始に能く事の順逆を辨へ理非を考へ

それ故に最初に其事は順序正しいことであるか、道理に叶つて居るか否かを能く能  
く考へてみて

其言は所詮踐むへからすと知り

其言ふたことばはとても實地に行ふことが出来ないといふ心付き

其義はとて守るへからすと悟りなは速に止るこそよけれ

其義理は到底守ることが出来ないといふ氣付いたならば、早く止めるにこしたことはな  
い。すぐ思ひかへさなければならぬ。

古より或は小節の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り

昔から小さな義理を立てやうとして却て大もとの大切な道を誤り

或は公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守り

又世の中の正しい道理を踏みちがへて私事の義理のみを守り

あたら英雄豪傑ともか禍に遭ひ身を滅し

おしむべき立派な人々がその爲めに災難にあひ自分の名譽と地位を失ひ

屍の上の汚名を後世まで遣せること其例尠からぬものを

死んだ後々までも汚れた名前を世の中に遺した例が中々尠くないである

深く警めてやはあるへき

深く氣をつけねばならぬことである

一、軍人は質素を旨とすへし

軍人はつましくして飾り氣のないやうに心がけねばならぬ

凡質素を旨とせされは文弱に流れ輕薄に趨り

すべて質素を第一と心掛けないと弱々しくなつたり薄情になつたり

驕奢華靡の風を好み

おごりをつくし、はでなことを好み

遂には貧汚に陥りて志も無下に賤くなり

そのあげくには愈深く物をむさぼるやうになり、其心は非常にいやしくなり

節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はしきせらるゝ迄に至りぬへし

たとへ善い行や勇氣があつても何の役にもたえず、世の中の人から忌みきはれ爪

はじきをせられるやうになる

其身生涯の不幸なりといふも中々愚なり

これは自分一代の不仕合せといふ位では中々すむものでない

此風一たひ軍人の間に起りては

此様な悪い風儀が一度軍人の間にはやり始めたならば

彼の傳染病の如く蔓延し

あの恐ろしい傳染病と同じやうにはびこり廣がつて

士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり

軍人の風儀も軍人の品位も急に衰へてしまふことは明である

朕深く之を懼れて曩に免黜條例を施行し略此事を誠め置きつれと

明治天皇は深く此ことを御心配遊ばされ、明治十年二月免黜條例といつて、不

合なことをした者は役をやめさせ又は之を罰するやうな規則を御定めになり、悪いことをしないやうに大體に於て之を誠めて置かれたが

猶も其悪習の出んことを憂ひて心安からねは故に又之を訓ふるそ  
かし

此様にしてもまだわるい風儀が出来はしないかと御心を悩ませられ、わざ／＼こゝ  
に重ねて御諭しになつたのである

汝等軍人ゆめ此訓誠を等閑にな思ひそ

吾々軍人は此御訓誠を決しておろそかに思つてはならぬ

右の五ヶ條は軍人たらんもの暫も忽にすへからす

右に掲げた五ヶ條の教については、軍人として暫くの間でも之を輕々しく思つてはな

らぬ

さて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ

さて此五ヶ條を守り、之を實際に行つてゆくには一のまごころが大切である

抑此五ヶ條は我軍人の精神にして

元々此五ヶ條は我軍人の精神即ち魂とすべきものであつて

一の誠心は又五ヶ條の精神なり

此一のまごころはまた五ヶ條の各條々のうちにこもつてゐる魂である

心誠ならされは如何なる嘉言も善行も

心のうちにまごころがありそのまごころの心からしたことでなかつたならば、どれ程立派

なことを言ひ、どれ程善い行があつても

皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき

是等は皆うはへだけの飾りで、何の役にも立たない

心たに誠あれは何事も成るものそかし

心にさへまごころがこもつて居れば如何なることでも出来ないことはない

況してや此五ヶ條は天地の公道人倫の常經なり

もとより此五ヶ條は、世の中のおほやけの道で、また人間として行ふべきあたりまへのことである

行ひ易く守り易し

之を行ふことも守ることも共にたやすいことである

汝等軍人能く朕か訓に遵ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を盡さ

は

我々軍人が能く此五ヶ條の訓にしたがつて其道を守り行ひ、國恩に報ゆるためにそのつとめを盡したならば

日本國の蒼生舉りて之を悦びなん

我日本國の臣民は一人残らず悦ぶことであらう



朕一人の懌のみならんや  
天皇陛下御一人の御懌ばかりではない、広く國民全體から悦ばれるのである

明治十五年一月四日

御名

戰車兵讀本

## 第一課 祖國を譲れ

近代戦に於て、戦車が如何に大きな威力を發揮するかといふことに就いては、何人と雖も異論の無いところである。

彼我の砲彈が土煙りをあげて前後左右に炸裂し、またヒューン／＼といふ無氣味な音を立てて頭上を飛び交ふ小銃彈、機關銃彈の彈幕のために、味方の歩兵、工兵は相次いで斃れて、塹壕から一歩たりとも前進不可能といふ激烈な戦闘展開中に、後方から日の丸を押し立て、進んで来た戦車隊が、砲煙彈雨を物ともせず敵陣目がけて突入して、瞬く間に敵兵を蹴ちらしてしまふ。

かと思ふと、味方の犠牲ばかり多くして、歩兵部隊の力では到底難攻不落の敵の要塞が、鐵牛部隊の猛攻の前に、あへなく陥落してしまふ、といふやうな實例は、これまでの戦闘に於て



實に枚擧に違なくらゐるのである。

また戰車の進撃力と歩兵の行軍力とを比べて見ても、問題にならない程戰車は速いので、その素晴らしい進撃力を利用する大膽な作戰を行ふことも出来るのである。

歩兵の速度は、長い行軍になると一日六里か七里ぐらゐであるが、敵の抵抗でも受けられればそれがずつと減つてしまふ、ところが戰車になると、僅か一時間で六、七里ぐらゐ進んでしまふのである。

歩兵の進撃振りを話すのに、日露戰爭の時の例に就いて言へば、明治三十七年二月八日の朝鮮嶺南浦に上陸した第一軍（最高指揮官黒木爲楨大將）は、鴨綠江に出るまでの僅か二百軒を二ヶ月半もかゝつて前進してゐるのである、また沙河遼陽附近から明治三十八年三月十日の奉天大會戰を終るまでに三百二十軒を突破してゐるが、これに二百七十一日を要してゐるので、一日平均にすれば僅か一軒餘にしか當らないのである。

ところが、今次の支那事變に於ては、我が作戦軍の先鋒に必ず機械化部隊即ち戰車隊が前進

して、歩兵や工兵のために進路を開拓してゐるので、その進撃力は日露戰爭當時に比し何層倍に及んでゐるのである。つまり北支永定河の敵を昭和十二年九月十四日に撃破した我軍は、一ヶ月後の十月十四日には約四百軒を突破して順徳に入城してゐるし、また杭州灣上陸部隊は上陸以來二ヶ月の後、四百二十軒を進撃し隨所に敵を撃破しながら十二月十三日南京に突入してゐる。また南支作戰に於ては、十月十二日バイヤス灣に上陸してから僅か一句のうちに二百軒も進み、至る所の敵の抵抗を排除して、殆ど無血に齊しい犠牲をもつて廣東を陥落させてしまつたのである。一日の平均速度は二十軒に及ぶ快速進撃振りである。今更ながら戰車隊の威力に驚嘆するのみである。

また、例を今次ヨーロッパ大戰にとるならば、あの廣大なポイランドは、ドイツ機械化部隊の猛進撃とソ聯機械化部隊の侵入によつて、僅か十八日間に潰滅し去つてゐるし、オランダにして見ても、僅か四五日のうちにドイツ機械化部隊の車輪の下に全く蹂躪されてしまつたのである。

更に獨軍のベルギー國境要塞線の突破は數日にして完了したし、フランスが難攻不落と世界に呼號したマジノ要塞線に見たところで、ドイツ機械化部隊精銳の猛攻の前には旬日と支へ切れずに寸斷の浮目にあつて、數十萬の英佛聯合軍は、周章狼狽北佛白西の狭少な地域に包圍される悲運を招いたのであつた。

支那事變に於ける我が機械化部隊の活動は實に目覚ましいものではあつたが、これをもつて來るべき戰爭を樂觀したらそれこそ大變である。支那軍は機械化に於ても我軍に遙かに劣つてゐるからであつて、これがもし優秀な裝備をもつ敵の場合には著しい差異のあることを知らねばならぬ。

かのノモンハンの戰鬪に於て、優勢なるソ聯機械化部隊の猛攻にあつた我軍が、如何に多くの犠牲を拂つたかを考へるならば、精神力のみを重視して機械力を無視するわけには斷じて行かないのである。即ち精神力は、優秀なる機械化兵器の力で更に幾倍もの力を増す事を我々は銘記せねばならぬのである。

かくの如く威力ある機械化兵器は、何を措いても急速に充實させねばならぬ。それと共にそれらの機械化兵器を操る優秀なる乗員、つまり戰車兵の養成に全力を注がねばならぬのである。これが我々國民に課せられた緊急の要務であつて、この目的が完全に達せられるならば、次の會戰に於ては、我が損害を幾分の一に減少し、幾倍かの戰果を擧げ得られるのである。將來優秀な戰車兵たらんとする諸君は、須くその國家的任務の重大性を自覺し、ますます切磋琢磨されんことを祈る次第である。

## 第二課 戰車の歴史

### 古代戰車よりマークI戰車まで

敵と戰ふ場合に於て、我が身を常に或る防禦物の蔭に置いて、そこから敵に打撃を與へる方法があれば極めて有利なわけである。そこで昔からこの目的のために様々な方法が考案され、防禦物として車の形のものも數多く建造された。これが現在の戰車の始祖である。

そのうちで最も古いものは、西紀前千二百年頃已に支那人が考案してゐるが、これは裝甲した車輛を人力或ひは馬力で牽引したのである。また同時代にアッシリヤ人も同様のものを用ひてゐたことが、現在發掘保存されてゐるアッシリヤ時代の遺蹟の壁面彫刻などに残つてゐることから察せられる。また十五世紀にはチュードルの戰車といふのが現れ、その他多くの型の戰

車が、歴史上にその跡を止めてゐるのである。

そしてそれらの戰車は、何れもその時代に於ては相當の威力を發揮したものと思はれるが、一方戰車に對抗する様々な方法も考案され進歩して來たのであつた。

そして旋條式元填銃が發明されてからは、從來の戰車は無益となつてしまつた。それはこの銃弾を防禦するためには厚い裝甲が必要となり、そのために人力や馬力では動かすことが出來なくなつてしまつたからである。

その後機關銃が發明されると、ますます戰車の必要が要望せられたのであつたが、それらの火器の威力に十分に耐へ得て、しかも戰場を縦横に運動し得る戰車は、なか／＼考案せられなかつた。

ところが茲に近代戰車の完成に導く二つの大發明が行はれたのである。その一つは無限制軌道車であり、他の一つは高速内燃機關であつた。無限制軌道は、帯の広い面積をもつて車體を支へるので、やはらかい地面でも走ることが出来るし、高速内燃機關は小型で大馬力を出すことが

出来るから車輛運轉には極めて便利である。この二つの發明を組合せて造られたのがホルト式無限軌道車で、第一次世界大戰前にすでに完成して、アメリカでも農業用として盛んに用ひられてゐたのである。

西曆一九一四年七月、第一次世界大戰が勃發すると、イギリスの發明家は度々、無限軌道車に装甲を施して戦争に用ひたらよからうと政府に提議した。ところが當時のイギリス軍部指導者達の意見は、將來戦は運動戦であつて、強力な防禦陣地を正面攻撃して多くの犠牲を拂ふやうな作戦は行はれぬ、必ず側面攻撃か包圍攻撃をも併用されるのであるから、戦車如き工夫を採用する必要なしといふところにあつた。そして大戰の當初はこの意見通りに戦闘が経過して行つたが、一九一四年九月になると、ドイツ軍はスウェーデンまで退却して強力な防禦陣地に據り、強力な機關銃と鐵條網で武装して、英佛聯合軍を一步たりとも近づけぬといふ態勢を示した。事實この陣地を突破するためには、味方の屍の山を築かねばならぬまでに敵陣は鞏固であつた。更に一九一四年十月、イギリス軍がドイツ軍の右翼を突いてからといふものは、敵

の防禦陣地は海岸線まで達してしまつて、聯合軍は側面攻撃を行ふことが全然不可能となつたのである。

この連結したドイツ軍陣地を破るには、如何したらよいであらうか、聯合軍首脳部に於て作戦は練りに練られ、つひに大口徑砲と爆發力強大な榴弾を利用する方法が實施されることになつた。

數ヶ月の間、この攻撃方法は熾烈に行はれたけれども、更に効果は見えなかつた。けれども尙も根氣よく砲彈を敵陣に送つてゐれば、そのうちには何時か突撃し得る機會をつかむことが出来るであらうといふ見込みの下に、聯合軍の猛撃は連續して行はれてゐたのであつた。

これより先、一九一四年十月初旬に、イギリスのスウキントン少佐は、既成陣地を突撃するには、僅かな砲兵の援助では正面攻撃は被害多く不可能に近いから、鐵條網や塹壕を越え得る装甲動力車を用ふべし、それにはホルト式無限軌道車を改造して無限軌道装甲車とし、これに機關銃を備へて敵に對抗させるといふ考へを提議したのである。

時のイギリス首相ロイド・ジョージはこの考案をチャーチルに知らせて調査を命じたのである。このチャーチルこそ現在のイギリス首相としてドイツ軍と戦ひ且つ、我日本にも挑戦してゐるその人であるが、當時彼はベルギー海岸に於ける海軍分遣隊で用ふるための装甲自動車の研究中であつたのである。一九一五年一月、チャーチルは、スウキンソン少佐の提案が非常に有効で且つ必要なものであるといふことを首相に報告した。そしてそれが原因となつて、さまざまな経緯の後、造られたのがマークI戦車である。

このマークI戦車の特徴は、菱形であつてその周囲に無限軌道をもつことであつた。これが第一次世界大戦中イギリスの用ひた戦車の原型であつて、發明者はウイルソンと、トリツトンの兩名といふことになつてゐる。

この原型をもとにして、イギリスに於て極秘裡に戦車が續々と造られた。ドイツ側スパイの眼をごまかすために、製造工場や性能試験場は極めて嚴重な警戒が行はれ、いよく完成して戦場に送られる際には、戦線の將士に水を供給する水槽車であると稱し、その側面にも水槽車

といふことを明記して貨車に積みこむなど、實に用意周到な準備を整へて輸送されたのであつた。

かくして一九一六年九月十五日、後述の如くソンム會戰中パボーム南方フレールスに於て、英軍はこのマークI戦車を使用し、多大の戦果を収めたのであつた。

こゝに於て、聯合軍側は更に戦車を利用し敵に大打撃を與ふべく、大規模に戦車の研究製作に着手したのである。

## 一、列強戦車の威力を認む

フレールスの戦鬪に於て、突如として出現した英軍のマークI戦車のために、さんくんに撃破されて苦い経験をなめたドイツ軍は、直ちに戦車の研究を開始し、これと共に對戦車砲を大規模に製作して各戦線に配置することに努力したのであつた。

一方、聯合軍は第二次戦車戦を行ふべく、着々と準備を整へ、戦車の數も日増に増加の一路

を辿つてゐた。

かくて、遂にその日はやつて来た。これこそ世にカンブリーの戦闘と呼ばれるもので、ソム會戦後實に六ヶ月目、一九一七年十一月のことである。

ところがこの一戦に於て、聯合軍の夢は無残に打碎かれてしまつた。といふのは、フリースに於ける戦車の効果から、その威力を過信して戦闘を全く戦車隊にばかり委ね、歩兵も砲兵もたゞ傍觀的態度をとつてゐたからである。ドイツ軍は豫て用意の對戦車砲を戦車に集中し、全力を擧げて戦車攻撃を行つたために、聯合軍の戦車は、或ひは火を發し、或ひは顛覆して動作の自由を失ひ、聯合軍が頼みに頼んだ戦車の屍が、戦場に累々と横たはるの慘狀を呈したのであつた。

この聯合軍の失敗は、明かに戦車が各自單獨行動をとつたからであることが認められ、所期の戦果を擧げるためには、戦車隊としての團體行動をとらねばならぬこと、更に必ず各兵科の協同作戰によらねばならぬといふことが究明せられるに至つたのである。

イギリス軍が、第一次世界大戦中に建造した戦車の總數は、二千六百餘臺に及ぶといはれ、フランス軍に於ても三千四百臺が建造されたと傳へられてゐる。

英戦車の多くが鈍重であつたのに反し、フランス軍では輕捷な小型を採用し、特にルノーのペビー・タンクは各戦線に於て猛威をふるひ、ドイツ軍を盛んに苦しめたのであつた。

ドイツ軍は、戦車に就ては聯合軍に一步を譲つたけれども、平素から涵養せられた工業力によつて、やがてドイツ獨特の戦車を生み出して對抗し、敵戦車の威力に心膽寒きドイツ兵の士氣を恢復せしめたのであつた。

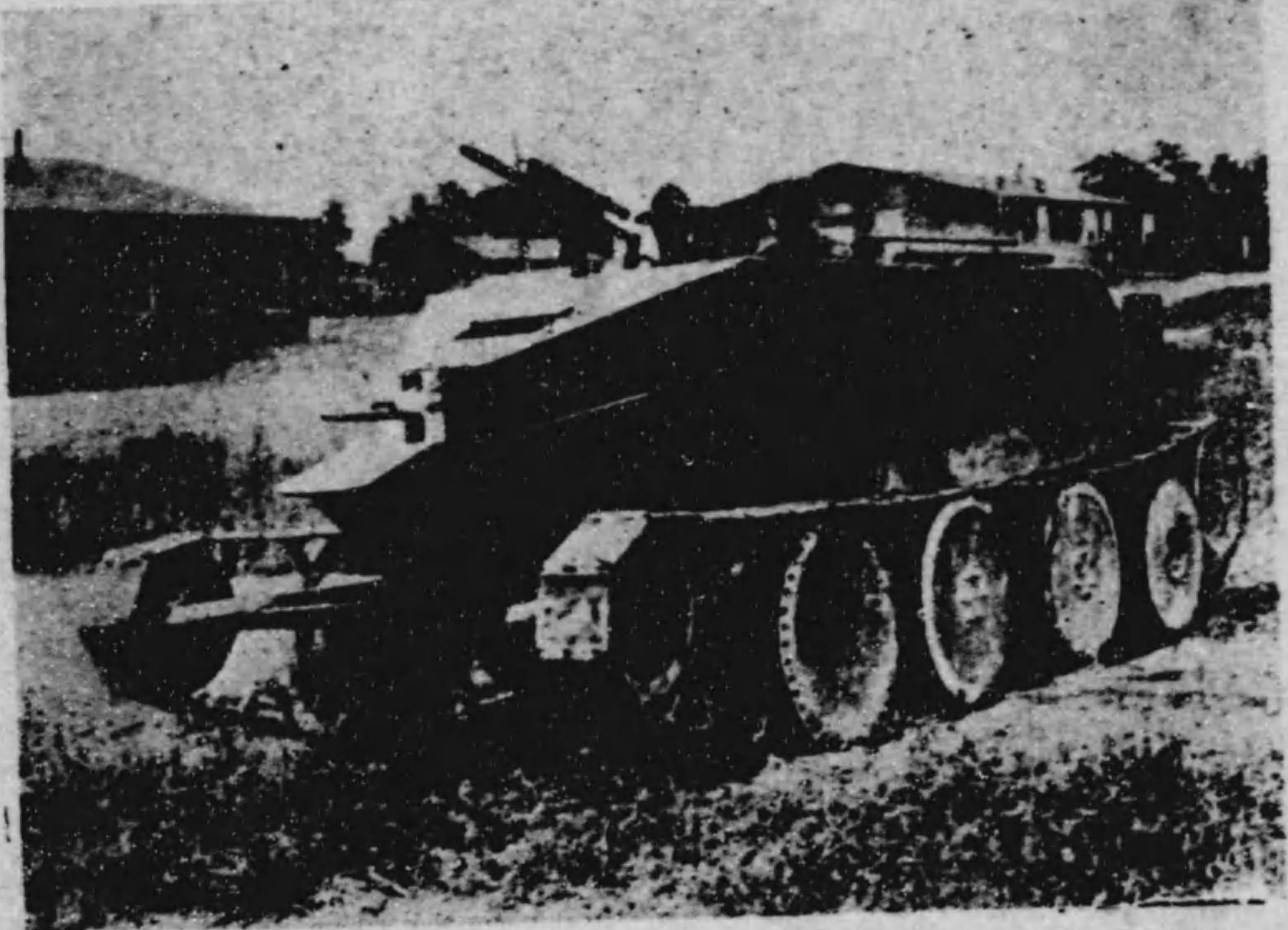
カンブリーの戦ひ以後、一九一八年七月のソアツソンの戦ひ、同年八月アミアンの戦ひなど戦車の活躍した戦闘も行はれたけれども、その他は概ね小規模に用ひられるだけで、大仕掛の戦車戦は行はれず、第一次世界大戦の幕は閉ぢたのであつた。

しかし第一次世界大戦の經驗によつて、戦車の威力は烈強の齊しく認めるところとなつた。學者、技術家の苦心の末になる戦車は、かくて將來戦の花形たることを約束せられたのである。



### 三、近代戰車の出現と初戦闘

前項にも記述したやうに戰車と名づけてよいものは、ずつと昔からあつたにはあつたが、現在我々が見てゐるやうな形のものゝ初めは、約三十年前からである。即ち第一次世界大戰が勃發してから三年目の秋、西曆一九一六年九月十五日のことである。秋に入つたとはいへ、まるで眞夏のやうに暑い日であつた。フランスに侵入してソナム河畔のフレールス近くに進出したドイツ軍は、これを邀撃するイギリス軍と、僅か數百米を距て、對峙し、猛烈な小銃機關銃戰を展開してゐた。そのうち塹壕中のドイツ兵は、イギリス側が急にビタリと射撃を止めたことに氣がついた。不思議に思ひながらもドイツ側が猛射を續けてゐたら、突然敵陣からのそくと戰場へ這ひ出したものがある。それが一つでなく、續いて後から／＼と出て来る。箱のやうな形をした眞黒な怪物だ。怪物は彈丸雨飛の中を物ともせず突進して来る。ドイツ軍が周章で、その怪物に射撃を集中したが、不思議なことには彈丸は皆はね



米國クリスチー快速戰車

かへつてしまつて、怪物はビクともしない。ドイツ軍陣地に近づくと、怪物の眼から突如として火が噴き出した。するとドイツ兵がバタ／＼と倒される。怪物は縦横無盡に暴れ廻つてドイツ軍陣地を蹂躪してしまつた、この不思議な怪物こそ戰車だつたのである。イギリス軍はこの戦闘に四十九臺の戰車を、使用して、そのうち十四臺は敵陣地の前でドイツ軍の猛射の爲に破壊されてしまつたけれども、残りの大部分は敵陣地中に勇敢に突入して、周章でふためくドイツ兵三百餘人を捕虜としてしまつた。

斯の如く突然戰車が出現したことは、全くドイツ兵の心膽を寒からしめた。イギリスに續いてフランス軍も戰車を使用し大いにドイツ軍を悩ました。流石は科學の國ドイツである。翌年の一九一七年五月には、早くもドイツ製の優秀な戰車を製造して多數戰線に送り英佛軍に對抗したことは前にも述べた通りである。

實際、第一次世界大戰中に現れた多くの武器の中で、その創意の點に於て、斷然優秀なるものは戰車である。

戰車は、イギリスではタンクと稱へ、我が國にもその名で知られてゐるが、何れも無限軌道を備へ装甲で防禦し、且つ武装を施した動力車であつて、平らな土地は勿論のこと、凹凸のある地上でも山でも、また小溝なども平氣で跳ね越えて、大抵のところは自由自在に走り廻る、かと思ふと重い車體をおつつけて鐵條網や樹木石垣なども突破し敵を蹂躪することが出来る、更に強力な火器を有して敵を撃破するのであるから、全く地上戰の花形といつてもよいであらう。

### 第三課 戰車の活躍

#### 一、滿洲上海事變と戰車

滿洲に君臨する張學良政權の不法なる排日行爲は、昭和六年に入つて殊に甚しく、滿鐵包圍、不當課税等によつてわが滿洲の特殊權益は全く侵害され、日支間の感情を悪化しつゝあつたが、七月萬寶山の鮮農壓迫事件、次で中村大尉虐殺事件が発生してわが國論を極度に激發せしめた。たまく九月十八日午後十時半、王以哲以下の奉天軍が奉天北部、柳條溝に於いてわが南滿洲鐵道線を爆破し、遂に日支の正面衝突となり、滿蒙大動亂の幕が切つて落された。隱忍自重せるわが軍は、已むを得ず自衛權を發動せしめ、その神速なる行動は十八日深更より十九日午後にかけて北大營奉天城内外、兵工廠、飛行場、東大營等を占據し地安維持に當る一

方、わが長春部隊は九月十九日激戦の後寛城子、南嶺を占據し、更に吉林、鄭家屯、洮南、撫順、安東等の各主要地點をも占據した。

この間、張學良舊政権の壓制に反対する東北各地の支那人間に獨立運動擡頭し、九月二十八日、熙洽氏の吉林省獨立を魁に、ハルビンの張景惠氏、洮南の張海鵬氏等、相次で獨立を宣し、奉天に於いても袁金鑑氏を中心に地方維持委員會が組織され、舊政権より離脱した。

しかも東北軍の敗殘兵は滿鐵沿線各地に出沒して掠奪放火をほしいまゝにし、わが半島人に對する暴行たえず、皇軍はこれが掃蕩に南征北伐、席のあたゝまる暇もなかつた。十月中旬、新に黑龍江省主席となつた馬占山は、北平（今の北京）の張學良一派と結んでわが軍に反抗の氣配を示し、わが權益鐵道たる洮昂線の嫩江鐵橋を爆破したので、皇軍は直ちに膺懲の兵を起し、大興、三間房の大激戦の後これを撃破して十一月十九日、チ、ハルに入城した。

これより先、張學良の殘黨は錦州に遼寧省政府を樹立し滿鐵沿岸に便衣隊を放つて治安攪亂を策しつゝあつたが、十一月外旬に至り大軍を天津より錦州に出城せしめ、わが軍に積極行動

をとるに至つたので、わが軍もこれを討伐すべく十二月末奉天、營口の二路より出動し十二月三十日溝幫子入城、明けて昭和七年一月三日完全に錦州を占據した。

わが軍は更に進んで錦西、新中より山海關に至る地區を占據し、こゝに滿蒙新政權出現の障礙たる錦州政府を潰滅せしめた。次いでハルビン一帯に蟠居せる反吉林軍を撃滅し二月四日ハルビンに入城した。

滿洲事變勃發後、わが皇軍は正義の劍を執つて南北に轉戰すること半歳、壓制暴虐をほしいまゝにした張學良の舊東北政權は完全に滿洲より一掃され、妖雲は地を拂ふて消滅した。滿蒙の三十萬民衆は天與の好機として軍閥政權の崩壊を喜び、同時に民意を基礎とする王道政治の出現を待望した。かくて前述の如く吉林、奉天を始め各地には舊政權の羈絆を脱して新政を布かんとする獨立宣言が相次いで發せられ、支那本土と全く關係を離脱する獨立風潮が全滿蒙に彌蔓した。

かくて機いよく熟し、昭和七年二月中旬東北四省代表に加ふるにホロンバイル、内蒙古の

代表も参加して奉天に東北行政委員会を組織し、三千萬民衆の總意をもつて新國家を建設する旨の宣言を發した。二月二十五日には同委員会によつて新國家の機構が發表され、二十九日には民意決定の全滿蒙代表大會が奉天に開催された。かくて清朝の末裔たる宣統溥儀氏を執政に推戴する民主制新國家の建設が議決せられ、翌三月一日、東北行政委員会委員長張景惠氏は滿洲國政府の名を以て、堂々數千言の獨立宣言を中外に公布し、奉天、吉林、黑龍江、熱河、ホロンバイル、内蒙一部を打つて一丸とする新國家「滿洲國」が建設され、世界歴史はその一頁をあらため、世界地圖はこゝに完全に色を塗りかへたのである。

新元首溥儀氏は三月八日新國都新京（長春）に若々しき第一歩を踏み出し、翌九日記念すべき執政就任の歴史的大典が擧げられ、新なる滿洲國は東洋の平和郷、理想郷として前途を祝福されつゝ出現したのである。

これより少し先、滿洲事變發生と共に支那の排日は全國的に悪化し、殊に歴史的排日の中心地たる上海は最も甚しく、昭和七年一月九日、上海の支那新聞民國日報が、櫻田門の大逆事

件につき不敬記事を掲げたことにより、わが居留民を激昂せしめた。一月十八日には抗日義勇隊員及び三友實業社職工がわが日蓮宗僧徒五名に暴行し、僧徒三名死亡二名重傷を負へる椿事あり、翌々二十日、日本人青年同志會員は三友社を襲撃し市中日支人の衝突を見るに至つた。わが陸戦隊は直ちに出勤市内の警備についたが、二十一日の民國日報は三友社襲撃をもつて日本陸戦隊の行動と捏造報道し、わが陸戦隊を激昂せしめ、二十六日民國日報の閉鎖と共に日支の風雲は遂に危機を胎んだのである。

この間、國民政府外交部長陳友仁は對日宣戰を提案し、南京の邦人は引揚げのやむなきに至り、一方わが村井總領事は二十七日吳上海市長に最後通牒を發したが、支那側に全く誠意なく、却つて支那軍は租界の周圍に防禦陣地を築き挑戰的態度に出でた。

たまたま一月二十八日、わが巡洋艦夕張以下十二隻上海に入港し、深更十一時過ぎ同艦陸戦隊が北四川路より支那街に入らんとして支那正規兵に射撃されこゝに日支兩軍は遂に衝突し猛烈なる市街戦を惹起したのである。

村井總領事は翌日吳市長と停戰協定を結んだが、支那軍はこれを破つて三十日未明よりわが軍に砲撃を加へ、こゝに双方市街を挟んで銃砲火の交換となり、數日に亘る總攻撃の結果市街の主なる建物は撃破され、殊に日本人街たる北四川路、支那街關北は殆んど灰燼に歸し、上海全市阿鼻叫喚の巷と化した。

二月十三日、植田○團主力上海に上陸し、植田○團長は十八日第十九路軍長蔡廷楷に最後通牒を發したが支那側はこれを拒絶し、こゝにわが上海派遣軍は二月二十日を期して總攻撃に出で、江灣、廟行鎮、吳淞、後郭家屯等に轉戦奮闘した。

この間、最も激戦を極めたのは二月二十日の廟行鎮奪回戦で、江下、北川、作江のいはゆる爆彈三勇士は身を以て鐵條網を爆破し、當時行方不明を傳へられた空閑少佐は後自害して軍人の龜鑑と仰がるゝなど、幾多の壯烈悲痛なる戦史を飾つた。かくてわが軍は二月二十七日江灣鎮を完全に占據し、三月一日わが軍主力二十三團、談家屯を占據して中央突破に成功し、二日より三日にかけ大場鎮、眞茹、南翔、吳淞を完全に占據し、敵は全線に亘り總退却を開始した。

こゝに於いて上海派遣軍司令官白川大將は、わが全軍に戰闘中止を命じ、わが陸軍は太倉嘉定南翔の前線に集結して上海の戦雲はやうやく一掃されたのである。

かくて三月十四日、上海派遣軍の一部に歸還命令下り、久留米部隊を先發に、續々凱旋の途についた。一方上海事變の前後問題について二月二十四日より日支正式停戰會議開かれ、代表として日本側からは植田○團長、重光公使等、支那側からは戴戟、郭泰祺等が出席、英米佛伊四國側からも各駐支公使等が列席して問題の解決に努めたのであつた。

この滿洲・上海兩事變を通じ、わが戦車の活躍は實にめざましかつた。或は野戦に、或は市街戦に、常に歩兵部隊の先頭に立つて前進を掩護し、クリークを渡り塹壕を越え、幾重の鐵條網を突破して敵陣に躍り込み、友軍の士氣を彌が上にも高揚し、戦果を擴大したのであつた。

しかし、更に戦車隊の威力を示すべき機会がやつて來た。それは熱河事變である。

### 二、我が熱河電撃作戦

昭和八年、獨立した滿洲國の一部である熱河省の主席湯玉麟は、突如滿洲國に反旗をひるがへして暴逆の限りをつくしたので、日滿聯合軍は斷乎としてこれを討伐することに決定した。これが熱河事變である。

熱河討伐戦に於いて、日滿聯合軍の先陣をうけたまはつたのが、わが川原小將のひきゐる川原挺身隊であつた。

川原挺身隊は快速の装甲自動車より成る部隊で、一部には百武大尉指揮の戰車隊も加はつてゐた。

春なほ寒き昭和八年二月、川原挺身隊は零下何十度の氷雪をおかして進撃した。頑強に抵抗する敵を追つて躡進また躡進、到る所で敵を撃破し、はるく三百二十軒に及ぶ難路を、僅か三日半のうちに平定してしまつたのである。

朝陽から西南へ進んで凌源、更に平泉、承德と一日の進撃は實に九十餘軒に達してゐる。川原挺身隊の進むところ、兩側には敵の屍體が累々とつまれ雪の熱河省は敵の鮮血をもつていろどられた。

かくて、熱河省の南端、千年の歴史を秘めて蜿蜒とよこたはる萬里の長城にも、わが感激の日章旗がへんぼんとひるがへつたのである。

川原挺身隊の猛進撃のおかげで、他の諸部隊もすばらしい戦果をあげ、僅か旬日をもつて全熱河省の平定を見ることが出来たのであつた。

全世界の人々は、わが電撃熱河作戦を見て心から驚嘆した。驚嘆といふよりも寧ろ呆氣にとられたといふ方が適當かも知れない程であつた。

百武戰車隊を先頭とする川原挺身隊三日半の進撃によつて、敵は戦死傷何萬人といふ損害があつたにもかゝらず、わが軍は僅かに戦死二名、負傷者六名といふ、まるで信じて得られぬ程の微少な損害を受けたに過ぎなかつた。

熱河省の首都承德に堂々入城した川原挺身隊長と會見した外國の觀戰武官や新聞記者たちは、その快足快勝に唯々感嘆するばかりであつた。

川原挺身隊は今で言ふ機械化部隊であるが、この挺身隊の大勝利に刺戟されて、世界各國は軍の機械化に全力を注ぎ出したのである。故に第一次世界大戦に突如出現した戰車の威力を見て軍機械化の必要を痛感した各國は、更に川原挺身隊の實例を見て、機械化促進に本腰を入れることになつたわけである。

今次ヨーロッパ大戦に於いて、盟邦獨伊はそれ／＼強力な機械化部隊をもつて得意の電撃作戰を遂行し多大の戰果をあげてゐるが、いづれも熱河事變が終了した頃から大馬力をかけて機械化部隊の完成を急いだのであるから、今日の勝利の原因の一つは、わが日本のお蔭といふことも出来やう。

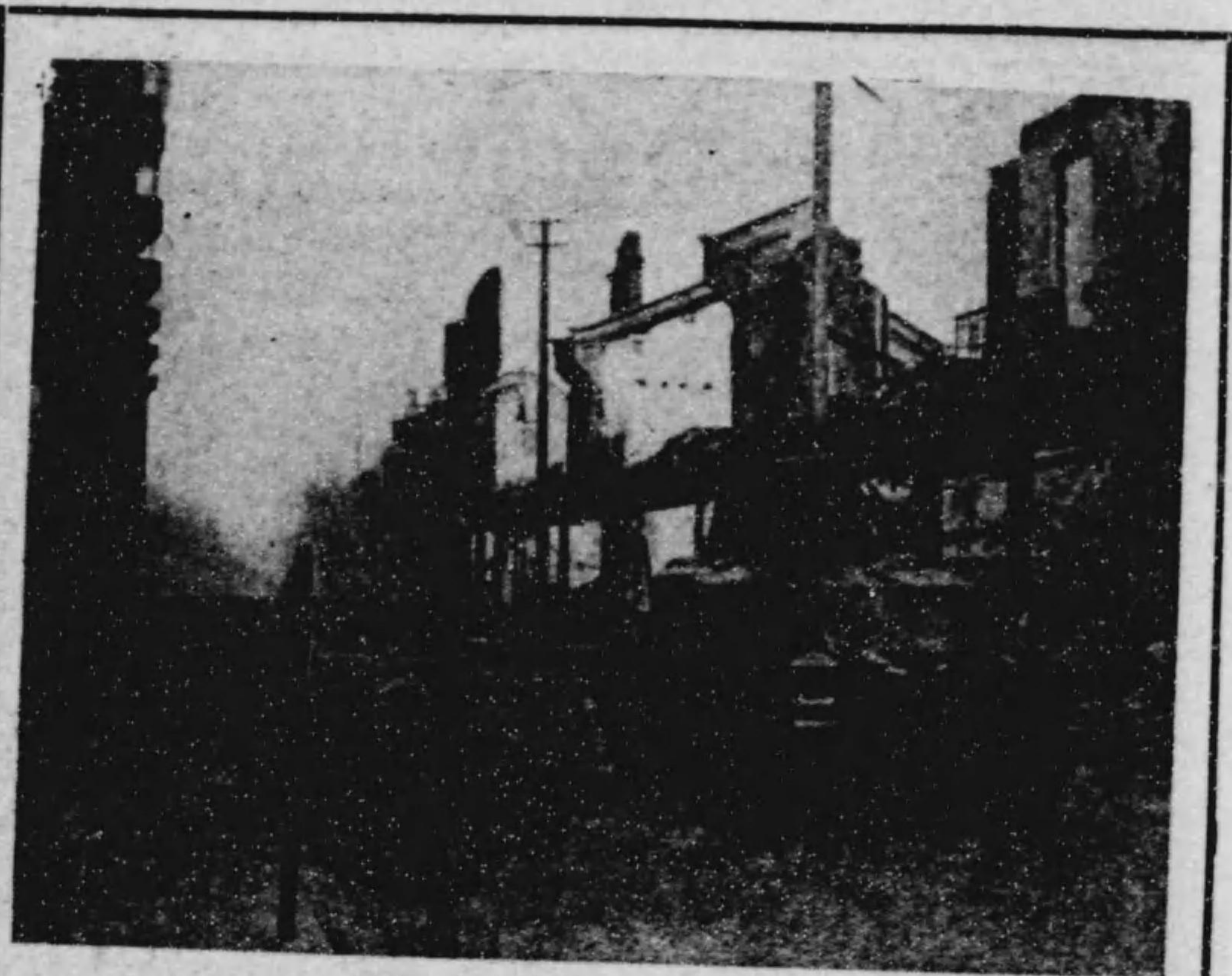
### 三、支那事變と戰車

昭和十二年七月七日——。

一發の銃聲蘆溝橋の河畔に響き、日支の兩軍間に火蓋が切られるや、わが北支駐屯軍は極めて僅少な兵力をもつて、支那第二十九軍の暴戻を矯めさんとしたのである。

そして先づ宛平を占領し、更に敵將宋哲元の本據南苑を包圍して、敵の企圖を完全に破壊したのであるが、これに使用されたわが北支駐屯軍の兵力は極めて微々たるものであつた。

この戰鬪に於いて、わが駐屯軍戰車隊は全滅を賭して戦つたのである。文字通り東奔西



市街戰に於ける重戰の活躍

走、休息の暇もない程であつた。

現地不擴大主義を堅持する皇軍の誠意も物かは、抗日の迷夢より覺めぬ支那は、京漢線津浦線に沿ふて中央軍雜軍から成る大軍を北上せしめて來た。そのため、わが北支駐屯軍の兵力不足を告ぐるやうになつたので、朝鮮及び内地から大軍を北支に送つて、これに對抗せしめることになつたのである。

戰車隊は、内地から今田部隊及び馬場部隊が送られ、主として京漢線方面の作戰部隊に協力することになつた。

次いで蒙疆方面の空氣が險惡になつたので、これに對處するためわが有力部隊が派遣せられた。

駐屯軍戰車隊は京綏線に沿ふ地區に、又他の戰車隊は、北支にそして蒙疆方面に使用された。今田、馬場、藤田、橋本の各戰車隊の他に、なほ幾つかの小戰車部隊が北支に増派されたのである。

これらの戰車諸隊の主力は、主として京漢線に沿ひ、一部は津浦線及び蒙疆方面で活動し、何時も作戰部隊の先陣をうけたまはつて隨所に敵を撃破し、支那軍をして全くわが軍に對抗するの策を封じてしまつたのである。

昭和十二年九月、上海方面に風雲急を告げたかと思ふや、忽ち戰火は北支より中支に飛火し、皇軍は上海に兵を進めた。上海方面に派遣せられたわが戰車隊は、細見、福田、矢口の諸部隊であつた。これらの部隊は、到る處にあるクリーク網で戰車の活動は殆んど不可能に見えたけれども、何時も堅固な敵陣の突破を擔任した。幾十軒に亘る廣大な戦線だつたので、西に東に或は北に、連日激闘が続いて全く寸暇もない有様であつたが、常に最前線を進んで敵を撃破し、歩兵工兵の感謝の的となつたのであつた。

北支京漢線方面の作戰軍に隸屬して戦闘した藤田戰車隊と井上戰車隊も、十月中旬に中支方面に派遣され、それらは杭州灣上陸部隊に隸屬されて戦闘に参加した。

上海が陥落すると、細見、福田、矢口の各戰車隊は上海鎮江方面、揚子江左岸に沿ふ地區を



前進した。

北支方面で京漢線に沿ふて南下した馬場部隊は、岩仲戦車隊となつて揚子江に沿ふて前進し、藤田戦車隊及び井上戦車隊は、藤田隊長指揮の下に杭州灣上陸部隊の先頭をうけたまはつて、各々南京に向ふ大追撃戦に参加し、ひた向きに南京へ南京へと進んだ。

わが戦車隊の向ふところ、常にわが軍の進路が開けるといふ情況であつた。そして四百幾十斤の大迫撃戦は僅か一ヶ月にて完成し、遂に敵の主都南京を陥落せしめて、一國の首都陥落といふ前古稀な戦績を収めて、戦史の一頁を飾ることが出来たのである。勿論この戦績は、空軍及び歩騎砲工諸兵の協力一致の力であるが、常に先陣をうけたまはつた各戦車隊の活躍に俟つものが極めて多いことは、萬人の齊しく認めるところであらう。

南京陥落後、敵は徐州附近に大兵を集結し、北支から南下する日本軍及び揚子江方面より北上する日本軍とを各個に撃破して、茲に乾坤一擲の決戦を企圖したのである。

ところが、わが岩仲戦車隊は遠く蒙城方面から深く敵の背後に突進し、歸德東方地區で隴海

線を遮断し、濟南方面から南下した。また今田戦車隊は杭州濟寧方面から南下して、同じく歸德東方で隴海線を爆破し、南下部隊の杉本戦車隊が蘭封附近で同じく隴海線を破壊し、敵の背後連絡線は二重三重に爆破されてしまつたのである。

かくて、徐州附近で我と決戦を企圖した支那軍も、後方連絡線を失つたため遂に決戦の企圖を放棄して、周章狼狽見るも惨めな潰走をせねばならなかつたのである。

敵の背後深く突進することは、幾多の敵の抵抗を排除しなければならなのであつて、言はば極めて冒險的な放業なのである。ところが最近の作戦に於いては、このやうな冒險は戦車隊の專業のやうに思はれて來てゐる。

徐州作戦に引續いて武漢大作戦が始まると、これらの各戦車隊は武漢攻略部隊の作戦に参加して、時には獨立し、或は他兵種と共に機械化部隊を編成して特殊の作戦を行ひ、或は直接漢口突進部隊の先頭に立つて突進した。そして、昭和十二年十月二十七日、敵軍が頼りにした武漢三鎮も、わが猛攻の前に敢へなく潰え去つたのであつた。

武漢攻略戦の中途に於いて、突如として行はれた南支作戦では、バイヤス灣上陸以來僅か十日にして廣東を我が手に收めたのである。その先陣をうけたまはつて南支の要衝廣東に突入したのは、上田少佐の率ゐる豆戦車隊であつて、しかもその戦車隊活動のため、廣東は殆んど無血に近い犠牲で我が軍の占據するところとなつたのであつた。

また南昌作戦に於いて武功拔群と稱へられたのは、石井部隊長の率ゐた臨時戦車集團であつた。

斯の如く、支那事變に於けるわが戦車隊は、あらゆる大戦小戦に必ず參加して常に目覚ましい働きをしてゐるのであるが、その後も、支那全土に亘り、各地の討伐戦、治安作戦に協力出動して八面六臂の活躍を續け、わが戦車隊の進むところ必ず敵は無抵抗で潰走するといふ有様である。全く戦車隊の存在と活動のため、わが歩工將兵の棄つべき命がどれだけ助け助かつてゐるか知れないのである。

### 今田戦車隊永定河に突入

昭和十二年九月十三日——。

支那事變が勃發してまだやつと二月を越したばかりである。北支作戦車のわが一部隊は、永定河をはさんで我に幾倍する敵と對峙してゐるのであつた。

濁流うづまく永定河は、敵にとつて絶好の堡壘であり、いかに日本軍と雖も、これは容易に渡河進撃出来るものではあるまいと、唯一の頼りとしてゐるらしく、對岸から悠然たる射撃振りを見せてゐるのであつた。

わが軍は、麗各莊といふ戸數約五六百の部落まで進出した。こゝで機を見て敵前渡河を決行しやうといふことになつたのである。

この作戦軍の一部には、今田戦車隊が參加したゐた。いよく夜になつた。

青い月光が、静まりかへつた敵味方の陣營の上に、さんく〜とふりそ〜いでゐた。この月明を利用して、永定河の渡河地點を偵察するわが工兵決死隊が、物かげに身をひそめながら、まるで逼ふやうにして河岸に迫つて行つた。

三十分、五十分――。

全軍の期待を一身に集めた決死偵察隊は、一時間たつて歸つて來ない。幸ひ敵の銃聲が聞えないから、まだ發見されてはゐないらしいが、一體どうしたんだらう。一同の不安がつのつて來た。

その時だつた。

月明にすだく虫の音がパツタリ止つた。

おゝ歸つて來たのだ。工兵決死隊は見事に永定河の測量を終つて、貴重な報告をもたらしたのであつた。

「水深は一米から三米。水流相當強し。水流力七、八十米から百米、河原百米から

二百米、何れも濕地帯」

この報告をもとにして、いよく明日決死の渡河戦を執行しようといふのである。明くれば九月十四日。

空は一點の雲もなく晴れ渡つて、しかも焦けつくやうな暑さである。風一つない。どの將兵も連日の猛進撃に泥まみれになつた軍服に汗がビツシヨリとほつてしまつてゐる。實つた高粱が、どれもこれも一面に首をたれてゐる。暑い。本當に暑い。

その暑さの中に、黄塵がもや／＼と立ちあがつた。わが豆戦車が、敵陣偵察を終つて歸つて來たのである。歩兵や騎兵の傳令が、しきりに飛びはじめた。味方の陣營が急にあはたゞしくなつて來た。

そのうちに、ダダーン、ダダーン。といふ物凄い砲聲がした。友軍の左翼、麗各莊部落の西方に陣地を占領してゐたわが重砲隊が、渡河準備射撃の火蓋を切つたのである。すると、これに續いて友軍各部隊の重機、輕機が一齊に火を吐き出した。

ダダン、ダーン、ダダダダ、タタタタ。  
 猛然と開始された味方の砲撃に應へて、敵陣からも弾丸が雨霰の如く飛んで来る。今まで猛暑の中に死んだやうな静けさだつたあたり一面が、一瞬にして激烈な戦場に變つてしまつたのである。

彼等の砲撃はいよ／＼熾んである。

しばらくの間猛撃は續いたが、敵も容易にひるまない模様である。

この時、突如として今田戦車隊に命令が下つた。

「戦車隊は、すみやかに永定河敵前渡河を敢行し、對岸の敵陣地を蹂躪すべし」

いよ／＼待ちに待つた自動命令が下つたのである。準備は萬端整つてゐる。一同は詳細に渡河の注意を受けた。そして直ちに愛車の中にもぐりこんだ。エンチンが一齊に勇ましく唸り出すと、周圍に生ひ茂つてゐた高粱が、ゆら／＼と揺れ出るのであつた。

高粱をふみしだいで、鐵牛の群れは永定河の小高い堤防を指して進んだ。そして難なくその

上にのぼつてしまつた。

もうこゝからは、車體をかくす何物もない。敵前にわが戦車隊の姿がハッキリ露出すると、猛烈に機關銃、小銃の集中射撃をあびせて來た。それがまるで豆を煎るやうに装甲板に當つて跳ね返つてゐるのである。全く心強い装甲板だ。

戦車隊は直ちに堤防を下りて河原の濕地帯に進んだ。大變な濕地帯だ。停車をすると、ぐんぐんもぐつてしまふのである。キヤタピラも車輪も泥んこである。こゝで一旦停止してエンジンの點檢をした。萬事異狀なし、よし進め。戦車隊はまたも勢よく突進する。先頭の一車はいよ／＼河岸に達した。

大陸の河は、底は大抵砂地になつてゐて、外見はゆるやかな流れのやうでも、實は底知れぬ水力をもつてゐるものである。この永定河も、河底一米ぐらゐは相當に彈力をもつた砂地であるが、その下は幾許あるとも計り知れない泥沼であつて、その泥沼が實に強力な吸收力をもつてゐるのである。そのふわ／＼したところを重い戦車が渡らうといふのだ。全く曲藝以上の

放れ業、決死の大冒険である。

河岸に出た先頭の一車は、濁流の水面をにらんだ見れば水面まで約二米の崖になつてゐるのである。

一きわ高いエンヂンの唸りと共に、先頭車は飛沫をあげて濁流の中に躍りこんだ。

あッ！と思ふ間もなく、一たん水面下に全身を没したが、やがて砲塔から下約一尺ばかりを出して、前進をはじめたのである。

「しめた！」

先頭車をチツと見つけてゐたどの戦車からも期せずして歡喜の叫びが起つた。續いて、一臺また二臺、わが戦車は勇敢に濁流に躍りこんで行く。全車が飛びこんだ頃、先頭車はもう河半を過ぎて前進してゐた。戦車長は心配のあまり、砲塔から上半身を敵弾雨下にさらしながら指揮してゐる。

激しい水流だ、車内に浸水しはじめた戦車もある、敵の猛撃は少しの間もゆるまない。操縦

手砲手の苦心も一通りではないのだ。

車體の半分以上を濁流に没して猛進するさまは、まるで荒れ狂ふ水牛の群れのやうである。敵の射撃が、この一瞬、ばつたり弱まつた。

日本軍如何に強くとも、よもや天與の要害永定河は渡れる筈はない。無暴にも戦車の一隊が飛びこんで来たが、今直ぐ眼の前でブク／＼水中に沈んでしまふにきまつてゐる。さあ、みんなで高見の見物をしてやれといふやうな氣持でゐたらしい敵兵は、勇敢にも濁流を渡つて進撃して来る日本戦車隊の堂々たる姿に、急轉直下、恐怖に押し包まれて、一瞬、銃を撃つのも忘れたかのやうであつた。

そのうちに戦車隊は、つひに永定河を乗り切つてしまつた。どの車の操縦手も、心から萬歳を叫ぶのであつた。

さあ、これからが戦闘だ、各戦車はハンドルをとり直して對岸の濕地帯を驀進した。敵は自棄的になつて盲撃をするのだが、頼もしい装甲飯は、どの弾丸もどの弾丸も、簡單にはちぎ返

してしまふのである。  
 泥んこの戦車は、濕地帯を突切つて敵陣に躍りこんだ。塹壕なんか一たまりもなく踏みつぶしてしまふ。逃げまどふ敵兵も次から次へと車輪の下積みだ。塔載火砲からは絶間なく火を吐いて、縦横無盡に暴れまはる痛快さ、敵はもう防ぐ氣力も消え失せて、たゞ散り散りバラ／＼に潰走して行く。

戦車隊阿修羅の奮戦に續いて、友軍が續々渡河を開始した。工兵隊は、軍橋架設の大活躍を始めた。後續部隊は、この軍橋完成を待つてどん／＼進撃して来るだらう。

今田戦車隊は、後方のことを考へる暇もなく、敗走する敵を追つて驀進を續けるのであつた。

火だるま戦軍の進猛

わが機械化追撃隊は、敗走する敵を追つて順徳の城内に突入した。

昭和十二年十月十六日のことである。



昨日一日、大した敵にも遭はずに、一望千里の平野を進撃したので、今日こそは敵の大部隊を發見し胸のすくやうな戦闘をしたしいものだと思つてゐたのだが、順徳城内にも敵兵の影は見えず、逃げるに際して思ふ存分掠奪したらしい慘狀が、到る所に見られるのであつた。

この機械化追撃隊は、戦車部隊の主隊の主體として、〇〇歩兵部隊の主力を自動車に塔乗させたもので、戦闘力も強大である上に追撃能力も非常に高い快速部隊なのである。

追撃隊の先鋒となつた戦車隊が順徳に入つた時は、後續の自動車部隊はまだ到着してゐなかつた。

しかし、城内に點々と残つてゐる焚火のあとを見るとまだ消えてゐないので、遁走した敵部隊はさう遠くへ行つてゐないことが判るのだ。

いよく今度こそ敵に會へるぞ！

戦車隊の面々は、莞爾として微笑むのであつた。携帯の冷飯を食つて腹ごしらへをしても、まだ自動車部隊は着かない。

そこで戰車隊は單獨作戰をやることになつたのである。前進また前進、午後二時頃になつて沙河鎮の城壁が見えて來た。城外の驛のあたりに白煙が上つてゐるのは、紛れもなく敵の裝甲列車である。敵大部隊は裝甲列車に乗つて、京漢線を南へ南へと遁走しゐるのである。

よし、この敵を沙河鎮の南側を流れる沙河に叩きこめ、さあ戰車隊全員頭張れと作戰は決つた。

さつきまで今にも落ちさうだつた雨空は、ついに小雨となつてしまつた。そのうちに敵味方の射撃戦が始まつた。部隊長は戰車裝備の無線電話で盛んに指揮をとつてゐる。一部は城外東側から、一部は西側の停車場をそして尖兵として來た小林隊は城内中央を突破することになつた。

裝甲列車は相當長くつながつてゐる。機關車は盛んに蒸氣を出して早く列車を牽き出さうとしてゐるらしいのだが、周章てゐるせいかな、なか／＼動き出さない。そしてわが戰車砲の集

中射撃を浴びて、横腹にブツ／＼穴をあけられてゐる。その度毎にわい／＼悲鳴をあげながらパラ／＼飛び下りる敵兵が、手にとるやうに見えるのである。

と思つてゐるうちに、列車を途中から切り離したかと思ふと、一擧に牽き出してまるで死物狂ひで鐵橋の彼方まで逃げ去つてしまつた。

城内の中央突破の命を受けた小林戰車隊は、勇みに勇んで城門へ迫つた。戰車砲から吐き出す砲火は、まるで巨龍が赤い舌を出して獲物に襲ひかゝるかのやうである。敵側の犠牲は數限りなく出て來る。そのうちに敵は、たう／＼火攻め戰術をとり始めた。戰車で一番の苦手は火である。戰車はいづれもエンジンを動かすために、内部にガソリンを積んでゐるので、これに火がついたらそれこそ爆發を起して、乗員の生命など吹つ飛んでしまふのである、内部に積んだガソリンだけならまだいゝが、小林戰車隊の各戰車は、豫備ガソリン百八十リツトル入りの大ドラム罐を、拔身のまゝ背中に背負つてゐるのである。敵は今や、城門に火をかけて折からの風のそれがます／＼燃えひろがつて來たのである。忽

ちのうちには城内は火災となつてしまつた。

さあ大變だ。戦車隊の危険此上もない。

火の子は亂れ飛ぶし、四方八方に火柱は立つのである。と言つて、この亂戦の最中に、戦車から下りてドラム罐をとりはづす餘裕などないのだ。

さあどうしたらよいか。

誰しも處置に迷ふ時に、剛膽無比な小林部隊長は、この危険を知りつゝ敢然右側前進を命じたのである。そして自分の乗る隊長車を、眞先に火炎の中に突入させたのである。

城壁上の敵は、手榴弾を束にした奴を、戦車めがけて投げつける。それらを振り向きもせず隊長車は城内の大道を突進した。それ隊長車に續けと、二番車、三番車がその後を追つて火炎の中を突走る。その物凄い勢ひに吞まれて、前面の敵は浮足立つて來た。だが城壁上の敵はなほも猛烈に射つて來るのである。

どの戦車にも火が移つたが、風壓のために幸ひにも自然に消えて行つた。

城内の中程まで來た時であつた。その路上には、また敵の作つた戦車阻絶があつて、それが盛んに燃えてゐた。最初に突破した大きな阻絶に比べれば物の數ではないと思つて、これも一氣に突破してしまつた。そして後續戦車の模様は如何と、後方の小さな展望孔から覗いた時である。わが愛車の車尾に積んだドラム罐から、側方へ猛烈に火を噴いてゐるのである。しかも一箇所からだけでなく二箇所からだ。たう／＼敵弾に射抜かれてそこから火を呼んだのである。實に物凄い火勢だ。邊りに積んだ雑物などすでに燃えつくして、車尾一面は炎々たる火に包まれてゐるのだ。

あゝ、萬事休す。

一瞬、小林部隊長は、ちつとその火勢を見守つたが、即座に戦車の停止を命じた。そして隊長獨り車外に下りて、燃えさかる雑物を取り除いたのである。おゝ、何たる沈着豪膽なことであらうか。

そして、静々とまた車内に入つたのである。ドラム罐は一人や二人の力では、到底動かすこ



とは出来ない。いやそれよりも燃えるドラム罐をこの路上に捨てるならば、後から来る友軍の戦車の前進出来なくなつてしまふではないか。わが戦車一臺の犠牲によつて、あとの部下戦車〇臺を生かさう。小林部隊長はかう決心して車内に乗りこんだのであつた。背中のドラム罐はなほも燃えつゞける。一旦これが爆發したら、それこそどんな結果になるか。そんなことは萬々承知の上で、豪膽にも小林隊長は、火炎戦車に前進を命じたのであつた。前進命令の言葉も、極めて冷静で、力がこもつてゐた。

かくて隊長車は、火ダルマのまゝ進撃を開始した。そのうち一弾はまたドラム罐に當つて、新しい一箇所から火が噴き出して来る。

壯觀と言はうか、凄絶と言はうか、小林火ダルマ戦車の阿修羅の如き活躍ぶりに、敵兵は度膽を抜かれて、南門めがけて殺到退却したのである。何條これを見逃すべきや、火ダルマ戦車を先頭にして、わが鐵牛部隊は猛烈にこれを追撃した。双向ふ敵を蹴散らし踏みつぶし、強力な戦車砲や機關銃は、進む兩側に屍の山を築いて行くのであつた。

敗走の敵を追つて、小林戦車隊は午後四時頃沙河の北岸に達し、こゝに集結をしたのである。炎々と火を噴く隊長車も、こゝで完全に消火された。こゝまで爆發をまぬがれたといふのは、全く天佑といふより他はない。

隊長車の安否をきづかつてゐた部下戦車の乗員たちは、消火された愛車の横に立つて、莞爾と微笑む小林部隊長の豪快な姿を見て、限りなき畏敬の念と、頼もしさを感じるのであつた。

そしてお互ひの本日の健闘を祝し合ひ、また明日の活躍を心に誓ふのであつた。

小林戦車隊は、その夜沙河鎮に夜營をし、翌日沙河を渡河して、敗敵を急追することになつた。自動車部隊は約二時間の後、戦車隊に追及して共に夜營の準備を急ぐのであつた。

翌早朝、沙河の渡河が決行された。この附近は一面の砂地で、しかも水分を多量に含んでゐるため、人間でもブク／＼足が沈んでしまふからである。まして重い戦車がこれを渡るのは容易なことではなかつた。

自動車部隊の歩兵は、破壊された鐵橋を修理してから渡ることになつたので、後に残つたの

だつた。

戦車隊はなほも前進した。

そして、耕作をしてゐる一農夫から、敵の歩兵と騎兵がこの先の部落にゐることを聞き知つたのである。一同は勇躍部落に向つて進撃した。かくて部落の北端まで来た時である。

小銃弾が數發、不気味な音を立て、飛んで来た。たう／＼敵に氣づかれたのだ。だが、今はそんなことを構つてゐられない。ぐん／＼部落の中に突進して行つた。すると、道路のあちこち一面に、飯盒や水筒が散らばつてゐる。正しく敵の大軍が晝食の用意をしてゐたところである。

道の兩側の家屋から、無数の支那兵が飛び出した。連日の敗走で身も心も疲れ切つてゐる彼等だ。せめて晝食の一時を樂しまうとしてゐたところへ、突如としてわが戦車隊が雲崩れこんだのだから、全く吃驚仰天、膽をつぶして逃げ出すのも無理はない。上官も兵卒もあつたものではない。我先きにとこぞつて、悲鳴をあげながら南門めがけて殺到したのであつた。

それ追撃！

戦車隊はなほも激しく追ひまくる。我勝ちにと犄めきあふ敵の大軍の中へ、鐵牛部隊は一氣に乗り入れたのである。血沫きが四方に飛ぶ。見る／＼何十名の敵兵は戦車の下敷となつて行く。鐵飯を眞赤に染めて、わが戦車隊は荒れ狂ひながら、續々と南門の外に出て来た。

こゝがまた狭い道路になつてゐて、その兩側は小高い堤防である。怒濤のやうに遁走する敵兵の中には、必死になつて堤防によち登らうとする者もある。この状況を見たら、誰しも哀れになるところだが、今は戦争の眞最中、食ふか食はれるかの境だ。一兵でも敵の戦闘力を減少させねばならないのだ。よし、一人残らず鐵軌の下敷にしてやるぞと、わが鐵牛部隊は斷乎たる決意の下に、容赦なく戦車を乗り入れる。すると小氣味がよい程バタ／＼とへたばつてしまふのだ。荒獅子は縦横無盡の大活躍だ。

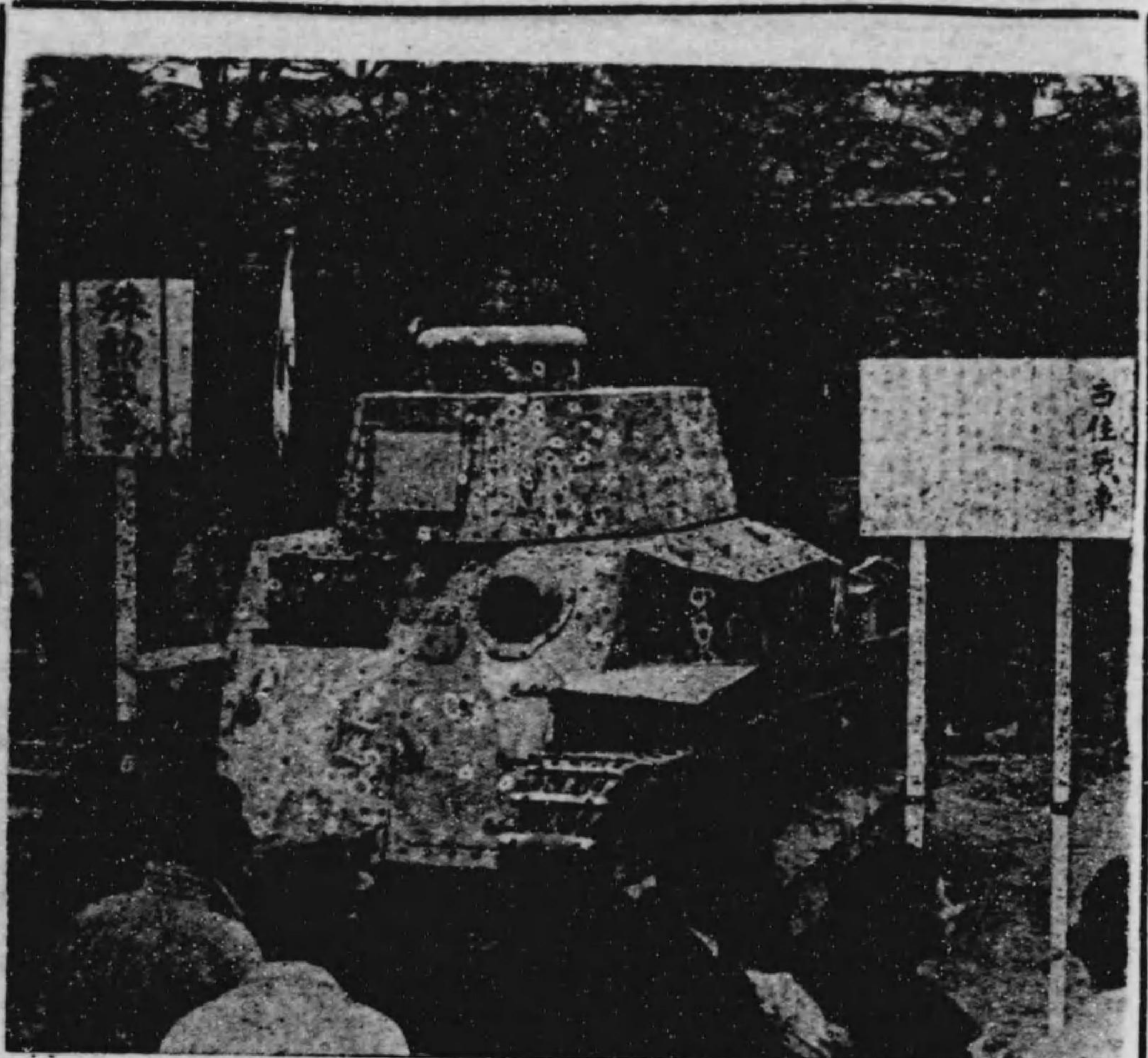
この大蹂躪は、城門から六キロも遠くまで續いた。そして洛河の河岸に達したのである。わが鐵牛に踏み敷かれた敵兵の概算は六百五十、鮮血は大地と鐵飯を紅く染めて流れた。道路上

到る所に敵屍が累々として、後續のわが自動車部隊は、このために前進が出来なかつたからであつた。

このすばらしい戦果にもかかわらず、わが戦車隊は一發の弾丸も撃たなかつたのである。勿論敵としても、突然の急襲でその餘裕がなかつたために、同様一發も撃たなかつた。これだけの戦闘に於いて、これはまことに珍しいことだつた。そのために、洛河の南岸の臨洛關部落にゐた敵二箇軍團は、前の部落でこんな凄惨な戦闘があつたことなど夢にも知らず、また鐵牛部隊が猛襲して來たことも全然氣づかずに、北岸に達した時、はしめて周章して發砲して來たやうな有様であつた。

といふやうなわけで、この臨洛關の敵大部隊も、間もなく我が戦車隊の豪膽な敵前渡河作戦によつて、殲滅されることゝなつたのであつた。

### 張家樓下宅、西住戰車の奮戦



敵軍百餘を受けし西住戦車隊長の愛車

北支の蘆溝橋ではじまつた支那事變は約一ヶ月後の八月十三日に上海に飛火した。

これは暴戻な支那軍がわが上海陸戦隊に挑戦して來たから自衛權の發動となつたのである。敵はわが軍の何十倍といふ兵力を恃んで、しつこく攻めて來る。僅かな兵力をもつて、これの防戦に つとめてゐる陸戦隊の苦心は、並大抵のことではなかつたのだ。

間もなく、わが諸軍の増援部隊は、上海附近に續々と敵前上陸を行つて、支那

軍攻撃の火蓋を切つた。

歐米から購入した最新式の武器を使用する支那軍も、無敵皇軍にかゝつては、かなふわけがない。上海から次第に追ひまкруられて、大場鎮北方約二軒の張家樓下宅といふ部落に據つて、日本軍に最後の抵抗を試みるべく實に嚴重な陣地を築いてゐたのであつた。

張家樓下宅といふのは、鬱蒼たる森林に圍まれた僅か十戸ばかりの小部落である。けれども正面が二百米、奥行が百米ぐらゐの正三角形をしてゐて、更に北方につゞけて敵陣地があり、西北方にも敵陣地になつてゐる小部落があるといふ、極めて攻めにくいところであつた。正面攻撃を受つた歩兵部隊は、一舉突撃を敢行して一度これを奪取した。ところが残念なことに、兩側から猛攻を受けて、またその夜、奪ひ返へされてしまつたのである。

さあそれからといふものは、敵もなか／＼頑強に抵抗して、戦果は一向はかどらない。そのうちに空しく數日は過ぎてしまつたのである。そこで、細見戦車隊がこれに協力することになり、十月二十一日を期してこの戦闘に参加し

たのであつた。

戦車が来るぞ！

わが歩兵部隊は、口々にかう言つて嬉しさに躍り上つた程であつた。

この細見戦車隊の中に、今軍神として仰がれてゐる西住小次郎大尉（當時中尉）がゐるのである。

西住大尉の率ゐる戦車小隊は、西北方小部落の方向から攻撃し、他の部隊は右側方向から攻撃を開始したのであつた。この頃、敵の銃砲は今までも増して猛烈に火を噴きだした。しかしこれを物ともせず、西住小隊は轟音すさまじく小部落に突つ込んだのである。

體當りだ、土壁は崩れ落ちるし、敵兵や機關銃は戦車の下敷になつた。と見る間に、わが歩兵部隊はうわーといふ喊聲をあげて突入したのである。突きまくる銃劍、逃げまどふ敵兵。かくて歩兵部隊が數日を要してなほ陥落しなかつた敵陣の一部は、僅か數十分のうちにわが手に歸してしまつたのであつた。

西住戦車長はニツコリして、直ちに張家樓下宅の攻撃に移つた。

遠方から眺めた時は、四方がすつかりクリークに囲まれてゐるやうであつたが、直ぐ傍まで行つて見ると、幸ひ一箇所だけ水の切れたところがあつた。こゝから突入するぞと思ひ定めて一車をクリークの岸において掩護させ、一車を率ゐて敵陣に雪崩こんだのである。戦車砲は物凄く唸りつゞけてゐる。敵も必死の猛射を浴せる。それが装甲板に當つてカンカんと跳ね返つてゐるのだ。敵陣に突入して見ると豫期した通り敵は第一線より直ぐ背後に戦車壕を築き、しかも水を張つてゐるのである。

えいッ！ たゞ突入あるのみだ。氣合と共にこれを突破した。敵前五十米、第二の壕には敵兵がギツシリ潜んでゐる。今にも突撃しさうな緊張一切つた顔でゐる。一車はその壕まで突進して、いきなり壕をまたぐと、猛烈に戦車砲と機關銃を撃ち出した。一車は壕の側面に來て同様に猛射を浴せかけた。

敵は周章狼狽して、交通壕を傳つて逃げ出したが、二車の猛撃にあつて一たまりもなく折重

つてたほれて行く。

そこへ豆戦車に乗つて、歩兵部隊長が連絡のためにやつて來た。わが歩兵は、戦車の後方七十米の地點まで來てゐたので、西住戦車長と打合せをするためにやつて來たのである。西住大尉と歩兵部隊長は、敵前の、しかも猛射を浴びながら大聲で二言三言交した。そして午後二時に突撃決行と決めたのである。

これで萬事手筈が整つたので、歩兵部隊長の乗つた豆戦車は、後方へ引返した。そして間もなく、その午後二時が來た。

西住戦車は、たゞの一車で敵陣に突つ込んだ。戦車砲は少しの休みもなく火を吐き、敵兵はパタ／＼とたほれて行つた。

歩兵はドーツと突撃した。

しかし残念なことには、この突撃は不成功に終つてしまつた。そこで戦車は、再び敵陣に躍り込んだ。歩兵もまた突撃した。これもやはり不成功だ。

中隊長は、敵前三十米でたほれてしまった。

あ、敵陣はどうしても突破出来るか。

西住戦車長は、この時、後方にゐる歩兵の方を振り返つて見た。すると多くが戦死して残り少くなつた歩兵は、三度突撃を敢行すべく、必死の決意をして敵陣を睨んでゐるのである。

これが日本魂だ！

西住戦車長はうなづいた。

その頃は已に戦場に夕闇が迫つて、敵味方の銃砲の火線が、眞赤な糸をひいたやうに美しく見えた。

「戦車集結！」

と豆戦車の傳令が飛んで行つた。これは一度後方に歸つてすつかり體形を整へて、攻撃はまた明日行ふといふことになるらしい。

しかし西住大尉は、歩兵の突撃が成功するまでは何としてもこゝにゐて頑張るぞと考へて、

一氣にまた敵陣に突入した。

それに續いて、歩兵が最後の突撃である。

うわーッ、うわーッ、

といふ突撃の叫びが、彈丸飛び散る戦場にこだました。戦車は死物狂ひで敵陣を暴れ廻つた。その時だ。

ダダダダーン、ダダーン。

といふ天地も裂けるやうな大爆音と共に、敵陣の一角が空高くすつ飛んだ。わが決死隊の敵陣突破が成功したのである、

パンザーイ。パンザーイ。

と口々に叫びながら、わが歩兵が突撃する。さすがに頑強な敵陣も、たうく崩れ立つてしまつた。

かうして、戦車と歩兵一心同體の張下樓下宅攻撃は見事に實を結んで、敵陣奪取が遂に成功

したのであつた。

### 鐵牛部隊廣東進撃

世界の耳目を聳動せしめた皇軍のバアイス灣奇襲上陸は、昭和十三年十月十二日の早曉であつた。

海岸防備の敵第四路軍は、上陸成功のわが第一陣の撃ち出す銃聲に、曉の夢を破られ、驚き周章して防戦にこれ務めたものゝ、無敵皇軍の追撃を阻む術は已に無く、わが歩兵部隊は怒濤のやうに敵師團司令部所在の惠州に向つて殺到したのであつた。

この上陸作戦部隊に参加した小坂、上田の兩戦車隊は、重い戦車の揚陸が早急に行かなかつたために、全部上陸完了までには丸四日間もかゝつて、十六日朝となつたのであつた。

そのうちにも、上陸した戦車は續々と戦線に飛び出し、上陸地點の澳港から約五十キロの惠州附近まで進出してゐた。

かくて、友軍の猛攻の前に、敢へなく陥落した惠州に、戦車隊は全部十六日中に集結を終りいよく本格的戦闘に入る整備を行つたのである。

それから約八十軒前方の増城攻撃に移ることになつた。身を焦すやうな暑さと、濛々たる黄塵の中を、わが戦車隊の堂々の猛進を續けて、進路の敵を撃破蹂躪しつゝ、増城の東側を流れる河幅數百米の増江の岸に達した時、ハタと行きづまつてしまつた。

といふのは、こゝに架けられたコンクリート橋が真中から爆破されてしまつてゐるのである。簡単な橋を架けるのなら、戦車兵はいつも器用にやつてのけるのだが、かう大きな工事になると何と言つて工兵のお世話にならなければ出来ない。方々偵察して見たが渡河可能の地點は見當らず、ついに友軍の工兵を待つてゐるうちに、海軍機の見事な援護爆撃を利用して、身輕な歩兵部隊は敵前渡河を敢行し、十九日午前九時半、増城市内に突入し、占領してしまつたのであつた。

上田戦車隊が増江を渡河する頃、友軍の飛行機が盛んに上空に飛來して、敵陣攻撃や偵察を

行つてゐた。  
既に味方の第一線は、餘程前方まで敵を追撃してゐるらしく、銃砲聲が次第に遠ざかるのがわかるのである。

そのうちに友軍の飛行機は、わが司令部上空に現れて、通信筒を投下した。その後間もなく上田戦車隊に〇〇部隊長から進撃命令が下つたのである。飛行機から得た敵陣地後方の情況を示しながら、馬上豊かに〇〇部隊長の命令だ。

「敵は目下續々増仙分路を廣東方向に退却中。正に進撃の好機なり、貴隊は速やかに敵縦隊中に突入蹂躪すべし。」

上田戦車隊長は、これを部下戦車に傳へた。かくて荒獅子の群れは、再び猛進撃を開始したのである。

敵中突破だ。

敵陣地後方まで出て見ると、敵軍は今や退却の眞最中である。この中に戦車を乗り入れて當

るを幸ひの蹂躪を続ける。血汐のしぶき、敵兵斷末魔の喚き聲、血だるまとなつた鐵牛はなほも追撃の手をゆるめずに突進する。

今度は夥しい軍馬がゐる。かと思ふと敵の觀測所がある。速射砲が一行に並んでゐる。巨砲が數門ある。それらが何れもわが戦車隊に砲口を向けて、今正に火蓋を切らんとしてゐるのだ。

危機一發だ。上田戦車隊長は、サツと手旗で部下戦車に信號を送る。一瞬も遅れるな、鐵牛部隊は一齊に猛進して。素早く敵砲列の背後に廻つてしまつた。零距离射撃でわが鐵牛を微塵に破碎せんとした敵の企圖は、上田隊長の咄嗟の指令と、一同の敏捷な活動のために敢へなく挫折して、反對にわが鐵牛の蹂躪するところとなつてしまつたのである。

思へば、全く膽を冷やした一瞬であつた。  
その一瞬を切り抜けた後の縦横無盡の働きの快よさ、砲車も射手も忽ち鐵軌の下に敷かれてしまつた。



そのうちに、わが鐵牛部隊の目にうつたのは、黃塵をあげながら廣東方面より疾走して來る敵戰車十數台の姿であつた。小癩にもわが戰車隊と雌雄を決するつもりでやつて來たのである。かうなればいよく鐵と鐵の戦ひだ。われに戰車砲あれども、到底敵戰車の裝甲を射抜くわけにはいかぬ。事ここらに及んで敵を壓倒する術は、たゞ精神力あるのみである。

いざ來れ!

わが鐵牛部隊は、必勝の決意に燃えて、一氣に敵戰車中に雪崩こんだ、さすがの敵もこの物凄しい意氣込みには壓倒されて、先頭車が先づピタリと停止したかと思ふと、乗員がバラバラと飛び出して、稻田の中に逃げこんだ、そのために二番車もやむなく停車だ。三番車はまごまごする。敵戰車の混亂に乗じて、わが鐵車はいよく突込んで暴れ廻る。見る／＼うちに敵の乗員は、どれもこれも戰車を捨て、車外に飛び出し。逃れ去らうとするのである。これらはみな、わが戰車砲、機關銃の餌食となつてしまつた。かくして敵戰車の一群を、たう／＼完全に鹵獲してしまつたのである。

そこで後方の段列(戰車の燃料、彈藥、食糧、各種の修理機械などを積んだ自動車部隊)に傳令が飛んだ。そしてそこから豫備操縦手が到着すると、早速鹵獲戰車の試運転をやつて見た。結果は上々だ。燃料も彈藥も澤山あるし、機關銃も完全である。すぐ追撃戰車隊の中に加へることになつた。わが軍の士氣はいよくあがる。

ここで、敵兵の射撃に應戦しつゝ、機關の整備を續けてゐるうちに、小坂戰車隊や後續歩兵部隊が追及して來た。

これからは、小坂戰車隊と上田戰車隊が、交互に先頭を受持ちながら、廣東へ廣東へと進撃して行つたのである。このため歩兵部隊は、遙か後方にとり残されてしまつた。

十月二十日だ。廣東まであと十里足らずである。猛進また猛進を續けて、敵中を突き進む上田戰車隊の先頭には、さまざま珍事件が起つた。

夕霧があたり立ちこめて來た頃、先頭車の展望孔から前方を見つめてゐたわが戰車兵の目に、妙な光景がうつたのである。といふのは、廣東方面から一台のサイドカーが、全力をも

つてこちらに向つて来るのだ、友軍のでは勿論無い。上田戦車隊が最先頭を進んでゐるのだから、それより前に友軍のサイドカーなど出る筈は決してないのである。

と思つてゐるうちに、そのサイドカーは戦車隊のところまで来ると、ピタリと停車して一將校が下車し、戦車に向つて擧手の禮をした。それが何と敵の將校である。わが先頭車の戦車兵は思はずびつくりしてしまつたが、先方は日本戦車と氣がついて、その何百倍も驚いてしまつた。しかし、あつと言つた時は既に手遅れ、忽ちわが軍に捕へられて、サイドカーと、それに積んであつた書類は押收されてしまつたのであつた。

これは上田戦車隊があまりに電撃的進撃振りだつたので、廣東の敵警備司令部では、前線支那軍の敗退を知らずに味方の戦車隊とばかり思つて近づいて来たのであつた。

サイドカー事件があつてから、ものゝ五分とたぬうちに、今度は立派なシボレー乗用車が一台疾走して来た。これも敵將校が乗つてゐたもので、戦車隊のところに来て下車したまではよかつたが、やはり直ちに捕虜となつてしまつた。乗用車の將校は、廣東市警備司令部の課長

陳大佐外四名の佐官級ばかりの將校たちで、前線視察といふわけで威勢よくやつて来たところだつたのである。

このやうな珍事件が幾つかあつた後、わが鐵牛部隊は、鎮龍墟といふ部落に入つて大休止をとり、車輛の整備をして、いよゝ明日廣東突入といふことになつたのである。

十月二十一日の空は、ほのゝくと明けそめた。今日もまた上天氣らしい。戦車隊の士氣はますます／＼上るばかりである。

もう何日間も米を食べてゐない。けれども廣東突入といふ、男子本懐の仕事を決行する直前なのだ。その興奮で一ぱいである。僅かに乾パンをかじつて腹ごしらへをする。

さあ前進！

友軍飛行機は、早朝から戦車隊の頭上を飛んで敵狀を報告してくれるのである。通信筒が落下し、無電が入る毎に、感謝の氣持で一ぱいである。そのため進撃路は誤ちなく決めることが出来る。

小坂戰車隊、上田戰車隊の順で廣東街道を土煙りをあげながら鷲進する。小嶺にも途中度々敵の對戰車砲の射撃を受けた。その度毎に敵陣に殺到してこれを揉みつぶし、なほも廣東へ廣東へと進むのである。

廣東近くでは、わが戰車、歩兵、騎兵一體になつて、敵の廣東防衛陣地を何度も撃破占領した。

敵兵は潰走に潰走を續けるのみである。

赤い夕陽が南支の空を染めて沈みゆく頃、わが鐵牛部隊は猛然と廣東市内に突入した。かくついに敵の南支最大の據點廣東は、わが戰車の鐵軌の下に陥落してしまつたのである。廣東上空を飛んだ友軍飛行機は、わが地上部隊司令部の上空に飛來して、通信筒を投下した。部長がそれを開いて見ると、かう書いてあつた。

「友軍戰車の市中行進を見る、我れ機上に泣く。」

部長はこれを読んで、日の丸を押し立てながら廣東市内を堂々と行進するわが鐵牛部隊の

勇姿を喰にうかべ、感謝の眸をぬらすのであつた。

わが荒鷲は、通信筒落下と共に、廣東陥落を祝ふ宙返りを、南支上空で鮮かに行つた。

パンザイー、パンザイー。

友軍感謝の叫びは、薄暮の地上をふるはした。

#### 四、今次歐洲戰爭と戰車

##### ドイツ戰車のポーランド電撃

ドイツのヒットラー總統は、西曆一九二〇年ナチス運動を開始して以來、次の三要綱を以てドイツの對外政策の根本を爲すものと提唱して來た。即ち

- 一、民族自決の原則に基き大ドイツ國を練成す
- 二、ドイツ民族の他民族に對する同權を獲得す。これがため「ベルサイユ」「サンゼルマン

兩條約を破棄す

三、ドイツ民族の生活及び過剰人口移植のために、國土及び植民地（大戰に奪取せられたるものを指す）を取得す

そして一九三五年に政權を掌握すると、非常な熱意をもつて、この實施に邁進して來たのであつた。

そして第一の目的は、一九三五年に於ける再軍備宣言及びこれに次ぐラインランド進撃により、ベルサイユ條約の破棄をもつて達成され、更に現在は第二目的も解決して第三目的の達成に邁進してゐる時期にあると見てよいであらう。

そして、この第二、第三の目的達成のために、ドイツは強力なる軍備と、第一次世界大戰に苦杯をなめた資源戰的整備に全力を注ぎつゝあつたのである。ジグフリート線といふ國境築城地帯などは、その軍備の一部として設けられたもので、火器をもつてゐる「ベトン」體の數は、左の通り著しく増加を見せてゐるといはれたのであつた。

一九三六年 一一九個

一九三七年 五〇〇個

一九三八年秋 一七、〇〇〇個

一九三九年夏 二二、〇〇〇個

殊に一九三八年五月、チェッコ問題が險惡となつてから、その強力な組織と統制の力に依つて、莫大な人員資材を運營してこれが強化に努力を集中したことは周知の事實である。

かくて「所謂ジグフリート線は、ドイツ西方正面の一大防壁となり、必要の場合採るべき東方に向ふ攻勢に對し、いよ／＼その作戰に確實性を加へるに至つたのであつた。

一九三九年三月中旬、ドイツはチェッコを合併した。これ以來、ポーランドはいよ／＼對獨脅威を感じること深く、獨ボ關係は急激に惡化した。

一體、ポーランドは東はソ聯に接し、西はドイツを控へ、その兩國間に介在して獨立を全ふせんがために、一切を犠牲にして専ら國防に努力し、僅々三千萬の人口を有するに過ぎないの

に拘らず二十七萬の常備軍を擁し、その陸軍費は年々國家總豫算の半近くに達してゐたのであつた。かく國防充實に邁進する一方、巧みに外交手腕をもつて獨逸關係を調整し、平素自主的態度を堅持して、對佛政策を遂行すると共に經濟的援助關係を絶たず、反ソ意識は漸次増大しつゝあつたが、ドイツの勃興に伴ひ、次第に反ソ意識を緩和して來たところであつた。

ところが、ドイツのメーメル撤併斷行、ダンチヒの歸屬及び廻廊に自動車路設定の要求等は、いよいよポーランドを刺戟し、自國保全のために英ポ相互援助條約締結を決するに至つたが、ドイツはこれを以て明らかに英、ポがドイツを敵視するものとして、一九三九年四月二十日、一九三四年以來の獨逸協定の破棄を宣言したのであつた。しかしポーランドは、こゝでも一歩をドイツに譲るなら更に數歩を要求し來るであらうし、結局ポーランドの壊滅か又はドイツの保護領化に甘んじなければならなくなるので、ドイツの領土的要求は一歩も讓歩してはならないものとして、兩國は全く對立状態に入つてしまつたのである。

かくて、一九三九年春以來、兩軍は作戰準備を進めてゐたが、ドイツは最後迄外交的策略に

よつてポーランドを壓服しようとする百方手段を盡したものの如く、ドイツ軍のポーランド國境に集中を開始したのは、開戦前二週間即ち一九三九年八月後半のことであつた。

九月一日早朝、ドイツ軍は一齊に國境を侵して攻撃前進を開始した。ポーランド軍は、ドイツ軍進攻を知らなかつたもの如く、ドイツ軍の前進は急速に敢行された。

精銳を誇るドイツ空軍の制空權の獲得と、戰車隊を先頭とする機械化部隊の猛進によつて、ポーランド軍の指揮組織は崩壊され、戰況は刻々と獨逸軍に有利に展開して、九月八日には、早くも獨逸軍戰車隊は首都ワルソー郊外に達して概ね分斷に成功したのであつた。

その後ドイツ軍は、その主力をもつて向ワイクセル以西に存在するポーランド主力を捕捉殲滅するために、各方面から活潑な機動に依る包圍迂回を行ひ、クトノ及びラドム附近の地區に於いて十數個師團のポーランド軍を包圍撃滅した。

九月十三日頃からは獨逸軍は主力をもつてワイクセル以東に移り、ワルソー、レンベルグ間及びレンベルグ周辺の地區に於いて、更に退却した敵の數箇師團を包圍したが、九月十七日に至

リソ聯軍のポーランド領侵入が開始され、十八日ポーランド政府のスマグリー元帥等はルーマニヤに遁入し、二十日ほどブレストリトウスク東側南北の線に於いて、獨ソ兩軍は接觸し、ポーランド軍は全く壊滅し去つたのであつた。

そして二十一日には、ナレウ、ワイクセル、サン河の線をもつて、獨ソ兩軍間に於ける暫定的占領地域の分界線と決定された。

ワルソー守備軍は、ドイツ軍が非戦闘員に對する慘害を考慮して降服を勸告したが之に應ぜず、つひに十八日から包圍攻撃となり、二十八日に至つて降服したのであつた。

ポーランド戦争に於いて、ドイツ軍はポーランドの全軍を壊滅し、その戦死傷は無數といはれ、捕虜六九四、〇〇〇名を得たのであつたが、ドイツ軍の犠牲は、戦死僅かに一〇、五七二名、戦傷三〇、三二二名、行方不明三、四〇〇名を數へたに過ぎなかつた。

このドイツ軍勝利の原因に就いては、さまざまの言はれてゐるが、先づ一、ポーランド軍が英佛の支援を過大視して、實力不相應の戦争を敢行したこと。

- 二、質的に優良なるドイツ軍が、量的にも亦十分に優勢なる兵力を使用したこと、即ち總統が統帥部に對し必要十分なる兵力を與へたること。
- 三、ポーランド軍の對獨作戰準備は、一般に甚だ不十分であるのに加へ、ドイツ軍はポーランド軍の動員未完に乗じ、制先の利を占めたこと、
- 四、ドイツ軍は北方東プロシヤから南方シユレジア、スロバキヤに至る間に集中し得て戰略態勢に優越したこと。
- 五、ドイツ軍は、優秀なる科學者陣を動員して、綿密な氣象觀測を行ひ、天候を利用した作戰を行ひ、且つ強大な機械化部隊の活躍が目覺ましかつたこと。
- 六、ドイツ空軍は絶對優勢であつて、速やかに制空權を確保した外に、ペトン帶陣地の迅速な突破。機械化師團のための搜索、敵軍の對應處置、特にその兵力轉用防害等、地上作戰に極めて緊密に協力したこと。
- 七、ドイツ軍の統帥力卓越し、重點成形、包圍迂回を徹底し、終始自主的積極果敢に作戰を

指導し、ポーランド軍の統帥怠慢無氣力であつたのに比し、著しく優秀であつたこと。が主なるものとして擧げられるのである。特に戦闘に於いては、ドイツ軍戦車隊が、完備せる道路を利用する迅速大膽な作戦に出て、偉大な戦果を擧げ、その勝利を早目にしたことは、獨ボ戦史に燦然たる光りを放つ功績として特記されねばならぬところである。

### マチノ要塞突破戦

ドイツ軍のポーランド侵攻に對し、英佛は共同してポーランド援助の對獨宣戦を布告した。ところがドイツは、間髪を入れず、一九四〇年四月上旬、突如ノルウエーに侵入、英國のノルウエー占領を窺知して先手を打つたのであると發表した。かくて戦禍は一躍北歐に飛火し、英佛軍は續々ノルウエーに上陸、南部ノルウエーに於いてドイツ對、英佛諸聯合軍の激戦が展開されたが、ドイツ空軍と精銳機械化部隊の活躍は、聯合

軍を徹底的に撃破して、聯合軍をして南部ノルウエー撤退の已むなきに至らしめた。時の英國首相チェンバレンは、議會に於いて、次の如くノルウエー敗戦の理由を發表した。「先づ英國のノルウエー作戦軍が、兵力からいつても、裝備からいつても、強力なドイツ軍に匹敵し得るものではなかつたことが最大の敗因である。次に英佛側が、先にノルウエーに入つたドイツ軍のために、逸早く空軍の基地を占領されてしまつたことも主要敗因である。聯合軍がたつた一つでも空軍陣を確保し得たら撤退するまでに至らなかつたらう。ドイツ軍はノルウエーに進入するや否や空軍基地を獨占してしまつて、そこから英佛軍の上陸作戦に妨害を加へた。このため佛軍のナムソス上陸が終つたところには、その兵站基地はめちやく／＼に取り壊されてしまつた。英軍は上陸すると南下行動を起したが、絶えず空軍の爆撃、對地掃射と、戦車隊を主とする機械化部隊の奇襲に脅威された。しかも、トロントハイム・フィヨルドを巧みに利用して、ドイツ軍は見事な機動力を發揮、ナムソスから上陸した英國の先遣部隊の連絡を完全に遮断してしまつた。これに對し英國の空軍は十分な掩護を與へることが出来なかつた

しかもドイツ軍は、戰車隊を先頭にドン／＼南方から北上して来る。その爆撃機は英軍部隊に對していよく猛威を發揮し、英軍の掩護部隊の上陸はこのため全く不能となつてしまつたので、遂に撤退せざるを得なくなつてしまつたのである。

かゝるうちにも、五月八日になると、ドイツ軍の戰車、装甲自動車等を中心とする二部隊がオランダ國境方面に集結したとの情報があり、オランダの不安は著しく増大して、陸海空三軍の空前の大動員を行つた。

ところが五月十日午前五時半、ドイツ軍は空陸呼應して怒濤の如くオランダ、ベルギー、ルクセンブルグ三ヶ國の國境を超えて進入した。ドイツ軍の誇る落下傘部隊は空中から白蘭各地の飛行場に奇襲降下してこれを占領、後續部隊は續々空輸されて戦線に立つたのである。

かくて五月十三日午前には、ドイツ戰車隊の先頭は早くもベルギーのリージュ要塞を占領、城頭高くハーケンクロイツ旗は掲げられた。リージュ要塞を前衛據點とするベルギーの對獨要塞線は「小マジノ線」と呼ばれ、北部はエベンメール附近から、ドイツのジグフリート線

に相對して獨白國境に沿ひ、南部はベルギー、ルクセンブルグ國境ヴァートン附近に至る、全長約二百キロに亘り堅固な防禦設備が施され、リージュ、マルメデイ、バストーニュ三要塞が中心となつてゐたのだつた。たほリージュ要塞はその周圍にエベンメールのほか、レヴェクリエール、アウアン等多數の小要塞を有し、前大戰當時獨白兩軍血戰の地として知られてゐたのである。

リージュ占領後僅かに二日の五月十五日、ドイツ軍は近代戰爭の全機能をあげて決死の猛撃を敢行し、北佛セダン附近に於いてミューズ河を渡河した後、難攻不落を誇つたフランスのマジノ要塞線を遂に突破してしまつたのであつた。

このマジノ線突破は、實にドイツ戰車隊と空軍の協同作戰による偉大な戦果であつて、敗戦フランスの軍事専門家は、この直後、ドイツ軍の要塞線突破戰術を次のやうに説明した。即ち「ドイツ軍は、セダン、メジエール戦線で、會つて見たこともないやうな機甲部隊の大集團の快速機動を行つた。セダン附近のミューズ河は、水深六メートル乃至七メートルだが、ドイツ



の三十噸戰車は平氣でこれを渡河し、戰車防塞を乗り越えて進撃して來た。機動のスピード化と攻撃正面の快速轉換が前大戰には見られなかつた特徴だ。ドイツ軍の大型戰車から成る機構部隊はどんく、錐揉み戰術で突破する。

砲兵では掩護するの間に合はないから、主として空軍がこの掩護に當つた、この陸上の機甲部隊と空軍のコンビこそ、近代戰術電撃戰の最大要素なのだ。ある意味からいへば、戰車、機械化部隊、爆撃機の三つの要素の集團攻撃を新兵器と名附けることも又來る。これは前大戰以來考案された作戦の革命的なものである。これに要する戰術は、武器力活用の巧拙によるところが極めて多い。

往時の騎兵隊が務めた役目は、今日では機械化部隊が務めるのであるが、敵軍大部隊の戰鬥力を迅速に無能化するのがこの取柄である。

前大戰に登場した戰車は、重量が二十七噸もあり、速力も遅く時速三キロといふ遅々たるものであつた。今日では重量も三噸から百噸近くのものまで様々なもので、速力は時速六、七

から百斤、武装も輕機關兵から六インチ砲に亘る多種多様のものをのせてゐる。整備人員は一人のもあれば十五人のもある。装甲鐵板は、一センチ乃至五センチに及び、地均し装置を施したのもある。水陸兩用の推進力を備へるものがあることは勿論だが、近頃ではダンスをやるやうな曲藝的なものさへある。今回の戰爭では、ドイツの高速輕戰車が、電撃により偉効を奏し注目をひいてゐる。

ドイツが、セダン方面のマジノ線突破の幅百斤といふやうな敵陣粉碎に成功するには、少くとも一個師團以上の戰車隊が鐵軌を連ねて時速八十斤以上で目白押しに奮迅しなければならぬ。ドイツの戰車隊がこのやうな能力を擧げ得るかどうかは從來疑問となつてゐたが、今回のマジノ線百斤の突破はかゝる威力を實證したものである。

セダン南方には急傾斜の丘陵が多く、相當の数の重戰車の登入がまづ必要である。この戰術の重要な要素の一つは膨大な燃料の消費である。ポーランド戰爭の二週間に、ドイツ戰車隊は百萬トンの燃油を消費したといはれる。フランスの機械化師團は、一哩(約一杆六)前進に四

百八十三ガロンの燃油を必要とする。しかも戰車隊の進軍には、爆撃機と襲撃機の大部隊掩護を要し、直ぐその後から歩兵大部隊の進撃が必要である。時速八十軒といふやうな高速前進に歩兵の大部隊と後部連絡機關がどうして隨いて行けるかも戰術上の難題であり、これをドイツが果して解決したかどうかは、こゝ數日間の戰局發展によつて判明するものと見られる。」

また五月十六日には、イギリスのヘンリー・ロワン・ロビンソン大將は、ロンドンからラジオを通じて、ドイツ軍の新戰術に關し次の如く放送した。

「ドイツの新戰術は相當の効果をあげてゐるやうだが、これはドイツ軍が英佛側の多數の新銳對戰車砲でもびくともしない優秀な性能をもつ重戰車を用ひてゐるからである。ドイツ軍の重戰車は英佛軍の攻撃を物ともせず前進し、一舉にしてその砲座を破壊する。そして歩兵部隊はその戰闘に影の形に添ふ如く續き、塹壕を直ちに占據し、一方敵空軍は爆弾を雨霰のやうに注ぎかけ、また機銃掃射を加へる。かうして更に豫備軍は、英佛軍の立直る隙をも與へず突込んで來るのだ。」

事實、ドイツ軍はマジノ線突破後も、更に猛攻を續け、坦々たるフランドルの野を彈丸の如くに疾驅西進し、アラス、アミアン、アベヴィル一帯を占領し、北方の聯合軍百萬を、フランスの本隊から切斷してしまつた。

これはドイツ裝甲部隊、機械化部隊の大手柄であつた。

ドイツ軍はこの包圍網を時々刻々に壓縮、敗殘の英佛軍は、ダンケルクから死の脱出をして英本土に逃げ歸つたのであつた。

この間、五月十四日には、オランダ軍總司令官ウインケルマン將軍は、ドイツ軍に降服し、全オランダ軍に抗戰中止を命令し、同二十八日には、ベルギー國王レホポール三世は、五十萬の兵と共にドイツ軍に投降した。

その後ドイツは猛射の手をゆるめず、佛首府パリをはじめ、各地を續々と占領した。かくてフランスは遂にドイツ軍に對し、降服を申出たのであつた。

### レ市獨ソ戰車の一騎打

今次歐洲大戰に於いて、英本土上陸を一舉決行するかに見えたドイツ軍は、突如鋒先を東に轉じてソ聯に進入、全世界驚愕のうちに獨ソ戰爭は勃發したのである。

これはドイツが、對英戰爭繼續上絶対必要なウクライナの穀物とコーカサスの石油を目ざすものと解されてゐるが、進入ドイツ軍は、ソ聯赤軍の猛烈な抵抗を排除しつゝ、銳意レニングラード、モスクワ、キエフ、ハリコフの四都を占領すべく驀進した。

この獨ソ戰爭に於いて、兩國戰車隊が大活躍をしたレニングラード血の攻防戰の模様を少し述べて見やう。

一路レニングラードへ、レニングラードへと進撃するドイツ戰車隊並びに歩兵部隊に相呼應して、ドイツ空軍は八月三十一日（昭和十六年）以來、レニングラード防衛の赤軍陣地に對し連續的猛爆を敢行し、赤軍戰車、歩兵部隊並びに要塞を次々と潰滅せしめた。タリンに於いて

敗退した赤軍は、續々レニングラード防衛線まで遁走するの止むなきに至り、一方ラドガ湖とオネガ湖との中間地帯及びラドガ湖とフィンランド灣との中間地帯に於いては、北部よりフィンランド軍が壓迫しつゞけ、九月二日には、北部戰線の赤軍はレニングラードを最後の據點として死物狂ひの防衛陣を布いて、ドイツ軍並びに聯合軍の怒濤の如き、レニングラード總攻撃は、一齊に火蓋を切られんとする状態になつたのであつた。

九月六日、ドイツ軍はレニングラードに向つて、西、南東南の三方面より、包圍線を壓縮、レニングラードに至る鐵道、幹道をすべて遮斷した上、連日長距離砲をもつて重砲火を浴びせかけ、同市の發電所、軍需工場をはじめ各種の重要軍事目標に對して集中砲火を送つて、着々戰果を擴大して行つた。そして最前線のドイツ戰車部隊は市内の工場の煙突、ラジオ放送塔などの見えるところまで進撃したのである。

翌七日、レニングラード防衛最高軍事會議員であるソ聯海相クズネツォフは、ラジオを通じて、「すでにレニングラード市は戦線と化した」と冒頭し、次の如き悲壯な放送を行つた。即

「レニングラード市民は、武器をもつて赤軍及び赤色海軍と共に立つた。数千の労働者は戦線からレニングラード市内に至るあらゆる場所に陣地を築き、各工場では夜を日についで爆弾が作り出されてゐる。われ等は市民諸君が敵を撃碎することを信じ、またわれ等の子供がこの美しいレニングラードの街を守り、祖國のために勇敢に身を捧げる父等のことを誇り得るであらう。」

一方、レニングラード市の周囲には、無慮百萬の人力を動員して、ドイツ戦車隊の進撃を阻むため、晝夜兼行で対戦車壕や、鐵棒防壁が構築された。

レニングラード防衛の最高指揮官は、ソ聯赤軍の巨星ウオロシロフ元帥であり、攻むるはドイツ陸軍の至寶フォン・レープ元帥である。攻守兩軍死力を盡しての血戦である。

九月十五・六日になると、レニングラード攻防戦は最高潮に達した。ドイツ戦車隊、歩兵部隊の猛に對して、ソ聯防衛軍は孤立したトーチカに據り必死の抵抗を試みた。また超大型のソ聯

マンモス戦車も出動し、ドイツ軍阻止に死力を注いだ。附近の地理を知悉するソ聯砲兵の射撃は極めて正確で、ドイツ戦車も相當の打撃を蒙つたのであつた。

しかし、これにひるまず、ドイツ突撃隊は戦車部隊の下に、ソ聯兵のトーチカを抜くために果敢な白兵戦を続け、地雷網、鐵條網を切り拓いて、ソ聯戦車と英雄的な一騎打ちを敢行した。かくて、兩軍の被害は、ともに甚大な數に上つたのであつた。

九月十六日、ドイツ總統大本營公報によると、

「レニングラード攻撃の進展と共に、ドイツ軍はレニングラード市南方のイルメン湖南部地方で、ソ聯軍十八ヶ師、約二十七萬を撃破した。即ちソ聯軍九ヶ師は完全に打破られ、他の九ヶ師も甚大なる損害を蒙つて敗走した。ソ聯側は最初の二ヶ月の戦闘で甚大な被害を出したにもかゝらず、イルメン湖南方戦線に驚くべき多數の戦車を集結してゐたのであるが、過去二週間に亘るドイツ側の作戦によつてレニングラード防衛の致命的な損害を加へられるに至つたのである。この戦闘の意義として左の二點が考へられる。一つは、フォン・レープ將軍はレニ

ングラード攻撃に全力を注ぎ得ることになつた。二つは、西北方からするドイツ軍のモスクワ進撃にその途を開いた。」

かくて、ソ聯の頼みとするレニングラード市の運命は、ドイツ軍猛攻の前に刻一刻と迫つて行つたのである。九月十七日當時の獨ソ攻防戦の様子は、ドイツ従軍新聞班員ベルトネーゲルの觀戦記によつて、手に取る如く知られる。即ち、

「レニングラードの周圍には、二重に堅固な防禦陣地が設けられてゐるが、ドイツ軍はこれを二日で突破し、我々は曾てロシヤ皇帝がその麾下部隊を親閲したレニングラード近郊に陣地を前進させた。レニングラードの周圍はトーチカ、戰車壕、掩蔽壕などの陣地が、ぎつしり張りめぐらされてゐる。我が軍は市の北方から、戰車と歩兵部隊の協力により、文字通り肉弾戦を演じたがら一步步と敵陣を奪取し、まづ第一防禦陣地を攻略した。

敵は大砲や機關銃を揃へるは勿論のこと、大きな戰車を土の中に埋め込んで砲台の代りに使ふといふ、全く捨身の反撃を行つたが、我が軍は五時間の猛攻ののち、遂にこの陣地を奪取し

た。翌早朝には、ドイツ空軍の急降下機や爆撃機が出動し、第二陣地に猛爆を開始した。赤軍は戰闘機と高射砲でこれを阻止しようとしたが、我が將士はこれに屈せず果敢なる攻撃を續け友軍砲兵の猛攻と相俟つて、遂に第二日目にはこれも突破することが出来た。

翌日の早朝には、我々は占領した附近の高地に登り、朝日を透して敵陣を覗ふと、森の彼方にレニングラードの大きな街が見える。住宅街の屋根はキラ／＼と輝き、ネヴァ河畔の工場の煙突からは眞黒な煙りがまだモク／＼と上つてゐる。霧の中には有名なイザツク教會の大伽藍がぼんやり浮び、その東北に當りクロンシュタットの軍港が小黒く霞んでゐる。沖合には小さな軍艦が一隻だけボツンと浮んでゐる。見渡す限り屋根また屋根のこの大都會も、今や僅かに十九軒の近距離に迫つてゐるのだ。後方の砲兵陣地からは、市街に向つて猛烈な砲撃が開始されてゐる。こゝ數日間來この街を目標に苦闘を續けて來た全軍兵士は、今レニングラードを指呼の間に望んで元氣百倍、突入の日ももう間近と勇み立つてゐる」

かくするうちに、ドイツ戰車部隊の先鋒は、空軍の爆撃掩護の下に、勇戦奮闘、遂にレニン

グラード郊外の公園に突入した。ソ聯側はこれに對し、砲の集中射撃と重戦車をもつて反撃したのであつたが、甚大な損害を被つて撃退されてしまつた。

その後獨ソ戦争は、大東亞戦争の勃發その他國際情勢の急激な變化のために、大進展を見るに至らないが、レニングラード獨ソ兩軍戦車隊の一騎打は、當時のものをもつて最も激烈を極めたものといへるのである。

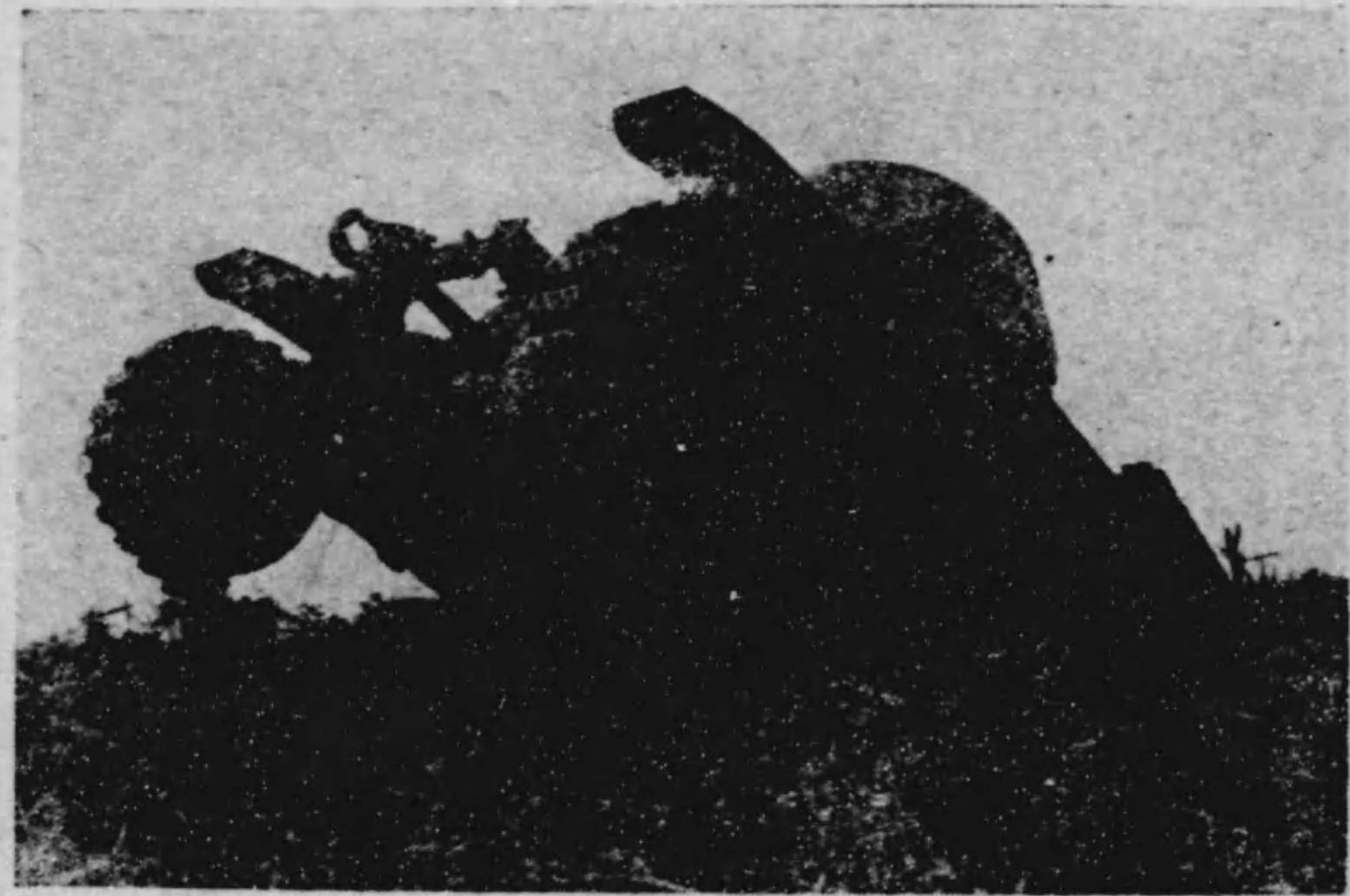
## 第四課 戦車とはどんなものか

### 一、戦車の種類

戦車は、その全重量によつて、重戦車、中戦車、軽戦車の三種に区分される。また場合によつては、重軽の二種に分けることもある。

三種に区分する場合の軽戦車といふのは、全重量が十噸以下のものであつて、中戦車は二十噸までである。重戦車といふのはそれ以上の重さのものをすべて言ふので、現在のところ世界最大といはれるのは、フランス陸軍の九十二噸のものである。

重軽の二種類に分ける場合は、凡そ十五六噸を限界として、考へられてゐる。しかしこれらは何れもはつきりした確定的な分類ではないのである。



車戦輕の軍本日



車戦型中のツイドルす撃進を中雪

なほ豆戦車と呼ばれる全重量三噸乃至五噸のものもあるが、これはイギリスに於いて最初に造られて、最近では各國とも備へてゐるやうである。

また、最初にアメリカのクリスチ會社で研究された水陸兩用戦車は、直ちに列強軍部に採用されて、今や何れの國に於いても優秀な性能を備へたものが見られる。これは文字通り陸上のみでなく水中も自由に航進出来るものであつて、普通の路上を走る時は、自動車と同様に車輪をもつて走り、泥土や凹凸のある道なきところを走る際には、一般戦車と同様に無限軌道をもつて走る。また車體を没するやうな深い水中に入れば、直ちにモーターボートと同じやうに航進出来る装置となつてゐるのである。湖沼等極めて多い土地に於ける作戦には、極めて重寶なものである。

それから、第一次世界大戰當時に初めて出現した火災放射戦車といふものもある。これは戦車に裝備した砲身のやうな放射機から、火炎を放射して敵兵を焼殺する役目をするもので、今次歐洲大戰にも英獨兩軍によつて盛んに用ひられたやうである。

## 二、戦車の用法

戦車を如何にして戦闘に用ひるかといふと、これは戦地の状況によつて異なるのである。そこで世界各国は、何れも假裝敵國、假裝戰場によつて、その土地に適する戦車に主力を注いで造つてゐる。

一旦戦闘となつた場合の各種戦車の用途について言へば、先づ重戦車は、陣地戦に於いては中、軽戦車の通過し得ない障礙物を破壊し、進んで要地の占領などの役目をし、また運動戦に於いては、攻撃及び防禦の據點となり、障礙物を破壊し、中、軽戦車の親となつてその能力を發揮するのである。更に防禦戦に於いては、攻撃軍の不意に乗じて逆襲の據點となり、または主攻撃部隊を挫折せしむる等の役目をするのである。

中戦車は、運動戦に於いては重戦車と連繫して用ひられ、また必要に応じて重戦車の代りとなることもある。けれども陣地戦の場合には、殆んど重戦車と一緒に用ひられるのである。

軽戦車は、獨立して用ひられることは稀で、攻撃防禦共に、重戦車、中戦車と協同して使用されるのである。軽戦車は、その動作が極めて輕敏であることが生命であつて、重戦車の鈍重な缺點を補つて効力を發揮しようといふのである。

第一次世界大戰當時は、各國ともそれ／＼異つた形式の戦車を盛んに造つたが、その目的はすべて歩兵のために突撃路を開くことにあつたのである。

ところが大戰後は、戦車の發達するにつれて、各國の國情により用法も自然に異なることになつて來た。例へばフランスは、あくまでドイツを假想敵國としてゐたため、歩兵進路開拓主義の下に、中戦車を主力としてこれに重戦車を加へて行く方針であつたが、今次のヨーロッパ大戰に於いては、鈍重なフランスの重、中戦車が、性能優秀なドイツ中戦車のために慘々な敗北を喫してしまつたのであつた。

ドイツは、大陸で戦争することより考へてゐない。しかも第一次世界大戰の初期に於ては、



英佛軍の戦車のために老大な損害を被つた苦い経験から、全機能を動員して戦車の大量生産を行つたのであつた。それが優れた科學と技術の國だけあつて、何れも高性能のものであり、今次大戦で示された結果を見ても英佛軍の戦車砲彈を受けつけぬ程強力な装甲と、速力、上昇力、攻撃力等も列國のより數段進んだ中戦車を多く使用してゐるのである。なほ重戦車は、敵の要塞破壊等に、航空部隊と協力して今次大戦に多くの偉勳を示してゐることは、已に衆知の事實であらう。まことにドイツの誇るべきものは、戦車を主體とする精銳機械化部隊である。ソ聯も、ドイツの指導によつて機械化部隊の整備に力を注ぎ、戦車装甲自動車の数に於いては各國を遙かに凌ぐかに見えたが、獨ソ戦によつて知られたことによると、ドイツ戦車に比して、ソ聯戦車は著しく弱體であるといふことである。

イギリスは、海國でありながら大陸での戦闘といふことを考へて、常にその方針の下に軍備を進めてゐる。しかも聯合軍の一に参加して戦ふといふ想定の下に、十噸から十四噸ぐらゐの輕戦車を主として備へて、これに豆戦車を加へてゐるのである。豆戦車は歩兵に屬し歩兵の突

撃を容易にするために機關銃の楯の作用をするのである。そこで輕戦車の方は速度が毎時五、六十軒であるのに、豆戦車の方は三十軒程度である。しかし、この方針によつて整備訓練されたイギリス戦車も、ドイツ機械化部隊の電撃作戰に敢へなく撃破されたところを見ると、その性能の點に於いて、ドイツ戦車に及ばなかつたことが知られるのである。

アメリカは、大戦後フランスの指導を受けて戦車の整備をしたので、大體フランスと同じ方針で進んでゐるものと言はれるが、未だ歐洲大戦に參戦せず、參戦したところで大陸まで陸軍を派遣するまでになるのは相當の時日を要するであらうから、その戦車の眞の實力は未知數である。兎に角戦車は、第一次世界大戦に初めて出現してから、今次の支那事變歐洲大戦まで二十數年の間に著しい進歩を遂げて來たけれども、なほ發達の途上にあると言ふことが出來やう。そこで今後如何なる威力あるものが出來るか、全く豫想を許さない。

新しき戦術が新しき戦車を要求し、新しき戦車が更に新しき戦術を生むのであるから、將來戦に出現する戦車は測り知れない。

### 三、戰車の操縦

#### 戰車操縦教範抜率

- 第一 操縦は細心且沈著にして果斷なるを要す
- 第二 操縦の操作は状況特に敵情、戰車及地形地物の状態並に射撃の種類等に應じ、機に遅れざるを要す。速度及疲勞大なるとき特に然り、而して速度の調節、速度と操向との調和は操縦上極めて緊要なるを以て演練を重ね之に習熟せしむるを要す
- 第三 操縦手は戰車内外よりする各種の命令、號令及記號に應ずる迅速なる動作及窓扉を閉鎖せる車内より敵情、地形を判別して行ふ。操縦、射撃に連繫

して行ふ操縦等に習熟すること緊要なり。

第四 操縦技能の熟達は幹部の周到なる計畫及適切なる指導と操縦手の不斷の練磨とに俟つべきものにして、操縦手の過失は理解不十分なるに因ること少からず。故に操縦教育に方りては操縦手の性質、體格、能力等を考慮は的確なる垂範と適切なる指導とに依り其の要領を體得せしむると共に之を反復演練すること緊要なり。機微なる操縦要領の教育に於て特に然り。

五 車の速度は操縦手の技能に適應せざるべからず。故に之が教育に方りては操縦手の技能の進歩に

伴ひ遂次之が暢を圖ると共に戰車を其の手裏より脱逸せしめざるに注意すること緊要なり。

第六 操縦は通常前庇を閉鎖して行ふ但し戰況之を要するとき又は危害豫防止むを得ざるときは一時間庇を開くことあり。

教育の初期に於ては操縦操作の會得を容易ならしむる爲前庇を開き操縦せしむるを利とするも、其の要領を會得せば速かに之を閉鎖して演練し以て前庇鎖閉時の操作に慣熟せしむること必要なり。

第七 操縦手は往々冷靜を失し、或は感覺鈍りて操作放慢となり、或は錯覺を起すことあり。教育の初期に於て特に然り、故に教育に方りては操縦手の性質、能力、疲勞の度、精神状態等を考慮して懇切に指導し且過度に教育の成果を急がざるの著意緊要なり。

第八 行進間危険の虞あるときは常に停止準備を整へあること必要なり蓋し停止は最も安全なる危害防止の手段なればなり。

第九 戰車の内部は常に整理し窓扉、車内各部の緊定を確實にし以て故障の發見を容易ならしめ、且急傾斜地の登降、不齊地及壕の通過等に於ける危害を防止す。

#### 第一節 姿勢

第十 操縦手の姿勢は寛裕にして持久性に富み、縦ひ戰車の動搖甚だしき場合に於ても自由に手足の動作を爲し得るを要す。之が爲體格、運動の狀態等に依り異なるも概ね左の要領に従ひ姿勢を取る。

- 一、操縦座に深く坐し上體を背當に托し、頸及頭を眞直に保ち眼は前方を直視し、肩を凝ることなく上膊を自然に垂れ兩拳は軽く握り兩股の上に置く。
- 二、兩膝は少しく開き兩足は自然の方向を保ち、右足尖を軽く噴射踐板上に、左右を踏板上に置く。
- 三、運行を開始せば眼を視孔に接近し、両手に操向槓桿を握る。但し急傾斜地、障り地帯等の通過に方りては要すれば支持桿を握り身體の平衡を保つと共に操向操作の支點と爲す。

### 第二節 始動、運轉停止

#### 第十一 始動要領左の如し。

- 一、始動準備
  - 1、變速槓桿中立位置にして副變速槓桿高位位置にありや、手動制動槓桿作用しありや、減壓槓桿減壓しありや、回轉轉把確實に脱しありやを検し要すれば之を規正したる後斷動す
  - 2、鍵を裝し電路閉閉器を閉づ
  - 3、要すれば滑油切換活嘴の位置を検す
- 二、始動實施
  - 1、減壓槓桿を握り機關の回轉に應じ前方に移し得る準備を爲す
  - 2、始動槓桿を操作し機關を回轉せしめ(分速約二〇〇回轉)十分なる惰力を曲軸に附與す
  - 3、噴射踐板を適宜壓下して減壓槓桿を前方に移し爆音を聞きたる後始動槓桿を舊位に復す

- 4、油壓適當なりやを検し運轉を停止せしめざる限度に噴射轉把を規正す

#### 第十二 始動に方り注意すべき事項概ね左の如し

- 一、始動前後の點檢を周密にす
- 二、始動槓桿を過度に永く作用して蓄電池を過放電に陥らしめざる如くす
- 三、始動困難にして始動操作を復行するときは電動子確實に停止したる後操作す
- 四、回轉轉把を裝したる儘始動するときは危害大なるを以て特に點檢を確實にす
- 五、始動後始動槓桿を舊位に復せざる時は始動

電機を燒損し、又放電し易きに注意す

- 六、始動時の噴射踐板壓下の度は機關の溫度、氣溫等に依り異なるも低速にて始動する如く勉めて之を小にす但し機關冷却せる場合に於ては十分壓下すること多し

#### 第十三 運轉停止の要領概ね左の如し

- 一、噴射踐板を離し噴射轉把を最低位置に移す
- 二、減壓槓桿を後方に引く
- 三、電路閉閉器及主回路閉閉器を操作し回路を斷つ

### 第三節 發進、停止

#### 第十四 發進の要領概ね左の如し

- 一、斷動す

二、變速主軸の回轉停止するを待ち變速槓桿を第一速度にす

三、前方を直視しつつ手動制動槓桿の駐止を解く  
四、發進に要する發力に過不足ならしむる如く聯動せしめつつ噴射量を徐口に増加す

第七十四 發進に方り注意すべき事項概ね左の如し  
一、變速槓桿を第一速度に移し難きときは一旦聯動し更に操作を復行す

二、發進の際は機關の發力、地面の抵抗等を考慮し、急激なる聯動を避け機關の回轉を停止せしめざる如くす。之が爲聯動作用を開始せば其の操作を極めて軟和ならしむると共に噴射量を適度に増加す此の際機關の音響變化及發進の初動を感利すること必要なり

三、聯動に方り發力不足の爲機關の回轉停止せんとするを察知したるときは速かに斷動して運轉停止を防ぎ更に噴射量を増加しつつ聯動す。

第十五 推進抵抗特に少き場合に於ては第二速度より發進することあり此の際聯動の操作を特に軟和ならしむると共に噴射量を適宜増加す

前項の操作は各種地形に於ける操縱の要領を會得せしめたる後教育するを可とす

第十六 停止の要領概ね左の如し

一、噴射踐板の壓下を緩め左足を聯動踐板上に致す

二、停止地點に接近せば適時斷動し右足を制動踐板上に致し、要すれば徐ろに制動して停止地點に停止す此の際勉めて直行進を行ひつつ實施す

三、停止せば手動制動槓桿に依り制動し停止を確實にす

四、變速槓桿を中立位置にて左足次で右足の壓下徐ろに緩め定位に復す

五、要すれば噴射轉把を規正す

第十七 急停止するには敏速に兩制動機を以て制動すると共に斷動して停止す

急停止は止むを得ざる場合の外之を避くるを要す  
第十八 停止に方り注意すべき事項概ね左の如し

一、制動踐板と噴射踐板とを誤りて操作し又は同時に壓下せざる如くす

二、狀況之を許せば爾後に於ける發進容易にして且發進直後操向の要なき位置に停止す

三、停止後直ちに手動制動槓桿の作用を確認す

#### 第四節 速度の増減

第十九 速度を伸縮するに方り齒車速度の増減に依るべきや又は噴射速度の増減に依るべきやは戰車の能力、地形等を考慮して決定す。此の際其の選定適切ならざるときは機關の衰損、燃料の浪費等の害を伴ふを以て綿密に教育するを要す

第二十 行進間變速に依ることなく速度を増減するには噴射量の増減に依る又速度を減するに方りては要すれば操向槓桿、制動機を併用す。

最低齒車速度より更に低き速度を必要とするときは前項に準ずるの外適時斷動す此の際半聯動の使用は勉めて避くるを要す  
噴射速度の増減を適切ならしむる爲操縱手をして各

齒車速度に於ける 關の標準回轉數の状態を確實に體得せしむること緊要なり

第二十一 變速に依り速度を増す(増速と謂ふ以下同じ)には概ね左の順序に操作す

- 一、變速槓桿を握り噴射量を増加し所要の惰力を附すると共に左右を聯動踐板上に致す
- 二、噴射踐板の壓下を緩むると共に斷動し變速槓桿を中立位置にす若干の餘裕を置きたる後一段高き速度にす
- 三、聯動しつつ新速度に應じ噴射量を増加す

第二十二 變速に依り速度を減ず(減速と謂ふ以下同じ)るには概ね左の順序に操作す

- 一、變速槓桿を握り噴射量を十分減少し要すれば制動に依り速度を低下すると共に左足を聯動踐

板上に致す

- 二、斷動すると同時に變速槓桿を迅速に一段低き速度にす
- 三、聯動しつつ新速度に應じ噴射量を規正す

第二十三 重複聯動に依る減(増)速の要領概ね左の如し

- 一、噴射量を減少(増大)し適宜惰力を低下す(與ふ)
- 二、斷動して變速槓桿を中立にし速かに聯動す。

此の際減速の場合に於ては機を失せず速度に應じ噴射量を増加す。

第二十四 減速に方り齒車の啖合困難なる場合又は

- 三、噴射量を減ずると共に斷動し變速槓桿を新速度に移し、聯動しつつ噴射量を規正す

狀況に依り中間速度を省略する場合に於ては重複聯動を用ふるを可とす

中間速度を省略する減速は熟練を要するを以て、操縦手の技能を考慮し、教育時機の選定に適切ならしむること必要なり

第二十五 變速に方り注意すべき事項概ね左の如し

- 一、常に惰力に注意し、噴射踐板及聯動踐板並に變速槓桿の操作を密に連繫せしめ、圓滑に變速すると共に急激なる聯動を避け、且各速度に於ける變速槓桿操作の時機を適切にす。
- 二、聯動の操作は戰車の速度、關の回轉數及齒車速度に適應せしむ。
- 三、増速は惰力を利用する如く變速操作を実施す。此の際第一速度より第二速度に移す場合に

於ては惰力の利用困難なるを以て通常發進後間もなく實施し變速槓桿を迅速に操作す。

- 四、減速に方り重複聯動を用ひざるときは通常惰力を十分低下す
- 五、所望の變速齒車の啖合困難なるときは一層操作を緩和にし、適當なる他の齒車に啖合せしむるか、或は重複聯速の要領に準じ、變速操作を復行するか停止す
- 六、變速は選次に行ひ中間速度を省略せざるを通常とす。

### 第五節 方向變換

第二十六 方向變換の教育に方りては先づ操向機的作用、旋回軸及び操縱座の關係位置を會得せしめた

る後、第一速度を以て弧形と操向量との一致及操作開始又は操作終了時機の判斷、方向變換中地形、地質に依る噴射速度の増減等を演練し、遂次其の程度を向上す。

第二十七 回轉を行ふには回轉半徑に應じ、噴射量を増加しつつ適時其の方側の操向槓桿を十分引き内側履帯を成るべく弧形に沿はしめ回轉終れば操向槓桿を舊位に復す。而して回轉半徑(最小回轉半徑は約八米(小なる場合、土地抵抗大なる場合等に於ては豫め減速するの要あり。))

回轉半徑及弧形長共に大なる場合に於ては要すれば小角度の回轉と短距離の直行進とを交互に反復實施す此の際操向聯機を過燒せしめざるを要す  
第二十八 施回を行ふには第一速度又は第二速度

(低)を用ひ、制動槓桿を操作するの外回轉に準ずるも噴射量は更に増加す

第二十九 方向變換に方り注意すべき事項概ね左の如し

一、停止間方向變換せんとするときは通常僅かに前進したる後行ふ

二、土地の凹凸又は地質堅硬ならざる等の爲抵抗大なる場合に於て連續方向を變換するときは軌道の離脱、毀損、空轉等を惹起することあるを以て位置の選定を適切にし且要すれば適宜少量づつ行ひ或は前進、後退を交へ實施す。

三、操向槓桿及制動槓桿の操作を速度に適應せしむ。此の際速度大なるときは其の作用極めて鋭敏なるを以て特に軟和ならしむると共に方向變

換量を過大ならしめざるに注意す。

四、操向量と噴射速度との調和を適切にす。而して操向量同一なる場合に於ても噴射速度の増大に伴ひ回轉半徑減少することあるに注意す。

五、急激なる操向及高速度に於ける連續回轉は保存及危害豫防上勉めて之を避く。

第六節 各種地影に於ける操線

一、傾斜地

第三十 傾斜地通過の教育に方りては先づ傾斜地の停止及發進の要領を次で登降、變更、方向變換及橫行の要領を教育す。之が爲先づ平坦地に於て傾斜地に於ける停止及發進の要領を教育したる後、緩傾斜

地次で急傾斜地に及す。而して教育の全期を通じ通過能力、道路の選定、速度の選擇、操向の位置、操向量の調和、傾斜、速度、顛覆、横滑、軌道の離脱等に就き教育すること緊要なり。  
第三十 傾斜地に於ては傾斜緩にして兩側軌道同高なる如く進路を選定し、其の齒車速度は傾斜地の狀況を判斷し途中變速を要せざる如く通常最初より通過に適する速度を選擇す。急傾斜地に於て特に然り方向變換に方りては操向位置の選定及操向操作を適切にす。

第三十二 傾斜地に於ける停止の要領概ね左の如し  
一、基本操縦に於ける停止の要領に準ずるも登行に於ては制動踐板及聯動踐板を略々同時に降下に於ては制動踐板を聯動踐板に稍々先だちて操

作し確實に停止す

變速槓桿を中立にするには降下せざるを確認したる後行ふ

二、急傾斜地に於ては制動踐板又は手動制動槓桿を操作し、制動の効果を確認したる後斷動す

三、急傾斜地に於て運轉を停止し、下車する場合に於ては手動制動槓桿を操作したる後、變速槓桿を登行中に於ては第一速度に、降下中に於ては後退速度にし次で運轉を停止し聯動踐板の壓下を緩む。

第三十三 傾斜地に於ける發進の要領概ね左の如し

一、登傾斜地

先づ第一速度にし運轉を停止或は逆行せしめざる如く適宜噴射量を増加し徐ろに聯動しつつ發

進の初動を確認し速かに手動制動槓桿を緩め次で完全に聯動して發進す此の際機關の發力不足せるを認めたる時は一旦停止したる後噴射量を更に増加しつつ聯動す。

二、降傾斜地

通常噴射量を増加することなく、前項に準じ操作す。而して緩傾斜地に於ては手動制動槓桿は聯動に先だち漸次に緩め、戰車の自然降下を始めたるとき聯動し終る如く操作するを可とす。此の際先づ制動踐板を壓下し手動制動槓桿の作用を解き制動踐板を前項に準じ操作し發進することあり

急傾斜地に於ては過早に制動を解き滑走せしめざる爲發進と同時に機高制動を行ひ且制動機を

併用す。

第三十四 傾斜地の登行及降下の要領概ね左の如し

一、登行

登行に方りては傾斜地の状況に應じ適宜噴射量を増加し、常に停止準備を整へつつ行進す

急傾斜地に在りては斜面に直角に進入し第一速度(低)にし要すれば操向槓桿を操作す。軌道空轉するか又は推進力不十分なるときは先づ確實に停止し要すれば適宜後退したる後噴射量を十分増加しつつ再び登行す

二、降下

降下に方りては適宜減速し要すれば操向槓桿を操作し傾斜地に入るや噴射踐板の壓下を緩む。速度尙大なるときは逐次減速し機關制動を極度

に利用し要すれば制動機を併用し惰力を減ず。速度遅きか又は短距離に在りては軽く制動し然らざる場合に於ては惰力の増加に先だち屢々短切に制動す。傾斜地脚に到着せんとするや要すれば制動を緩め増速す

急傾斜地の降下に方りては要すれば噴射轉把を最低位置にし噴射踐板に依り噴射量を規正す。

第三十五 傾斜地に於て變速するには概ね基本操縦の要領に準ずるも特に操作を惰力に適應せしめ一層敏活正確ならしむ急傾斜地に於て特に然り

減速は登傾斜地に在りては噴射量を稍々低下し斷動と同時に變速槓桿を操作し速かに聯動せしめ或は重複聯動に依り行ひ降傾斜地に在りては先づ制動し十分惰力を低下したる後斷動し迅速に變速槓桿を操作

し或は制動したる儘變速す。

第三十六 傾斜地登行中に於ける減速は現在の齒車速度にて尙若干の惰力を存する間に之を行ひ増速は新速度を於て相當距離を繼續行進し得る場合に行ふも地質及傾斜の状態に依り變速することなく行進を續行するを可とすることあり。

第三十七 傾斜地を横行するには特に傾斜緩にして、凹凸少き部を選定し稍々登斜面方向に行進するを可とす。方向變換に方りては物道の離脱に注意すると共に其の傾斜に應じ勉めて速度を低下し且回轉半徑を大にす。

第三十八 傾斜地降下又は横行中の方向變換に方り傾斜急なるか、又は速度大なるときは動もすれば操向操作に對し反對に方向を變ず(反對操向と謂ふ)

ることあるを以て惰力の状態に注意し、迅速且短切に操向槓桿を操作し、操向聯動機斷動後直ちに制動作用行はるる如くす。而して傾斜甚だしく急ならざる場合に於ては通常操向に適する如く速度を低下したる後噴射量を増加しつつ操向す

第三十九 傾斜地に於ける登行に方りては推進抵抗増加の爲力不足して往々運轉停止し、或は逆行し、降下に方りては傾斜及距離の増大に伴ひ惰力増加し危険を惹起し易きに注意す。

### 二、凹凸地

第四十 凹凸地の操縦は各種地形の操縦中重要なを以て綿密に教育し地形に應ずる的確なる操縦に習熟せしむ。之が爲先づ低速度を以て地形に應ずる噴

射速度の増減、惰力を利用する變速及凹凸を利用する方向變換に要領を修得せしめたる後漸次其の程度を向上し輕快機敏なる操縦に熟せしめ爾後連續せる凹凸地に於ける進路の選定、噴射速度の規正及制動操作に依り動搖を防止しつつ行ふ迅速なる通過等に及す

第四十一 凹凸地に於ては勉めて凹凸少き部を選び特に兩側軌道を同高位置に在らしむる如く行進し、要すれば適宜速度を低下し聯動機板、制動機板及操向槓桿の使用を適切にし、縦ひ小なる凹凸と雖も噴射量を規正する等動搖を防ぎ其の操縦を圓滑ならしむ又方向變換に方りては特に軌道の離脱を避くる爲平坦地若くは凸稜を選びて行ふを可とす

敵地を通過する場合に於ける進路は敵に平行ならしむる如く選定し止むを得ざる場合に於ても勉めて敵に直交する如くし之に直交せしめざるを可とす凍結地に於て特に然り

### 三、壕

第四十二 壕の通過は各種地形の操縦中特に重要なを以て綿密に教育し操縦手をして確固たる自信を得るに至らしむ

第四十三 壕通過の教育は先づ第一速度を用ひ凸稜通過時に於ける戰車の重心轉移に伴ふ傾斜の變化を十分に會得せしめたる後前崖降下次で後崖登行の要領に就き的確に教育し、爾後此等の動作を綜合し平坦地に於ける單一壕の通過を次で連續せる壕地帯及



傾斜地の壕の通過を教育す

後崖登行に於ける戦車の前端降下開始時機の會得及噴射量遞減の要領竝に壕に直角に進入する要領は特に演練を反復するを要す

壕通過の教育に方りては操縦手をして各種の壕に就き戦車の通過能力を體得せしめ以て一瞬の視察に依り其の通過能力を判定し得るに至らしむ

第四十四 壕は成るべく幅員狭小にして地質堅硬なる部を選び直角に通過す

第四十五 壕の通過法は其の幅員、深さ、兩岸の傾斜、地質等に依り異なるも壕幅廣き場合に於ける要領概ね左の如し

- 一、先づ壕に正對し其の直前に於て第一速度にす
- 二、壕内に入らんとする稍々前噴射量を減少し降

下を始むるや要すれば操向槓桿を引くか又は軽く制動しつつ進入す

三、前端接地せんとするや要すれば制動を解き次で噴射量を増加し所要に應じ操向槓桿を操作し

後崖を登行す

四、前端降下を始むるや噴射量を遞減し要すれば操向槓桿を操作す

五、壕外に出づるや増速す

後退に依る壕の通過は前項に準ずるも其の操作を慎重にし特に方向維持に注意す

第四十六 幅員大にして各種材料を以て埋填し或は架橋しある壕を通過するには軌道を陥没せしめざる如く中央部を通過す。時として惰力を利用し一舉に通過し得ることあり

第四十七 壕の通過に方り注意すべき事項概ね左の如し

- 一、運轉を停止し或は激突又は後退せしめざる如くす
- 二、壕底に著地する前後に於ては動もすれば運轉を停止することあるを於て操作は機に遅れざる如くす

第四十八 彈痕地帯に於ては勉めて漏斗孔を避け成るべく堅硬なる部を選びて行進す漏斗孔を通過するの止むを得ざる場合に於ては其の中央部を選び壕通過の要領に依り一舉に通過す

第四十九 地隙の通過は壕に準ず

四、道路、橋梁

第五十 道路行進の教育に方りては先づ平坦地に於て道路を標示し、車幅等の會得、直行進、屈曲部の通過、行進等必要な事項を教育し、次で急停止を迅速確實に實施し得るに至らしめたる後、平易にして交通頻繁ならざる道路より始め逐次其の程度を向上す。

第五十一 道路行進に方りては他に妨なき限り兩側軌道の位置良好なる部を行進す。但し道路不良なる時は路外を行進するを可とすることあり

第五十二 通行者に對しては其の行動を判斷して行進方向を決定し、通行者をして逡巡せしめざる可と緊要なり而して道路を横斷する者に對しては其の

後方を通過するを可とす。

**第五十三** 交叉點、屈曲部、雜沓地、通視困難なる場合等の通過に方りては注意を倍従し、適時速を低下し且停止準備を整へつつ行進す。

**第五十四** 鐵道線路を横斷するには通常之に直角に進入し、激突せしめざる如く速度を低下し、勉めて線路上の方向變換を避け要すれば制動機、操向槓桿及聯動機を操作し、徐ろに通過す。此の際爲し得れば枕木等を軌條上面に達する迄積重ねるを可とす。

**第五十五** 鋪裝道路に於ては滑走し、或は横滑するの虞多きを以て過大なる速度又は急激なる操向を避くること必要なり。特に高速行進間は其の操向操作に應ずる作用鋭敏にして動もすれば方向變換量過大となり或は其の危険を防止せんとして反對方向に急

激なる操向を行ひ、却つて危害を惹起することあり

**第五十六** 狭小屈曲路は適宜速度を低下し、其の堅硬度を考慮し道路の内側に接近して行進し屈曲大なるものに在りては軌道を屈曲部に切する如く一舉に方向變換を行ふ。此の際操向に注意し家屋、電柱等に車體特に其の後部を激突せしめざるを要す

旋回に依り通過し得る直角屈曲路の最小幅員は地質に依り異なるも尋常土に於ては戰車の幅員の二倍強にして路幅約五米なり

**第五十七** 山腹道に於ては特に山側に近く行進し其の地質堅硬ならざる時は特に速度を低下し慎重に通過す

**第五十八** 橋梁通過に方りては橋梁の種類及強度並に幅員、通過部隊の状況を考慮して其の通過法を定

め、危険を惹起せざると共に戰車通過の爲橋梁を破損せざること緊要なり。之が爲所要に應じ齒車速度を低下し噴射速度を一定に保ち、或は進入、進出時に於ける操縦を慎重にし或は通過線を適切にし或は速度及方向變換を避くる等の手段を講ず。

脆弱なる橋梁を通過する場合に於ては前項に準ずるの外所要の補強作業、進路の標識等を爲し操縦手以外の方は下車し通常誘導者を附し要すれば銃砲彈藥等を卸下して爲し得る限り重量を軽減し、天蓋を開き最低速度にて停止準備を整へつつ慎重に通過す。

### 五、積雪地

**第五十九** 積雪地の行進に於ては積雪量大なるに従ひ戰車の前端に於ける抵抗増大し、軌道空轉若くは

滑走し行進を困難ならしむ、其の程度は地形、積雪の状態等に依り異なるも通過し得る積雪量は最低地上高の約二倍を以て限度とす

**第六十** 積雪地に於ては進路の選定を適切にし、要すれば於齒車速度を用ひ適宜噴射量を増加し、推進力に餘裕を存して行進し方向變換に方りては徐ろに且少量づつ行ふ。

**第六十一** 積雪地の行進中軌道空轉するときは直ちに停止し、一日後退し要すれば進路を變更して通過す。徒らに軌道を空轉せしむるときは漸次陥没し終には行過不能に陥ることあり又方向變換に方り一側軌道空轉するときは短距離直過したる後操向す

**第六十二** 積雪地の行進に於ては積雪の爲地形を誤り易きを以て要すれば誘導に依り又は一時停止して

地形を確め爲し得れば他の車輛の轍痕を利用して行進す此の際吹溜に注意す。

第六三 積雪地の行進に方りては軌道の張度を弛め且屢々軌道部の雪を除去し以て部道の切斷及離脱を豫防す。

### 六、森 林

第六十四 森林通過に方りては樹木疎散又は矮小なる部を選び低齒車速度を用ひ適宜噴射量を増加し、推進力に餘裕を存し、要すれば樹木を壓倒しつつ行進す。此の際方向を誤り或は隣接せる數樹を重疊壓倒せざる必要なり又森林中に於ける方向變換は動もすれば軌道の離脱、切斷等を生じ易きに注意す

### 障碍物(鐵條網、鹿砦)

第六十五 鐵條網の踏破は其の種類、地形、地質等により異なるも通常第一速度を用ひ、車體の概ね中央部を以て逐次杭を壓倒しつつ通過す。軌道を以て杭を壓倒するときは動もすれば軌道之に乗上げ空轉又は離脱することあり。

第六十六 鐵條網内に於ける方向變換は鐵線軌道部に纏絡し行動困難となるか、又は軌道を離脱し若くは切斷することあるを以て戰車の状態を考慮し、其の操向位置を適切ならしむると共に大角度の方向變換を避く。

第六十七 鐵條網を通過する方り杭頭に依り底板を扛上せられ。行進不能に陥るの虞あるときは速かに後退し通路を變更す

登傾斜地に於ける鐵條網の踏破に方りては鐵條網の

強度、傾斜及附着力の大小等を考慮し、踏破最も容易なる位置を選定し且推進力に餘裕あらしむ。

第六十八 鋼線鐵條網は戰車の通過に方り鋼線軌道部に纏絡し、索状となりて行動を制限し、或は各軸部に楔入して軸承を燒損せしめ行動を不能ならしむるを以て通過するの止むを得ざる場合に於ては低速度を用ひ方向變換を行はざるを要す

第六十九 發條性を有する折疊鐵條網は通過後再び扛起することあるを以て徒歩兵の爲通路を開設せんとするときは急速に大角度の方向變換を行ひ之を蹂躪するを可とするも、鐵線を軌道に纏絡し制動作用を呈することあるに注意す

第七十 電流鐵條網は戰車及乗員に對し電撃の効力を及すことなし。電流鐵條網を踏破するには鐵條網

に準ずるも導電新附近又は其の取附部を破壊し得ば有利なり。

第七十一 對歩戰兼用鐵條網に對しては低齒車速度を用ひ一側軌道を以て對戰車用杭頭上を通過す。此の際軌道を指向すべき杭は成るべく高き部を、兩側軌道間に位置すべき杭は低き部を選定し且軌道を杭頭より脱せざること緊要なり

第七十二 鹿砦の踏破は鐵條網に準ずるも樹幹鹿砦に在りては底板を扛上せられざること必要なり

### 七、戰況に應ずる操縱

第七十三 戰況に應ずる操縱は戰車の戰闘威力發揮の素因にして應用御縱教育中最も重要なり。故に凹凸地の操縱の要領を會得するに至れば成るべく速か

に之を開始し先づ基礎的に教育し次で教練特に射撃の進度に連繋して逐次其の程度を向上し戦況に應じ遺憾なく戦車の威力を發揮し得しむる如く訓練を精到を期すべし

**第七十四** 運動は操縦手の的確なる判断と之に伴ふ輕快機敏なる操作とに依り始めて圓滑を期し得るものなり。而して迅速に敵情、地形を判断し戦況に應ずる操縦を的確ならしむる爲現地教育を實施し、以て操縦教育の補助たらしむ

**第七十五** 戦況に應ずる操縦の教育に於て特に演練すべき事項概ね左の如し

- 一、行進方向の維持及進路の選定
- 二、一瞬の視察に依る神速機敏なる操縦
- 三、射撃に連繋する操縦

- 四、對肉薄攻撃に於ける操縦
- 五、裝面して行ふ操縦等

一、戦況下に於ける  
應用動作

**第七十六** 財動開始動する場合に於ては通常變速槓桿を中立とすることなく斷動して行ふ。此の際登傾斜地に於ては視察、射撃等を考慮し、迅速に後退したる後始動することあり。

**第七十七** 戦況下に於ける發進は地形、地質の許す限り高齒車速度にて行ふ。之が爲通常操向槓桿に依り減速して發進するも時として主聯動機の過熱を避くる爲制動槓桿を引きたる後聯動し制向槓桿に依り發進す。又停止の位置は狀況の許す限り爾後の發進に方り高齒車速度の使用容易なる如く選定す。

**第七十八** 變速及方向變換に在りては速度を低下せしめざる爲地形を利用し勉めて戦車の惰力を活用す

**第七十九** 凹凸地に於ては戦況特に射撃に即應し操縦を圓滑、機敏ならしむ狀況に依り、戦車の動搖を顧慮することなく高速度を以て通過するを要することあり。

**第八十** 幅廣き壕又は地障等の通過に方りては通過の直前に於て減速することなく衝擊緩和の手段を講じつつ進入し次で戦車停止するに先だち速かに所要の速度に減速し後崖を通過す。

**第八十一** 戦況下に於ける鐵條網等の踏破に方りては屢々高速度を以て一舉に通過することあり、此の際一瞬の判断を以て破壊口を大ならしむる如く進路を選定し、且通過中に於ける急激なる方向變換を避

くるに勉む。

二、煙幕及瓦斯内に於ける  
操縦

**第八十二** 煙幕及瓦斯内に於ては操縦を慎重ならしむると共に停止準備を整へあること必要なり。

**第八十三** 煙幕内の行進に方りては地形地物及行進方向を誤り或は危険を惹起し易きを以て煙幕濃厚ならざる時機及部分を利用し、速かに友軍の狀態を確認し、地形及行進方向を正確機敏に判断し、以て進路の選定及速度の選擇を適切ならしむること緊要なり。而して煙幕の縦深小なるか、稀薄なるか、地形平坦なるときは迅速なる速度を以て一舉に通過することを可とす。

**第八十四** 瓦斯攻撃を受くるか若くは瓦斯の存在を

豫想又は覺知したるときは視察を中絶することなく、狀況之を許ば速度を低下して迅速に變面し又は瓦斯濃度小なる方向に進路を變更す。  
持久瓦斯地帯等に對しては速度を低下し通過するを可とすることあり。

**第八十五** 裝面して行ふ操縦は呼吸及視察の困難に依り地形地物を誤り易きに注意す  
裝面して行ふ操縦は屢連續長時間實施するを要す

三、蛇行及對肉薄政撃に於ける操縦

**第八十六** 蛇行は爲し得る限り高速度にて行ひ遮蔽せる位置又は平坦にして抵抗少き箇所にて成るべく迅速且不規に方向を變換す。然れども其の操作急激に失し故障を惹起せしめざるに注意す

敵對戰車火器に對しては勉めて直進を避く此の際方向變換量は狀況に依るも概ね四十度を基準とす。  
**第八十七** 肉薄政撃に對しては機先を制し、迅速に之を避くるを可とするも不意に敵を躰闘し、或は之を射撃する爲速かに停止するを可とすることあり。  
此の際成るべく急激なる操作を避く

四、射撃に連繫する操縦

**第八十八** 操縦の適否は射撃指揮、命中効力、發射速度等に及す影響極めて大なり。故に使用火器、射撃の種類、目標の狀態等に應じ地形の利用、進路の選定、渡度の選擇等を適切にし、且操作を圓滑にし以て射撃と密接に連繫すること緊要なり。

**第八十九** 射撃に連繫する操縦の教育は戰況に應ず

る操縦の教育中最も重要なり故に射撃教育と密接に連繫せしめ技能を練磨向上せしむること特に緊要なり。

**第九十** 射撃に連繫する操縦の教育に於ては射撃の狀態と戰車の動搖との調和を圖ること緊要なり之が爲に演練すべき事項概ね左の如し

- 一、射撃を考慮する進路の選定及速度の選擇
- 二、照準線の保持及發射時機の捕捉を容易ならしむる操縦

三、發射前後に於ける輕快機敏なる操作

**第九十一** 射撃を考慮し進路を選定するに方りては狀況特に射撃の狀態、地形、對戰車火器の位置等を判斷し兩側軌道の位置成るべく水平にして火器の俯仰角少く且勉めて敵火に遮蔽しあるを要す

速度を選擇するに方りては射撃の狀態に適應し動搖減少と速度伸暢との調和を圖る

**第九十二** 照準線の保持及發射時機の捕捉を容易ならしむるには勉めて目標に直進し、方向變換の回数及其の量を減じ、且方向を變換する場合に於ても射撃に影響を及さざる時機に實施すると共に射撃の狀態、地形を考慮し勉めて戰車の動搖を減少する如く速度を選擇す。

**第九十三** 發射の前後に於ける操縦に方りては射撃技能、地形、射撃の種類等に應じ、輕快機敏なる操作に依り勉めて照準を害せざる如く速度を低下し、又は停止し、以て速かに増速又は發進を準備すると共に發射するや機を失せず高速度の行進に移る

**第九十四** 停止射を行ふ場合に於ては車長の號令に

依り速かに停止し、停止せば直ちに發進を準備し前進の號令に依り速かに高速度に移る。

停止すれば先づ手動制動槓桿に依り速度を速かに低下したる後斷動す。此の際戰車に急激なる動搖を與へざると共に運轉を停止せしめざることを緊要なり

第九十五 躍進射を行ふ場合に於ては車長の號令に依り射撃の捕捉を容易ならしむる如く進路を選定し次で射手の合圖を受くるや照準を害せざる如く爾後の發進容易なる位置に速かに停止し、停止せば適宜噴射量を増加して發進を起し速かに高速度に移る停止の操作は先づ斷動し、要すれば徐ろに制動す此の際運轉を停止せしめざることを緊要なり。

第九十六 行進射を行ふ場合に於ては車長の號令に依り、躍進射に準じ動作し次で射手の合圖を受くる

や通常速度を低下し且一定に保ち發射せば速かに高速度に移る

速度を低下するには其の變化を成るべく圓滑、迅速ならしむる爲主として噴射速度に依り時として操向槓桿に依る。

第九十七 稜線を利用して射撃を行ふ場合に於ては通常頂界線に接近するに従ひ逐次其の速度を低下し、且射手と密に連絡す。

戰車停止せば車長の指示に依り、爾後の行動を準備す。此の際戰車を後退せしめざるを要す

### 四、無限軌道

戰車の特徴の一つは、前にも述べたやうに無限軌道(キヤタピラ)にあるが、この無限軌道は次の四つから成り立つてゐるのである。

- 一、履帶(これは普通の車の車輪の代りをするもので、左右に一對を要する)
- 二、起動輪(各履帶に一個づつ要す)
- 三、誘導輪(これも各履帶に一個づつ要す)
- 四、轉輪(多數を要す)

起動輪は多く戰車の後方についてゐる齒車であつて、機關の力で廻はされるのである。この齒車は履帶の關節になつてゐるピンと噛み合つて履帶を動かすものである。また誘導輪は、平らな車で、履帶がはづれないやうに兩側に縁起をもつてゐるのが普通である



車戦式用併道軌限無輪車ヤキパロスコツエチ

る。  
 轉輪には、下部轉輪と上部轉輪とがある。下部轉輪は列をなして車體に取附けたものもあるが、數個づゝの轉輪をとりつけた框が二つ以上あつて、その框が履帯の内面に乗り、一方車體を支へてゐる式のものもある。  
 上部轉輪は、たゞ履帯を摩擦なく送るための支への役をしてゐるので、支輪ともよばれてゐる。  
 履帯には、金屬製とゴム製とがあるが、軍艦にとつては推進機が最も大切な部分であるやうに、履帯は戦車にとつて最も重要な部分である。

る履帯が故障を起せば、戦車は全然活動出来なくなつてしまふのである。かつてフランス軍がモロツコ遠征をした時、數十台の戦車をもつて行つて活躍させようとしたが、ドルース土人はゲリラ戦をもつて各々岩上や洞穴中に待ち伏せして戦車を奇襲し、いきなり戦車の背中によぢのぼつて用意の棒を戦車の履帯の間に突きこみ、活動不可能にしてしまつたことがある。この奇襲には流石のフランス戦車も惨々の敗北をしたと傳へられてゐるのである。これに對抗するために、フランス軍では戦車に鐵條網を張つてのぼれなくしたといふことである。

そこで、この重要な履帯を、完全に敵弾から防禦することは極めて大切なことであるが、中型以下では重要な制限があつて、なか／＼これが行はれてゐないのである。しかし、上部だけ蓋板で防禦してあるものもある。履帯は、その履帯の下面にある突起で地面と噛み合つて、地上を滑らないやうに水平方向の抵抗が必要である。これは履帯の構造にもよるけれども、大體のところ草原又は軟くない地面では、喰込みの垂直面平方吋につき四十五听ぐらゐである。

履板の突起が地面から抜ければ、この抵抗は急に減り、又軟かい地面ではずつと小さい。

騎兵の行ける地面は、大抵平方呎につき三十听ぐらゐの抵抗を有し、歩兵は八听ぐらゐの抵抗ある所まで歩行が出来るのである。

戦車は、勿論歩兵の行けるところまでは行かなければならぬので、實際のところ、歩兵の行けるところより軟い所まで行けるやうに設計してあるのである。小型戦車は、大體六听の抵抗ある所まで行けるやうになつてゐる。

ところが、雪の上を動かす時は、もつとく小さくせねばならない。といふのは、スキーでは〇・七五听、雪靴では一・五听にしてあるので、戦車もそのくらゐにせねば雪の上を走らせることは出来ないのである。つまり雪の中や極めて軟かい地面を走る時は、履帯面積を廣くするより外に方法は無い。廣くすれば全體の支力が増し、直線進行には安全がよくなるが、あまりに廣くすると方向轉換がむづかしくなつてしまふのである。そこで蛇狀履帯といふのが使用されるのである。

すべて履帯は、軟地を走るのに都合よく出来てゐるが、街路のやうな硬地を走ると破損し易く且つ不便なので、履帯と車輪とを兼備して、路上は車輪のみで走り、軟地に入れば履帯を用ひるといふ戦車も工夫されてゐる。

### 五、戦車の装甲

内部の各種裝備の如何によつて、戦車の外形は様々に異つて来るが、なるべく稜角を少くして、外面は何所も丸みをもつて、敵彈を受けた場合に、なるべく損傷の少いやうに工夫して造られてゐる。それからまた、出来るだけその大きさを減らして、敵彈命中の機會を少くすることも必要で、特に戦車の高さをなるべく低くする方が有利なのである。

戦車の装甲板は、強いほど良いのであるが、重さがふえるのでさうばかりは行かないのである。そこで、敵彈を最も受け易いやうな場所、つまり前方の正面を比較的厚くして置いて、上



部と下部は割合に薄い装甲がなされてゐるのである。

現在の弾丸の威力から見て、小銃弾に對して安全なためには、装甲板を六耗から七耗にする必要があるし、歩兵平射砲に對しては十五耗以上の厚さにする必要がある。

そこで、現在のところ各國の戦車は、大體輕戦車の場合に於いて、重要部分を厚さ十五六耗ぐらゐの鋼板で装置し、底板には五、六耗以上を用ひて防禦してゐるやうである。

なほ中戦車以上になると、五十七耗乃至七十五耗砲に對して安全なやうに二十乃至三十五耗の鋼板装を行つてゐるやうだ。

最近、各國の對戦車砲が極めて進歩して、今度の歐洲大戰などには、相當強い装甲板もドシ／＼射抜いて戦車隊恐怖の的となるやうなものまで現れてゐるやうであるが、今後は装甲に就いても充分に研究が積まれて、特殊金屬による装甲、つまり厚さをさほど必要とせず、しかも完全に敵弾から防禦出来るやうなものが工夫されやう。

## 六、戦車の武器

戦車に積まれる武器は、室内が狭いので、あまり室内に長く出ばらないものでなければならぬ。しかも狭い室内にゐる射手によつて、自由自在に操作出来るやうな輕快なものでなければならぬしその上に威力の大きい、つまり出来るだけ口径の大きなしかも遠方まで飛ぶものが欲しいのである。

しかし、これらの目的を完全に備へたものは、到底不可能に近いことで、そのために、事實上戦闘に必要な、つまり戦車は遠隔戦に用ひられるのでなく必ず敵地に接近して砲火を交ふるものであるからして、銃砲は必ずしも遠くまで飛ぶものでなくとも間にあふのである。

そこで、一般に機關銃は必ず装備し、それを出来るだけ射界を廣くするやうに工夫されてゐるのである。それに、機關銃の銃眼近くに命中した敵弾の微細な破片や粉末が、戦車内部に入

つて射手を害することを避けるために、特殊の装置をして防禦してゐるものもあるのである。鐵砲の大きさは、一般に口径十糎半までの火砲又は機關銃、或ひはその兩者から成り、輕戰車までは機關銃一門と火砲一門若くは兩方のうち一つだけを持ち、中戰車は一乃至二門の火砲と數門の機關銃を有し、重戰車では機關銃の數も多く、火砲の口径も大きい。何れの種類の戰車でも彈藥は機關銃一門に對し約三千發、火砲に對しては約三百發携帶してゐるのである。砲は車體の側方に突出部を設けて、そこに裝備したものであるけれども、それでは他の側に現れた敵を攻撃することが出来ないので、最近のものは凡て、軍艦に於けると同様に砲塔に收めて、三百六十度の射界を與へるやうに造られてゐるのである。機關銃の場合も同様である。しかし、如何に上手に砲や機關銃を裝備したところで、必ず狙ひ得ない所、即ち死角があるので、その部分に現れた敵に對しては、銃眼を設けて置いて、そこから小銃や拳銃によつて射撃し、これをたほすやうになつてゐるのである。

## 七、對戰車人工障礙

戰場に於いて猛威を發揮する戰車も、さまざまな人口障礙物によつて、その活動の自由を奪ひ、通過をさまたげることが出来るのである。

では一體、どんなものが戰車の苦手になるのかといふと、先づ杭を植える方法があるこれは軌條の片とか太い樹木などを、傾斜に植え込むのであるが、極めて有力な戰車障礙物となるのである。

また大きな樹木を、戰車の腹部より少し高いくらゐに切つて、切株をそのまま放置すると進んで来た戰車がその上に乗り上げて、進退の自由を失ふことになるのである。

それから強い鐵線も有効である。これは先づ強く丈夫な基礎を造つて、それによく鐵線を結びつけ、戰車の中央以上の空中に張るのである。戰車の鐵條網ともいふべきもので、こゝまで

進んで来て、前進不能になつてしまふわけである。

最も一般的な方法には、戦車壕がある。これは戦車の全車體が没してしまふくらの深い壕を掘つて置くのである。戦車が知らずに突進して来た場合は、壕中に墜落して到底上ることは出来なくなつてしまふし、また壕を発見して停車しても、それ以上は進めないわけである。

急激なる斜面も障碍となるのである。従來の戦車は、大體四十五度の傾斜し得るといふのが常識であつたから、それより高角度にして置けば、充分障碍となり得たのであつた。ところが今次のヨーロッパ大戦で、ドイツ軍の使用した新式戦車は、七十五度の急角まで自由に上り得るといふからかゝるものに對しては、更にそれ以上の鋭角が必要である。

以上述べたものは、單に戦車の進退の自由や進路を阻むところの障碍であるが、戦車直接に損害を與へ得るものとしては、地雷がある。

同じ地雷であつても、視發地雷といつて、地雷埋没箇所附近に戦車が進んだ時、監視人が、これを爆發せしむるものは、一般に不便なので、觸發地雷といつて、戦車が埋没箇所に近づい

た時直ちに爆發する装置のものが、多く用ひられるのである。

爆發罐を地中に埋設して置くのが、地雷の本條ではあるが、砲彈を代用して、その埋没地點に差しかゝた際、爆發するやうに仕掛けてもよいのである。

また、樂器のピアノに用ひられるピアノ金屬線を、敵戦車の通過路に設置し、戦車の履帯にからみつかせて、活動の自由を失はしむる方法もある。

實戰に際し、これらの地雷によつて、戦車が大打撃を受けることは、數々の近代戰に於いてしばしば見られるところである。そこで戦車通過の場合には、豫め偵察戦車を放つて、これらの障碍の有無を充分調査せしめなければならぬのである。

## 八、特殊戦車

戦車が、重量の上から重戦車、中戦車、輕戦車の三種類に分けられることは前述した通りで

あるが、更に戦車隊内にあつて、一般戦車の戦闘を容易ならしめる補助器材として、いろいろの特種戦車が必要となつてくる。

それには、どんなものがあるかと云へば、先づ通信戦車がある。

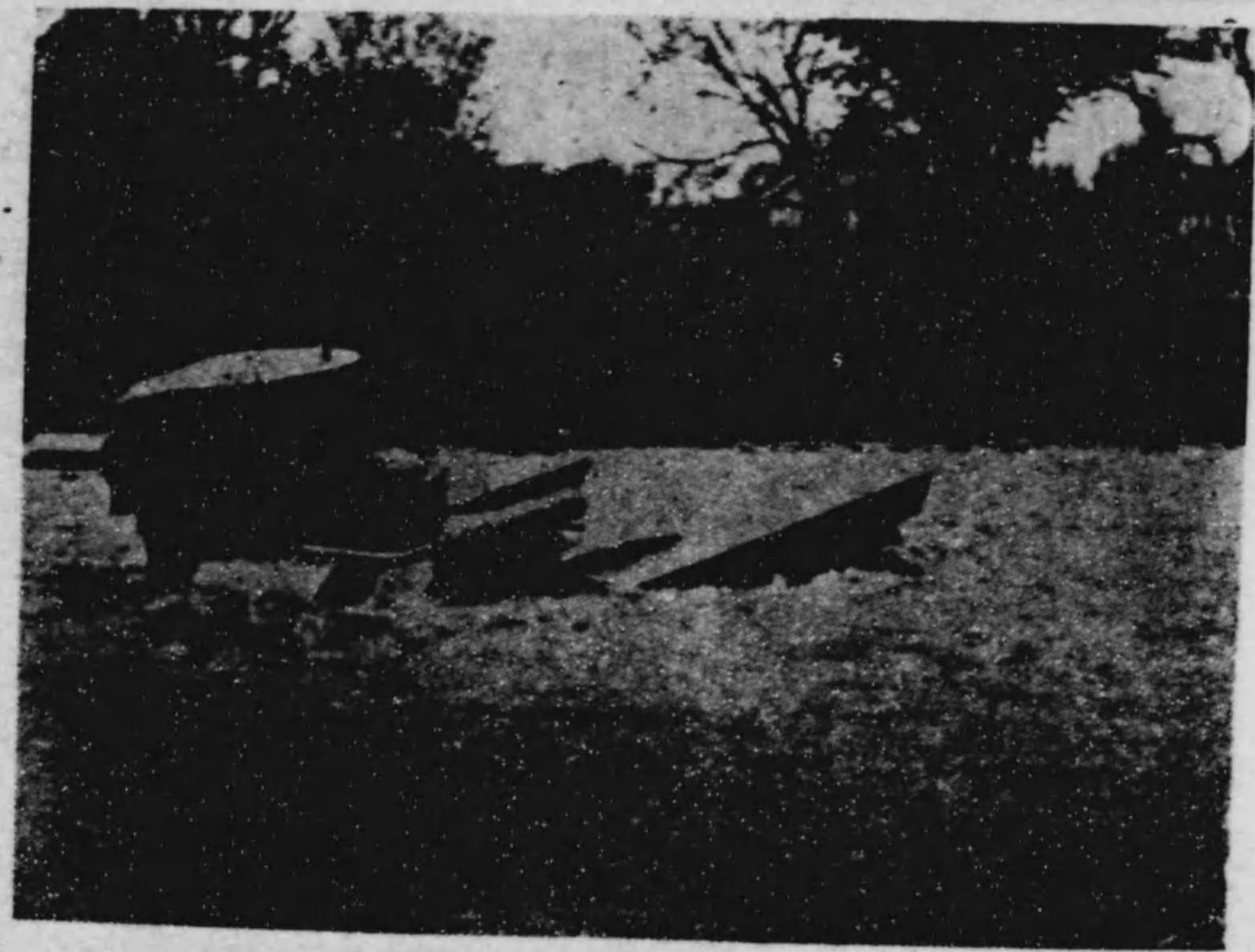
### 一、通信戦車

これは、戦車隊内の命令や情報などを傳達したり、また上級指揮官や友軍各部隊との間の連絡に任ずるもので、無線電信や、無線電話の送受信の装置を設備してゐる。

自衛上必要な程度の火器は勿論持つてゐるのである。道路以外の凹凸地その他での行動も、一般戦車と同じやうに行ふことが出来るのである。

### 二、水陸兩用戦車

これは、名の示す通りに水深の大きな水中に浮ぶことも出来れば、陸上に於いては一般戦車のやうに自由な行動が出来るものである。勿論、水中に於ける場合は、自然に速度は減つて、最大速度は一時間毎に十五軒ぐらゐである。



ソ聯水陸兩用戦車

水中に浮ぶ場合には、どうしても重量の軽いものでなければならぬので、重量を減らすために装甲を少し薄くつくられる。そのため、陸上に於いて活躍する場合には、威力はそれだけ劣るのは已むを得ない。

しかし、この水陸兩用戦車は、敵前渡河とか敵前上陸の場合、或ひは敵前架橋を行ふ場合などに、今後の戦車に於いてはますます利用されることにならう。

現在、水陸兩用戦車として名高いものには、イギリスのヴィッカーズ式とか、アメリカのクリスチー式等がある。

### 三、工兵戦車

地雷地帯を破壊したり、地雷地帯に友軍の戦車が入りこまぬやう阻絶をつくつたり、更に友軍戦車隊が、水路や断絶地などを通過が容易になるやうな工作を施したりするものである。工兵戦車は、用途によつて更に細かく分けることが出来るが、そのうちでも架橋戦車は装甲で掩護された中で起重規置を利用し、相当幅の廣い橋を押し出して架けることが出来る。

### 四、火焰發射戦車

掩護物にかくれてゐて、なか／＼攻めにくい場合には、火焰發射戦車は大いに活躍することが出来る。即ちその装甲をたよりにして出来るだけ敵に近づき、一齊に火焰を敵陣の上へ發射して焼殺してしまふのである。

最近のヨーロッパ戦争に於いて、ドイツの火焰發射戦車は、非常に優秀な成績を上げてゐる。

### 五、煙幕展張戦車

友軍戦車が攻撃しようとするのを、敵の眼から隠す時、或ひは敵から離れようとする場合、または敵を欺瞞する時などに、厚い装甲を利用して敵前に躍り出し、敵の射撃を受けながらも一面に廣く煙幕を張つてしまふ。この目的でつくられたのが、煙幕展張戦車である。煙幕ばかりでなく、ガス發射装置まで持つてゐるものもある。

### 六、輸送戦車

歩兵が戦車のあとからついて行つて、戦車が撃破したところへ歩兵が突入すると最大の戦果をあげることが出来るのである。そこで戦車の進むあとから、歩兵をのせてゆく戦車が必要となる。

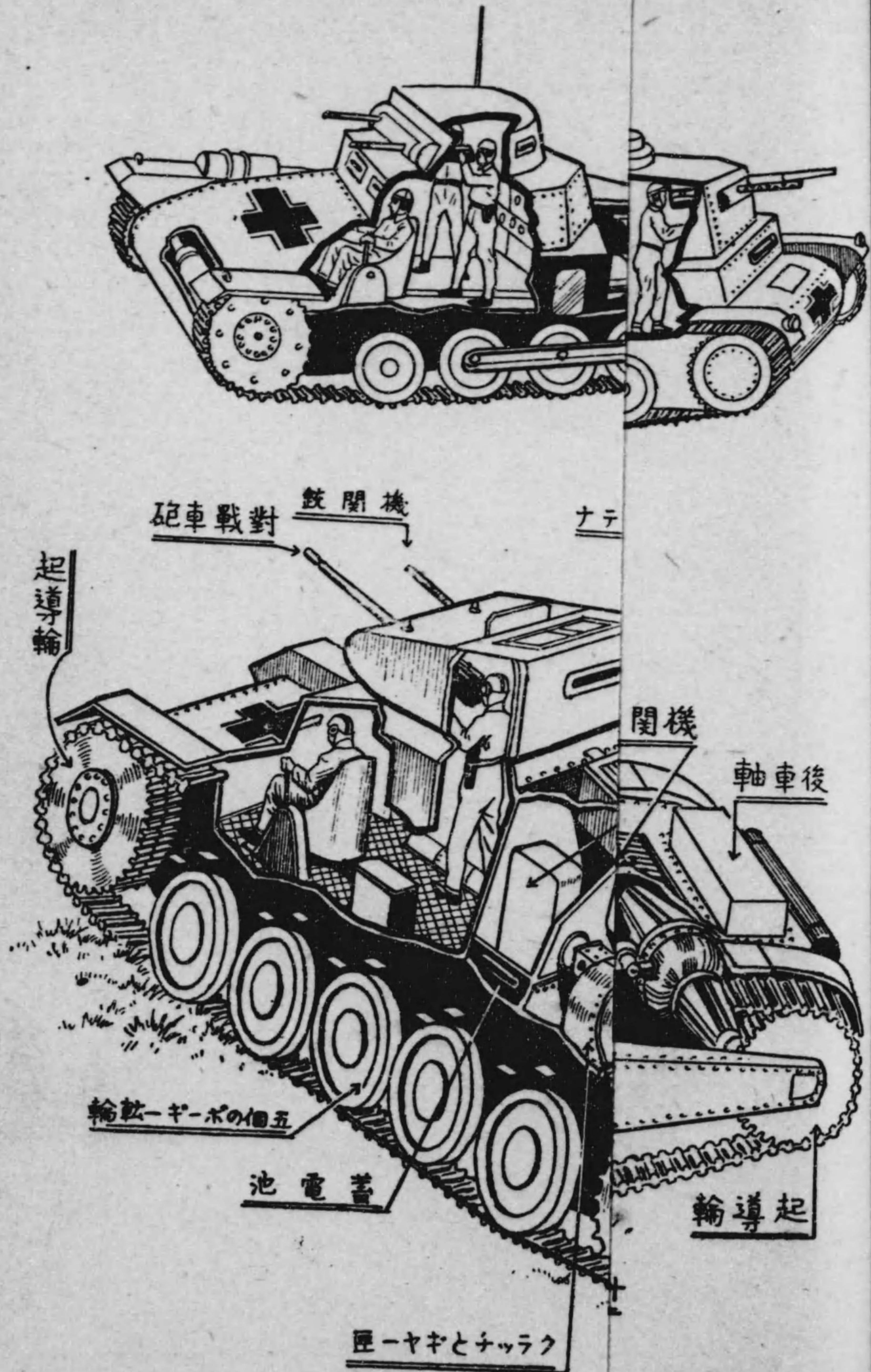
また第一線や戦車隊に、彈藥などの必要な戦闘資材を運んでやる輸送戦車の役目も極めて大切である。

更に最近に於いては、飛行機の下につけて、遠隔の地に送ることの出来る輕戦車など飛行戦車と呼ばれるものも出来てゐる。

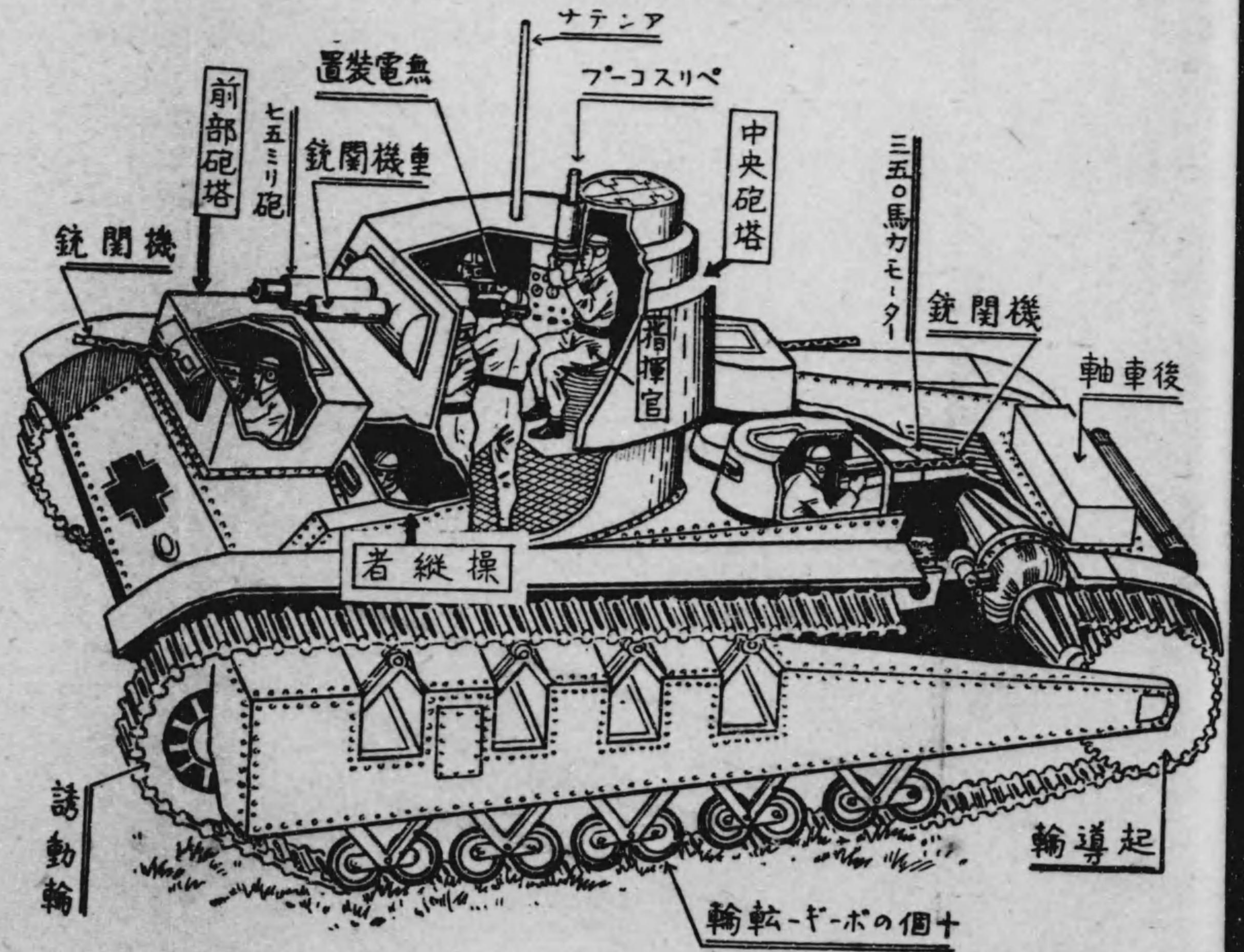
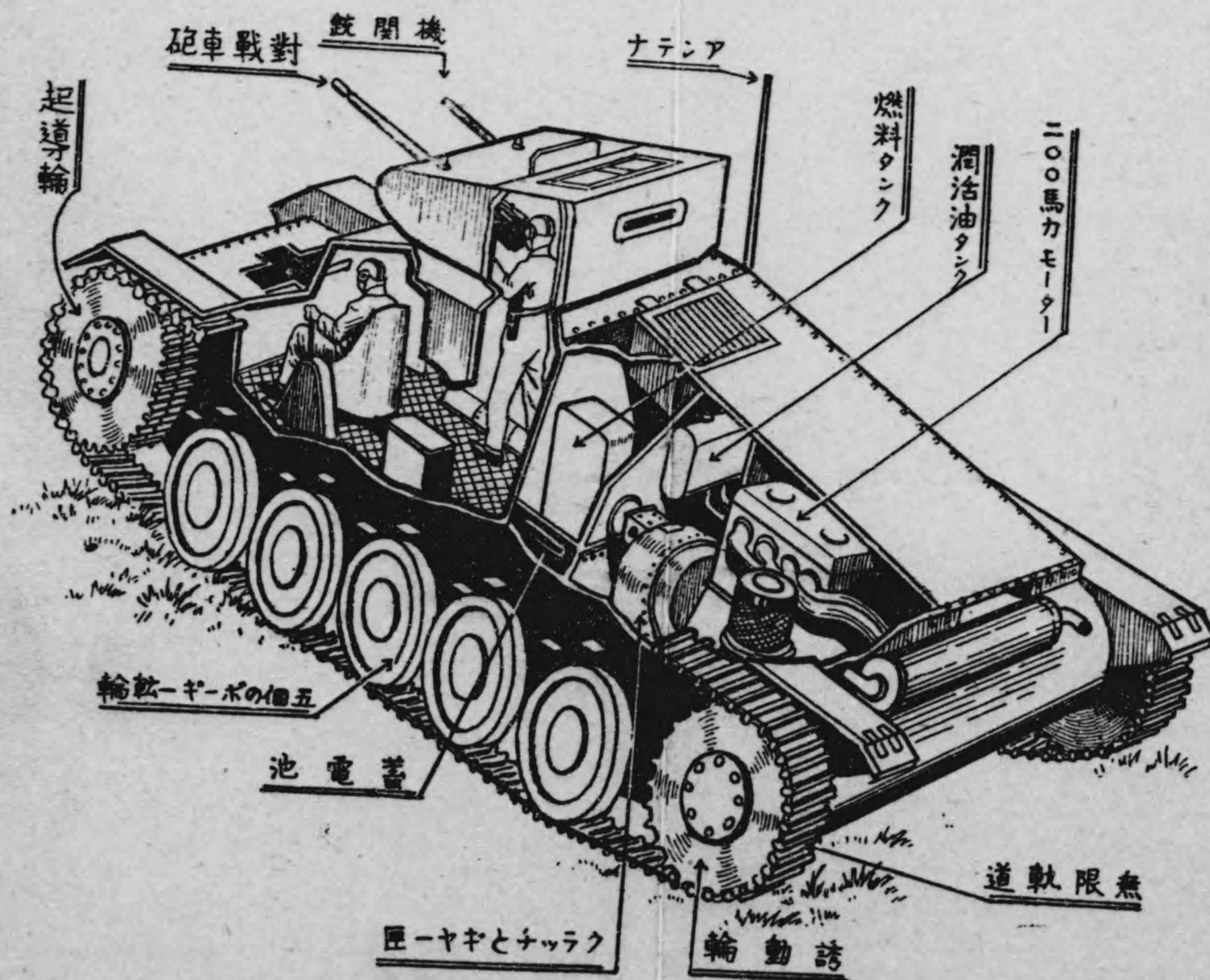
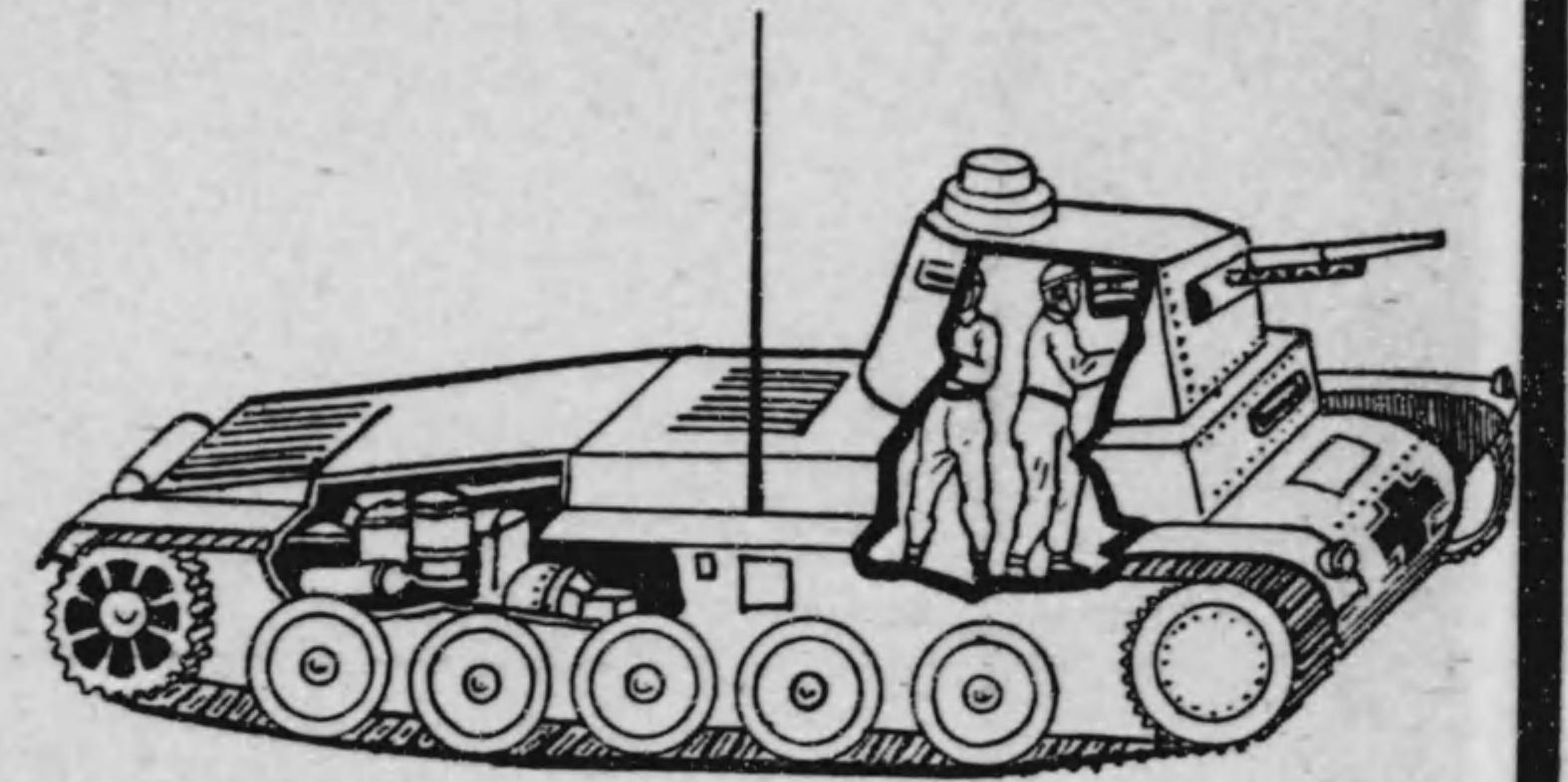
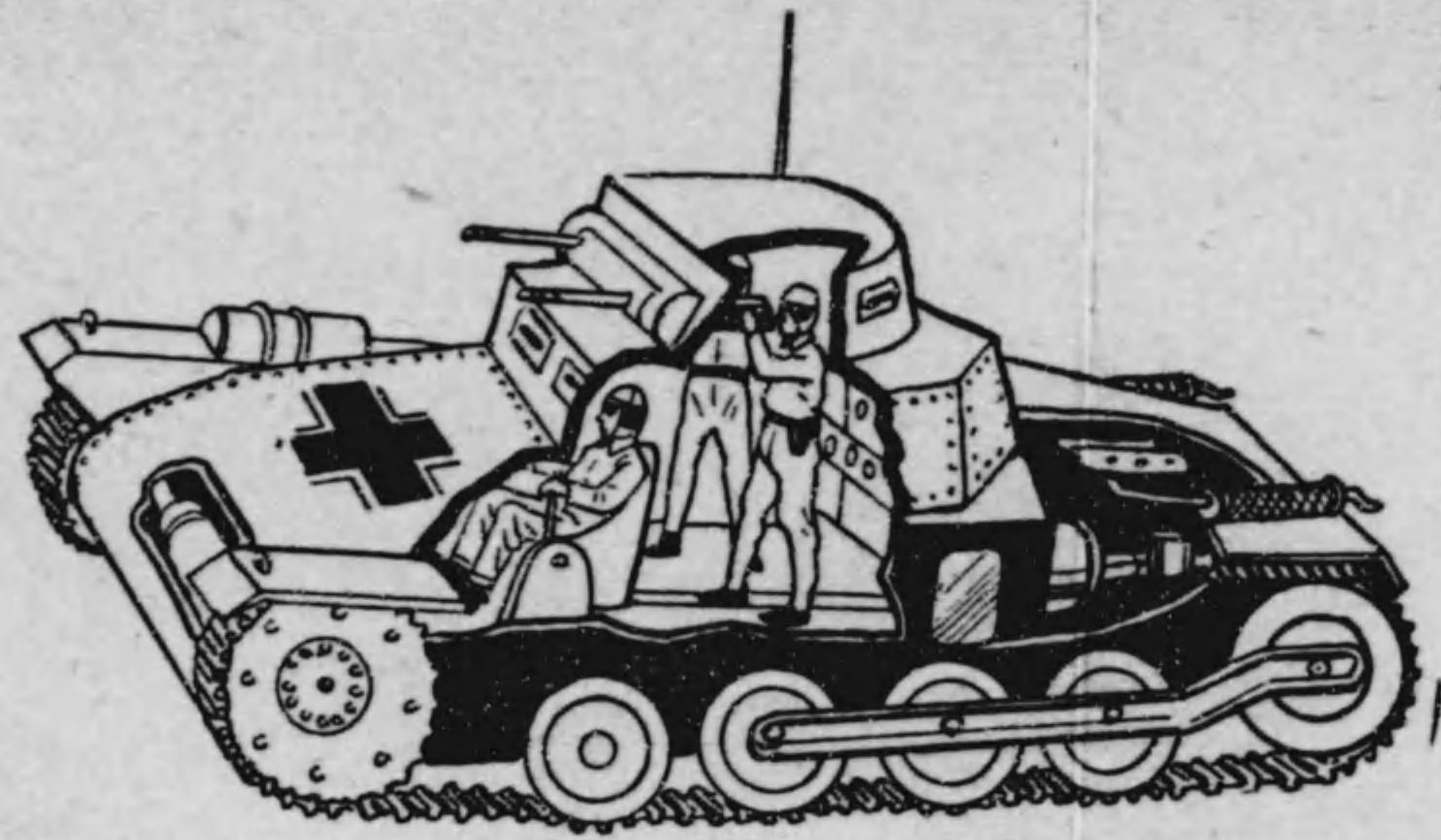
### 九、戦車の運動能力

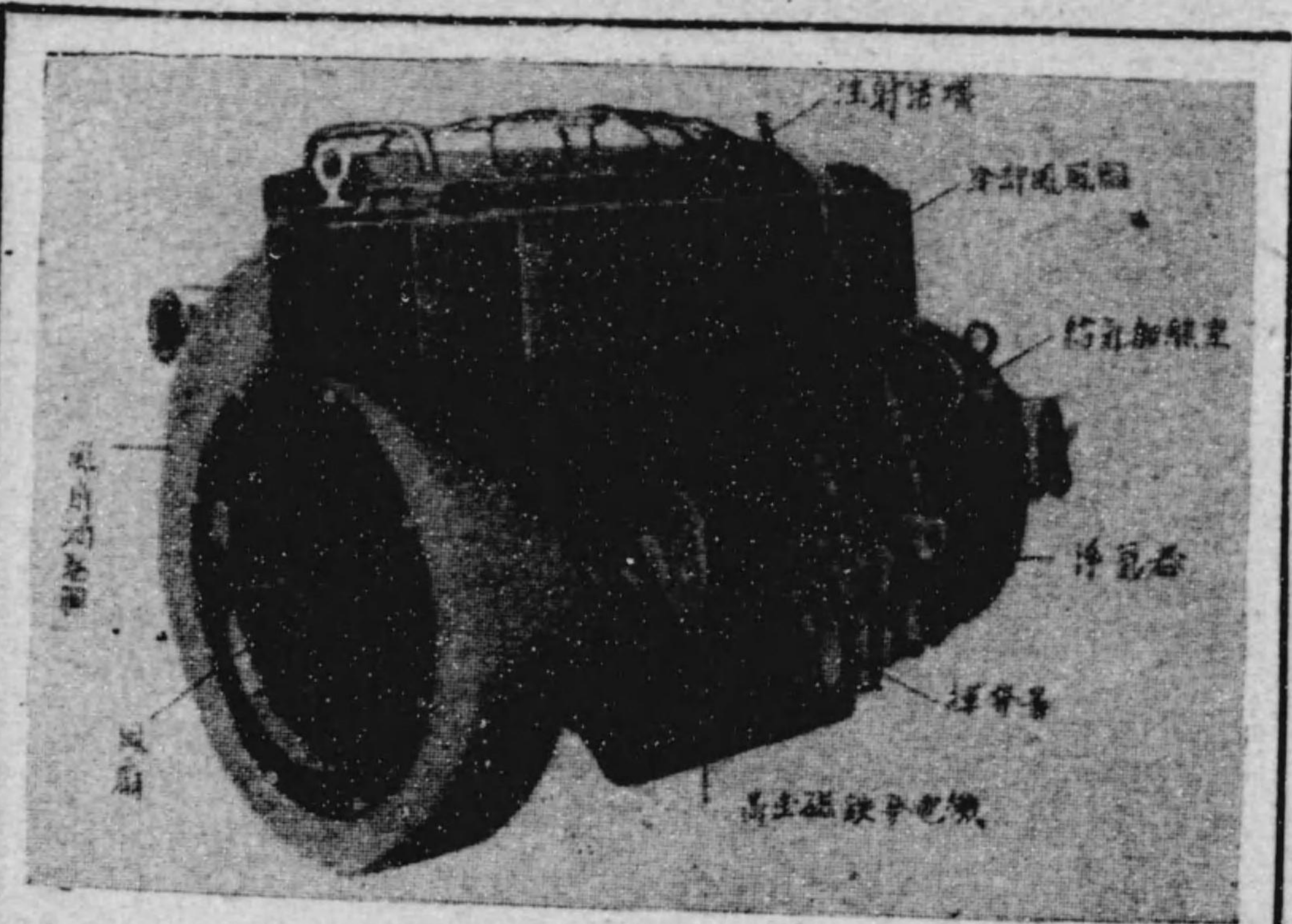
無限軌道をもつもの、つまり装甲式の戦車は、どんな地形でも征服して行動することが出来るが、これを戦車別に云つて見ると、軽戦車は直徑三十糎ぐらゐの樹木なら押し倒して進めるし、重戦車なら最大八十糎までなら倒してしまふのである。

また重戦車は、四十五度ぐらゐの傾斜地を登ることが出来るし、一・七米ぐらゐの堤防を越えられる。水巾なら深さ一・五米ぐらゐまでなら平気で徒渉してしまふし、樹木、岩石、低い壁、それから地形の小々の凹凸なら、大ていの場合、難なく征服してしまふことが出来るのである。



# 戦車内の構造





(圖側右) 機勦發車戦輕

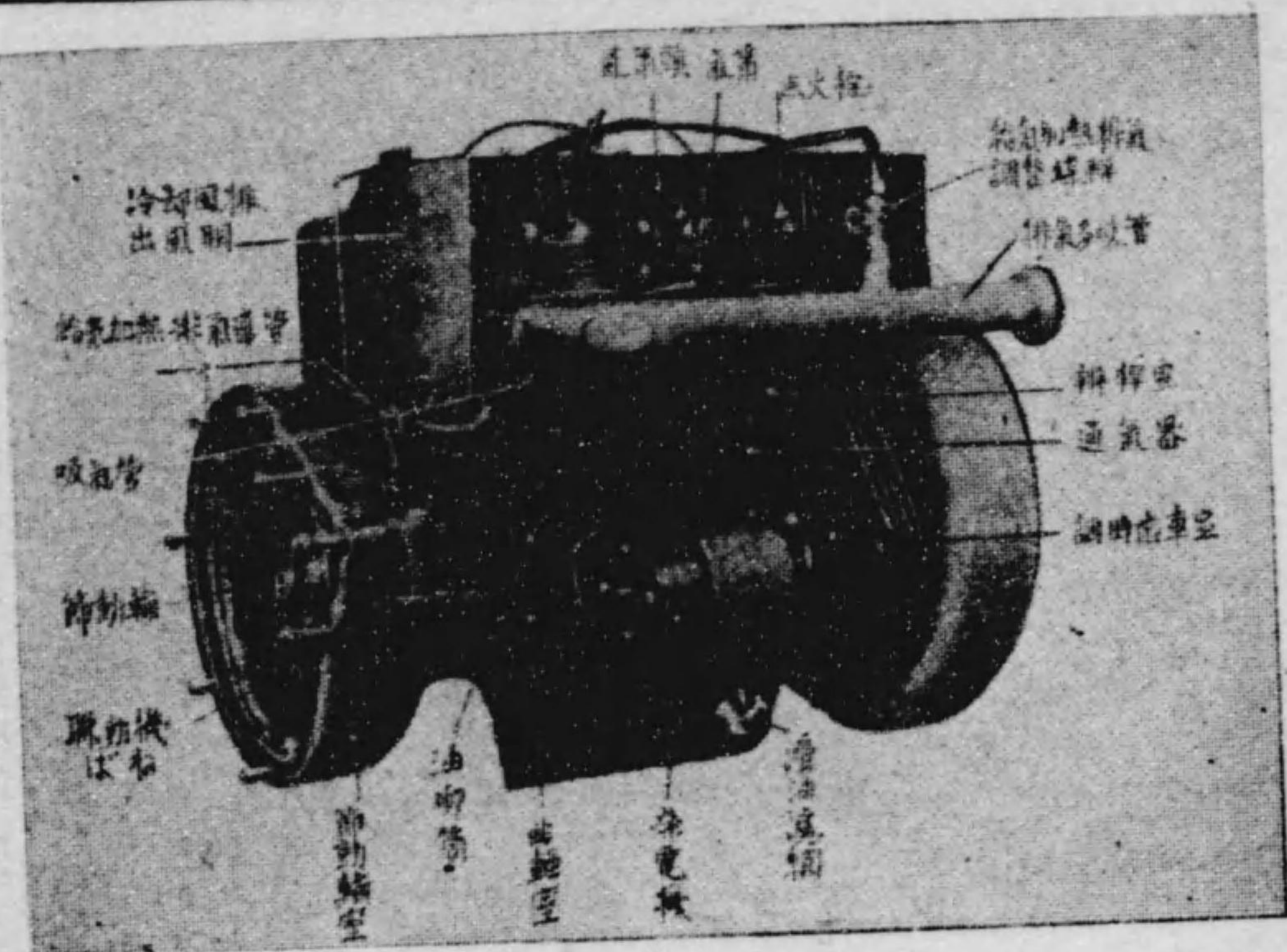
### 十、戦車の發動機

戦車の發動機は、普通の自動車用のエンジンと同じものではあるけれども、最近ではガソリン機関に代へてディーゼル機関を利用するものが、だん／＼多くなつて來てゐる。

ノモンハンの戦闘に現れたソビエトの戦車の中にはディーゼル機関をそなへた戦車も出てゐたと云はれる。

それから、イタリーのフィアット製の新型戦車の中には、重油發動機を裝備して行動能力を





(圖側左) 機 動 發

大きくし、對火安全性を増大してゐるものであ  
ると云はれる。  
また、同じ發動機のうちでも、水冷式のもの  
は、性能上不便が少くないので、空冷式發動機  
が多く用ひられるやうになつて來てゐる。

### 十一、戦車の行動範 圍と速力

戦車の行動することが出来る範圍と云つて  
も、發動機の出す力や車輛の重量、それから地  
形とか携行燃料の量によつて行動範圍は左右さ  
れることになるのは勿論である。

しかし、人體に就いて云へば、重戦車では約六十斤から百斤ぐらゐ、中戦車では百二十斤か  
ら二百二十斤ぐらゐ、軽戦車では百斤から三百斤ぐらゐと云はれてゐる。  
また速度は、前の歐洲大戰の初め頃は、前述したやうに時速十斤を越すものは非常に少かつ  
たけれども、その後戦術上の必要から次第に高速が要求されるやうになり、今日では普通二十  
斤から三十斤は、どんな戦車でも出せるやうになつて來てゐる。  
特殊なものになると、路上なら時速百にも達するのが現れてゐるのである。

### 十二、戦車の戦闘と指揮

戦車戦闘の特徴は、装甲を以て敵弾を冒して、怪速と偉大な火力とを統合して、敵の戦闘力  
を壓倒破推することにある。

そこで、戦車は單車或ひは小队などの小部隊の場合に、どうして戦ふかといふと、これは戦

闘の方式や、戦車の種類によつて違ふけれども、某國の軍隊が戦車部隊に與へてゐる任務の一例を示すと、

攻撃の場合

- (一) あらゆる敵の火器を制壓して歩兵の前進を掩護する。
- (二) 敵の後方に深く突入して豫備隊、砲兵、司令部及び後方機關を撃破する。
- (三) 敵の退路を遮断する。

防禦の場合

- (一) 逆襲を行ふ。
  - (二) 砲塔のみを出して、火力戦に参加する。
- 右の例は、どこの國の場合に於いても、當てはまるものとは言ひ得ない。即ち數萬臺の戦車を有する國家と、僅かに數百臺しか持たぬ國家とは、戦車の任務に著しい差異を生ずるのは當然であらう。

然し、第一次世界大戦の場合のやうに、専ら友軍地上部隊の進撃を拒む敵の機關銃を破壊するために用ひられたのと、今日の如く戦闘の主力が歩兵から次第に機甲部隊に移りつゝある時代とは、自ら任務に變化があるのは當然であつて、今日では一舉に敵全面の陣地壓倒へ向つてゐる實状である。

戦車乗員の戦闘任務はどうかといふと、これも戦車の種類や大小によつて違ふけれども、一例を擧げて見れば、

豆戦車……車長兼射手兼通信手

(二人乗) 操縦手

輕戦車……車長兼砲手

機關銃手兼通信手

操縦手

中戦車……車長

(五人乗) 砲手二名

機關銃手兼通信手

操縦手

重戦車：種類により多種多様

任務は右のやうであるが、單車の乗員は眞に一致團結して、恰も一人の人間が行動するやうにならねばならない。

特に戦闘中の場合は、お互ひに他の任務を援助しあひ、車長の指揮の下に協同精神を發揮しなければならぬ。騎兵の場合によく人馬一體といはれるが、戦車戦闘に於いても人車一體といふことが特に緊要である。

近代戦の特色は、偽装が極めて巧妙であつて、戦場に敵影を見ずといはれるくらゐである。

特に戦車は昔から盲目といふ綽名がある程で、車内から外を見ることは非常に困難であり、従つて戦車内から敵を發見することは極めて困難なわけである。

殊に凹凸のはげしい不齊地を驍進してゐる時はむづかしいのである。

けれども、戦車に絶えず乗つて、絶えず覗く訓練をしてゐると、外部にゐる時と同様に敵を發見することが出来るやうになる。戦車内からの視察がよく出来なければ、運動性や火砲の威力を十分に發揮することは出来ない。そこで視察訓練を完全に行ふ必要が生ずるわけである。

戦車射撃の特色は、走りながらも射撃出来るところにある。特に機關銃射撃は極めて度々行はれる。けれども、命中率は静止する場合に比して非常に悪いのは勿論で、そのため停止して射撃を行ふことが多いのである。

敵の歩兵や騎兵の密集部隊などのやうな大きい目標に對しては、機關銃で行進射撃を行ふし敵味方の大戦車群が、據るべき地形もない平原で遭遇したやうな場合には、戦車砲をもつて行進射撃を行ふのである。けれども前述のやうな命中率が悪いので、地形を得るならば、この地形を利用し砲塔のみを出して移動トーチカのやうに射撃することは、命中率ばかりでなく防禦の上からいつても極めて有利である。

地雷が戰車の有力な防害となることは前にも述べたが、その地雷に對しては戰車は如何なる方法をとるかといふと、先づ戰術上の判斷に基いて敵の配備を研究すると、大體あの附近に地雷があるらしいといふ見當がつく場合がある。

そこで、その考へに基いて前進してゐると、土地を掘つて地雷を埋めた徴候があるので、これによく注意して通過する。この場合、出来るなら迂回して地雷のない所を通ればよいのであるけれども、それが不可能の場合には、地雷のあるところに向つて射撃し、これを爆發してから前進する。また、他の友軍兵種と協力して火力で前面の敵を壓倒し、その間に歩兵や工兵が地雷を取り除くといふことも出来るわけである。

對戰車壕も、戰車の苦手であるが、これは破壊または埋填して通過する。對戰車壕の所在は、友軍飛行機による空中寫眞の撮影、その他によつて豫め察知出来るから、友軍の砲弾や爆弾で砲壊してしまへばよい。それでなくとも、現代戰に於いては敵陣地を砲弾で耕すとまでいはれるからであるから、對戰車壕も自然に破壊されることが多い。しかし思はぬところで對戰

車壕にぶつかった場合は、他に通路がなければ、戰車自ら崖をくづして通過するのである。土質が和い時には、車體を勢よく何回もぶつけることによつて崖をくづすことが出来るし、工兵が協力してゐる場合には工兵によつて通過路を開いてもらふのである。この場合は勿論、工兵も戰車に乗つてゐなければならぬ。

戰車が豊富にある時は、戰車を壕に埋めて、他の戰車はその上を通過するといふ方法もある。一般に對戰車壕の場合は單に壕だけでなく、敵の火器がつきものであるであつて、敵車が對戰車壕にぶつかつて速度がゆるやかになつた時に、用意された砲兵火や對戰車砲火によつて一齊射撃を行ひ、戰車を破壊するのであるから、對戰車壕通過の際は、豫め敵の火器陣地に對して友軍の歩兵、砲兵の射撃を行ひ、制壓する必要がある。

戰車が戰闘中に故障になつた場合は、乗員は故障を直しながら戰闘を繼續する。しかし、もし敵の重圍に陥つてゐて、故障を直すことが出来ない場合は、戰車は持つてゐる火器、即ち砲や機關銃で彈丸の盡きるまで戦ふのである。更に砲弾も機關銃弾も盡きたら、拳銃や銃劍で戦